鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (214) 鶴丸城跡保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

かごしまっるまる じょうあと 鹿児島(鶴丸)城跡

(鹿児島市城山町ほか)

- 北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡ほか -

2022年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・小菊瓦

序文

鹿児島城跡は、慶長6 (1601) 年頃に初代薩摩藩主、島津家久 (18代当主) により築かれた城で、別名鶴丸城と呼ばれています。令和2 (2020) 年4月、御楼門が再建され400年にわたる鹿児島城跡の歴史の中でも非常に大きな画期を迎えました。

鹿児島城跡では、今日まで度重なる建物の消失や再建、石垣の崩落や修復を繰り返してきました。近年では、石垣の孕みや亀裂等がみられるようになっており、史跡の保全を目的として平成24年度から平成26年度の3か年にわたり、石垣の現況基礎調査、石垣保全測量等の鹿児島城跡の石垣整備事業を実施してきました。この結果を受けて、必要な箇所については修復工事を目的とした鶴丸城跡保全整備事業が実施されることとなりました。

本書は、平成26年度~30年度、令和2年度の鶴丸城跡保全整備事業に伴う発掘調査の成果を記録した発掘調査報告書です。部分的な調査にも関わらず、能舞台跡や外御庭跡の井堰を伴う堀、本丸内御庭の庭園状遺構が確認され、鬼瓦をはじめとする瓦や陶磁器類等、江戸時代の城内の様子を物語る遺物が多量に出土しました。これらの考古学的成果は、これまで知られていなかった鹿児島城跡の城としての機能・構造を解明し、既存の文献や絵図等を裏付ける基礎資料となるものです。本書が未来につながる鹿児島城跡の保全整備と、これまで明らかにされていなかった地域史の再発見やまちづくりの一助となれば幸いです。

結びに、円滑な埋蔵文化財発掘調査に御理解・御協力をいただいた地域の皆様、御支援・御協力いただいた関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和4年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 中 原 一 成

報告書抄録

| | 1 | | | | | | | | | |
|---|---|---|--|--------------------|----------------------|---|---|---|--|--|
| ふりがな | かごしま(つ | かごしま(つるまる)じょうあと‐きたごもんあとしゅうへん・おすみやぐらあとしゅうへん・のうぶたいあと‐ | | | | | | | | |
| 書名 | 鹿児島(鶴丸 | ・ | | | | | | | | |
| 副書名 | 鶴丸城跡保全 | 整備事業に伴 | う埋蔵文化財 | 発掘調査報告 | 2 | | | | | |
| シリーズ名 | 鹿児島県立埋 | 蔵文化財セン | ター発掘調査 | 報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第 214 集 | 第 214 集 | | | | | | | | |
| 編集者名 | 西野元勝・黒 | 西野元勝・黒木梨絵・山下智沙子・彌榮久志・三垣恵一・浅田剛士・金子智 | | | | | | | | |
| 編集機関 | 鹿児島県立埋 | 蔵文化財セン | ター | | | | | | | |
| 最大地 | 〒 899-4318 | 鹿児島県霧島 | 市国分上野原 | 頁縄文の森2番 | \$1号 | | | | | |
| 所在地 | 電話 0995-4 | 18-5811 ファ | ックス 0995 | 5-48-5821 | | | | | | |
| 発行年月 | 西暦 2022 年 | 3月 | | | | | | | | |
| ふりがな | ふり | がな | 3- | ード | 11.44 | ±.40 | == +++n HH | 調査面積 | ==+10 | |
| 所収遺跡名 | 所名 | 生地 | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | (m²) | 調査起因 | |
| かごしま (つるまる) 鹿児島 (鶴丸) _{じょうあと} 城跡 | 鹿児 かご! 鹿児 しろや! 城L | まけん 島県 しまし 島ちょう 山町 か | 46201 | 201-62 | 31° 35' 54. 0″ | 130° 33' 20. 4″ | | ① 85 ② 302 ③ 890 ④ 1208 ⑤ 660 ⑥ 87 | 鶴丸城跡 保全整備 事業に伴う 確認調査 | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | | 特記事項 | |
| | | 縄文~中世 | | - | | 縄文土器,成川式土器,白磁,青磁,青花 | | | | |
| 鹿児島城跡 | 近世 | | 石管水道,排水溝,石列,石垣,裏込め,堀,坪地業,布地業,瓦溜り,池状遺構,庭園遺構,庭石,外御庭跡堀,井堰,能舞台橋掛り跡 | | | 原代間・陶器・朝鮮系凡), 柴付 (肥削, 施設を多肥前系, 薩摩), 青花 (中国), 陶器 (薩確認。能摩・肥前・第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第二、第 | | | 城内の水利 施設を多く 確認。能舞 台の橋掛り 跡を確認 | |
| | | 近・現代 | | 良,排水溝,。 造士館プール関 | | 陶磁器, 石 鉛玉·薬莢· | 桟・軒丸・軒平製品(硯),金) 古銭),骨製品((薬瓶・インク糸 | 属製品(釘・ 歯ブラシ・櫛) | 明治 10 (1877)年 関係の遺物 を確認 | |
| 遺跡の概要 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書城跡は慶長 6 (1601) 年頃に薩摩藩初代藩主島津家久により築城された館づくりの近世城郭である。別名鶴丸城跡とも呼ばれ、築城以降、度重なる大火による焼失や自然災害による建物、石垣の等崩落、修復を繰り返し、現在は一部の石垣と堀、橋が残されている。本事業における発掘調査では、近世城郭を構成する遺構として、石管水道、排水溝、井堰、堀等の水利遺構、石列、石垣、裏込め等の石垣関連以降、坪地業や布地業、瓦溜りといった建物関連遺構、池状遺構、庭石といった庭園遺構、能舞台橋掛り跡を確認した。遺物は、多量の瓦を中心に他地域からの搬入品を含めた陶磁器、石製品、金属製品、木製品が出土した。特に瓦は近代までに及ぶ多種多様な種類の瓦が出土している。また、明治34 (1834) 年に建てられた官立第七高等学校造士館や戦後の鹿児島大学等に関連する遺構・遺物も確認された。さらに、エンフィールド銃の銃弾等、明治10 (1877) 年の西南戦争関連の遺物も出土している。本書では、特に本丸跡を中心としたこれまでの発掘調査成果と本事業で確認された建物遺構や本丸全体の水利施設、能舞台跡の位置づけ、出土した陶磁器及び瓦の分類や時代ごとの変遷を明らかにした。文献・絵図・古写真等と発掘調査の成果が整合する部分もあり、南九州における近世城郭の様相や機能、変遷、社会情勢の一端をうかがえる資料となった。 | | | | | | | | | |



鹿児島 (鶴丸) 城跡位置図 (S=1:50,000)

例 言・凡 例

- 1 本書は、平成 26 ~ 令和 2 年度に実施した鶴丸城跡保全整備 事業に伴う鹿児島 (鶴丸) 城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であ る
- 2 発掘調査は、鹿児島県教育庁文化財課が調査主体となり、鹿児 島県立埋蔵文化財センターが実施した(以下,県立埋文センター)。
- 3 整理・報告書作成作業は,平成 28 ~ 令和 2 年度に鹿児島県 立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本遺跡は通称「鶴丸城」と呼称される場合もあるが、他の機関 等で使用している場合等を除き、本書では文献にある「鹿児島城」 を使用する
- 5 本書で用いる「薩摩藩」は「薩摩国」,「大隅国」,「日向国の一部」を含めた広義の意味でのものとして用いる。
- 6 発掘調査における実測図作成は調査担当者が行い,一部は株式 会社九州文化財研究所,新和技術コンサルタント株式会社に委託 して作成した。
- 7 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い,空中写真撮影は株式会社ふじた,九州航空株式会社に委託して撮影した。
- 8 発掘調査成果の内容及び土層の色調等の表現については、原則 として現場担当者による注記を用いた。また、土色の記述にあたっ ては、「新版 標準土色帖」、陶磁器胎土色は「標準色カード 230」 (いずれも日本色研事業株式会社発行) に基づき、掲載した。
- 9 本書の地図は、国土交通省国土地理院発行の「鹿児島」(縮尺 1/50,000)「鹿児島北部」(縮尺 1/25,000) の地形図を複製し、 第 1 図は国土交通省地理院発行の「鹿児島」(縮尺 1/200.000) の地質図を複製して使用した。
- 10 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面 直角座標第X系による。
- 11 調査区を 5 m 間隔のマス目 (グリッド) で区切り, 調査を行った。グリッドは御角櫓南東角を基準として東(国道 10 号線)側の石垣に平行に軸及びグリッドを設定した。
- 12 本書で使用した方位は磁北である。
- 13 各遺構図で用いたトーンについては、各図面に凡例を示す。
- 14 遺物への注記は、遺跡名をアルファベット 3 文字で「KSJ」と表し、出土地点・出土層位等を記入した。
- 15 掲載遺物番号は通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の遺 物番号と一致する。
- 16 整理・報告書作成作業における遺物の実測図・トレース図作成 に係わる業務は、黒木梨絵・西野元勝・馬籠亮道が会計年度任用 職員(整理作業員)の協力を得て行った。また、陶磁器の一部を 株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究 所、株式会社島田組に委託し、黒木・西野が監修した。
- 17 軒瓦の同定・分類は金子智(株式会社乃村工藝社)が行い, 瓦 全般に関する指導・助言及び玉稿をいただいた(第V章第5節)。
- 18 瓦の種別分類, 瓦製作地同定, 軒丸瓦・軒平・軒桟瓦・小菊瓦 の観察表作成は金子の監修をもとに西野・山下智沙子が行い, 刻 印分類・分類表作成は山下・西野が行った。
- 19 瓦の観察表において、以下の簡略表現を用いた。
 - 瓦径 ightarrow 瓦当直径 文径 ightarrow 文様区直径 内径 ightarrow 主文様直径 芯径 ightarrow 花芯直径 瓦厚 ightarrow 瓦当厚さ 体幅 ightarrow 体部の奥行き

観察表における「掲載」項等では、既刊の発掘調査報告書における報告書名を以下のように略し、併せて掲載番号等を示した。 本丸:県(26)「鹿児島(鶴丸)城本丸跡」1985 二丸:県(60)「鹿児島(鶴丸)城跡二之丸遺物編」1991 市二丸 G:市(28)「鹿児島(鶴丸)城二之丸跡 G 地点」2000 楼門:県(205)「鹿児島(鶴丸)城跡 - 御楼門跡周辺 -」2020 犬追:県(211)「鹿児島城跡(犬追物 h 馬場・火除地)」2021 総括:県(215)「鹿児島県(鶴丸)城跡 - 総括報告書 -」2022 保存活用計画:「鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画」2018 修景整備報告書:「鹿児島(鶴丸)城跡修景整備報告書」2019

20 瓦の分類について

出土した瓦は , 40cm × 60cm × 15cm の容量のコンテナ約 2,000 箱に及ぶ量であり,その大半は平瓦・丸瓦および桟瓦の細片である。本報告では,瓦当文様を有する軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・小菊瓦について文様により分類を行い,各分類のうち遺存状態の良好なものを図化し示した。なお,これらのうち文様の一部しか確認できない破片資料については,一部特徴的なものを除き,別分類と思われるものについても分類番号を設定していない。今後の類例の増加等により全形が判明した際,改めて分類が設定されることが期待される。

今回分類を行わなかった他の瓦種については、遺存状態の良好なものおよび特徴的なものを図示した。以下に瓦の分類基準,ならびに軒丸瓦,軒平瓦,軒桟瓦,小菊瓦の分類概要を右図に示す。

- 21 挿図の縮尺は, 挿図ごとに示した。基本的に瓦は S=1/4, 陶磁器は S=1/3, 木器は 1/4, 鉄製品は 1/2 とした。
- 22 遺物観察表で示した部位ごとの計測値は欠損している場合()を用いる。
- 23 出土遺物の写真撮影は、西野・西園勝彦・鮫島えりなが行った。
- 24 本書にかかる自然科学分析は、瓦の胎土分析(蛍光 X 線分析及 び薄片顕微鏡観察)は株式会社パリノ・サーヴェイに、樹種同定・ 放射性炭素年代測定、花粉分析及び植物珪酸対分析、土製品の蛍 光 X 線分析または薄片顕微鏡観察を株式会社古環境研究所に委託 し、山下が監修した。
- 25 木製品・鉄製品は、県立埋文センターで保存処理を行った。
- 26 本遺跡は「鶴丸城跡」と呼称されるが、正式名称は「鹿児島城跡」である。ただし、県指定史跡の範囲は「鹿児島(鶴丸)城跡」となっているため、県史指定史跡の範囲およびそれに準じる範囲には「鹿児島(鶴丸)城跡」を、それ以外の範囲に関しては「鹿児島城跡(地区名)」を用いる。
- 27 本書の編集は西野・黒木・山下が行った。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章 山下・西野,第Ⅱ章・第Ⅲ章 西野・彌榮・三垣・山下, 第Ⅳ章 各分析担当者・山下,第Ⅳ章 西野・彌榮・三垣・浅田 剛士・金子

28 発掘調査・整理作業にて御指導・御助言をいただいた方々は以下のとおり。

揚村固,淺川道夫,鰺坂徹,池畑耕一,大木公彦,太田秀春,小野健吉,金子智,上村俊雄,河崎絵衣,岸野純一,北垣聰一郎,北村良介,北野博司,齋藤達志,嶋谷和彦,高橋信武,寺田仁志,戸﨑勝洋,中村直子,西形達明,橋本達也,本田道輝,松井敏也,松尾千歳,三木靖,宮武正登,本中眞,山本達也,吉村龍二,渡辺芳郎,長崎市教育委員会,長崎県立埋蔵文化財センター,苓北町教育委員会

- 29 本書に掲載する氏名はすべて敬称,職名,所属を略する。
- 30 出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、県立埋文センターが 保管し、展示活用を図る予定である。

瓦分類の概要

| 瓦種 | ここでは屋根の各部分で使い分けられ、形の異なる瓦の種類を「瓦種」と表現する。複数の瓦種によって一つの屋根が構成されるが、 屋根の形によって使われる瓦種や使われない瓦種がある。また他の瓦種を加工することによって利用することも少なくないため、同形 態の屋根でも使用されていない瓦種がある。例えば、熨斗瓦という瓦種は専用に制作されることは少なく、平瓦を縦に割って横使いす ることが多い。瓦種の呼称は時代や地域等によっても異なる。 |
|-------|---|
| 文様の表記 | 一般的な文様を指す場合は「文」(例:連珠三巴文)、家紋を指す場合は「紋」(例:牡丹紋)の文字を用いた。枠やマークと組み合わされる場合は「丸に $\bigcirc\bigcirc$ 文(紋)」「山に $\bigcirc\bigcirc$ 文(紋)」と表現した。なお、通常すべてに枠のあるもの(連珠三巴文や牡丹紋など)では「丸に」を省略している。刻印等の文様表記に「 \bigcirc 」とあるものは文字を指す(例:「山」刻印)。 |
| 分類方法 | 出土した瓦は瓦種ごとに分類し、分類番号を付した。瓦の軒先に付される「垂れ」の部分を「瓦当 (がとう」と呼び、軒瓦 (軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦) はこの「瓦当文様 (がとうもんよう)」を基準に分類した。小菊瓦は棟瓦であるが、瓦当に対応する文様面を有するため、この文様を基準とした。江戸時代の瓦は基本的に型 (木型: 范<はん>) で作られるため、この型によって分類し、文様の構成が同じでも型が違うものについては別の番号としている。 分類番号は、軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦は多数にわたるため、あらかじめ文様の系統別に大分類を行い (アルファベット大文字で表現)、その後、連番を付した。なお、各大分類ごとの番号の数字については、確認された順に随時付しているため、順序においては意味や法則性はない。そのため類似した文様が離れた番号になっているものが多数あることを留意されたい。 分類においては、既報告資料で分類可能なものについても、報文等により極力分類に含めるよう努めたが、実見できなかった資料については確定しがたい部分がある。今後精査が必要である。 なお、屋根は複数の瓦種で構成されているため、それぞれのセット関係を把握する必要があるが、多くの資料が混在して出土しているためセット関係を把握できたものは少ない。確実性が高いと考えられるものについてのみ観察表に記した。 |

1 軒页

江戸時代の瓦葺屋根では、軒先の瓦にはほぼ文様が入る。文様は笵 (木型・スタンプ) で押されるため、屋根には原則として同じ模様の瓦が並ぶ。 軒桟瓦は単独で軒を構成するが、軒丸瓦と軒平瓦は組み合わせて使用される。

(1) 軒丸瓦の分類

| 概要 | 軒丸瓦は、軒平瓦とともに本瓦葺屋根の軒先を飾る。桟瓦葺でも少数使用される。 軒丸瓦の文様には、江戸時代には「連珠三巴文」が一般的に用いられている。既製品の瓦にはほぼ全国的にこれが使われており、職 人はこれを水の渦巻きと解して、火事防止への願いを込めたものともいわれる。 連珠三巴文以外の文様が用いられている場合は、特注の「家紋瓦」である可能性が高い。ただし、鹿児島城の場合は朝鮮系と思われる独自の文様が見られるため、これらは単独のデザインと考えられる。 軒丸瓦の文様は隅軒丸瓦や鳥伏間瓦など、円形の瓦当を有する瓦にも流用されている。 |
|-----|--|
| 大分類 | 瓦当文様により、以下の3種に大別した。 A種:連珠三巴文 B種:牡丹紋(島津家家紋瓦) C種:それ以外の文様 分類数は既製文様であるA種が多く、次いでB種・C種となる。観察表中珠文数の()は推定数。巴文の巻きについては、左右表記が異なる場合があるが、ここでは頭の向いている方向を基準に右巻、左巻と表現した。 |

(2) 軒平瓦・軒桟瓦の分類

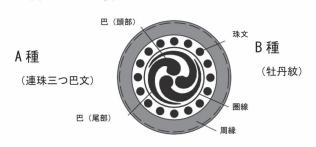
| (2) +1 1 20 | 軒伐此の方規 |
|-------------|---|
| | 軒平瓦は、軒丸瓦とともに本瓦葺屋根の軒先を飾る。桟瓦葺でも少数使用される。 |
| | 軒平瓦の文様は、江戸時代には「均整唐草文」が一般的に用いられる。左右対称のつる草文様で、「中心飾り」から左右に展開する「唐 |
| | 草」(巻き込みのある単位),「子葉」(巻き込みのない単位) の組み合わせから成るものが多いが,連続するものもあり表現は様々である。 |
| | 江戸時代の後半になると,生産の活発化に伴って文様の画一化が進み,地域色が生じる。均整唐草文以外の文様は江戸時代には稀である。 |
| | 軒桟瓦は、軒丸瓦と軒平瓦を結合した形状の瓦で、江戸時代中期以降に普及した新しい形の瓦である。軒先の丸い部分を「軒丸部」、 |
| 概要 | 細長い部分を「軒平部」と称する。軒丸部は鹿児島城の場合、軒先から見て向かって左側に付く。桟瓦の引掛けが軒先から向かって左 |
| | 側にあり、全国的にもスタンダードな形状である。軒丸部の文様は、軒丸瓦の文様を踏襲した連珠三巴文や、その省略形の三巴文(連 |
| | 珠帯が無い)が使われるほか,稀に家紋が使用される。また軒丸部を完全に省略したものも見られる(本報告では形状から「鎌形軒桟瓦」 |
| | と記した)。軒平部には軒平瓦の文様が踏襲される。 |
| | 軒平瓦と軒桟瓦は、向かって右側の破片では識別が難しい。軒桟瓦の文様分類についても主に軒平部で行っているため、ここでは「軒」 |
| | 平・軒桟瓦」として一括して分類番号を付した。 |
| | 軒平部の瓦当文様により、以下の3種に大別した。 |
| | A:「大坂式」(大坂地域を中心に近世後半広く流布した文様構成)。 |
| | 文様構成は、中央から中心飾り―上向きの唐草―子葉という組み合わせが基本形。中心飾りは、中央に橘状の要素があり、両脇に Y |
| | 字の要素、両脇下部に横に広がる要素がある。(中心飾りの「中央上」「中央下」「脇上」「脇下」と表現。) |
| 大分類 | B:仮称「鹿児島式」(「大坂式」文様をベースに創案されたと思われる文様。文様両端下方に、唐草もしくは子葉一対が配されるのが特徴) |
| | C: 大坂式の変形 (「大坂式」文様をベースに創案されたと思われる文様。両端に「く」の字形の子葉を配する) |
| | D: その他 なお、A種のうち、Y字状の中心飾りの脇および子葉に深く切れ込みが入るタイプはこの地域に特徴的なもので、B種と |
| | ともに江戸後期以降の鹿児島地域の瓦を象徴する文様とみられる(現存建築に見られる軒桟瓦の文様も多くはこれらに属するようであ |
| | [5.) |

(3) 棟込瓦

棟瓦のうち、飾り瓦として使用される瓦を棟込瓦と呼ぶ。鹿児島城では小菊瓦と輪違瓦が確認されているが、ここでは文様を有する小菊瓦のみを分類対象とした。

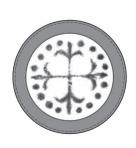
| 規列隊しした。 | |
|---------|---|
| 概要 | 小菊瓦は、屋根の棟において熨斗瓦の間に差し込んで飾りとして用いられる。小菊瓦の文様は伝統的に菊花文が定番的に用いられる (巴文・連珠三巴文が使われることもあるが少ない)。菊花文以外が使われる場合は、軒丸瓦同様家紋の可能性が高い。 |
| 大分類 | 瓦当文様により分類した。菊花文以外に「三追柊紋」1種が確認されているが、分類少数のため一括して連番とした。 |

軒丸瓦文様

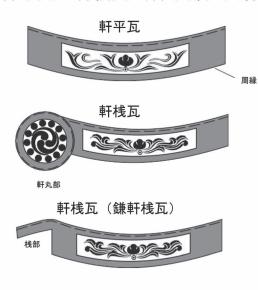




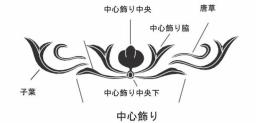
C種 (その他)



軒平瓦•軒桟瓦(軒平部)文様



A 種 (「大坂式」)



B 種 (「鹿児島式」(仮))



C種 (「大坂式」の変形か)



D種 (その他)

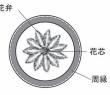


瓦当幅 (cm)

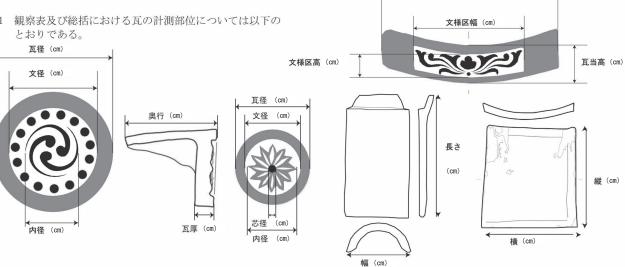
(※一例)

小菊瓦文様

(菊花紋)



31 観察表及び総括における瓦の計測部位については以下の



目次

| 序文 | | | 爭 | 3 | | 各地点の調査成果 | |
|-------------|---|----|----------|------|----|--|------------|
| 報告書 | 少録 | | | 1 | 徝 | 卸進物蔵跡····· | . 8 |
| 例言・. | 孔例 | | | 2 | | 比御門跡周辺 | |
| 第Ⅰ章 | 発掘調査の経過 | | | 3 | 4 | 比御門跡周辺石垣修復 | - 26 |
| 第 1 1 | 節 調査に至るまでの経緯 | 1 | | 4 | 往 | 卸兵具所跡····· | - 39 |
| 第21 | | | | 5 | 徝 | 卸楼門跡南側石垣周辺 | · 46 |
| 第31 | 節 発掘調査の経過 | 1 | | 6 | | 卸角櫓跡周辺····· | |
| | 節 整理・報告書作成作業の経過 | | | 7 | | 卸角櫓跡西側石垣周辺 | |
| 第Ⅱ章 | 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 3 | | 8 | g | 卟御庭跡⋯⋯⋯⋯ 1 | 131 |
| 第Ⅲ章 | 調査の方法と成果 | | | 9 | 往 | 卸池跡····· 1 | 157 |
| 第 1 1 | 節 発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 3 | | 10 | 貟 | 指舞台跡 1 | 162 |
| 第21 | 節 層序 | 7 | | 11 | | 卸楼門跡······ 1 | |
| | | | 第Ⅳ | 7章 | É | 自然科学分析······ | 185 |
| | | | 第V | 章 | 糸 | 総括 1 | 195 |
| | | | 写真 | 図 | 版 | | 249 |
| 插図 | 目次 | | | | | | |
| | | | <i>h</i> | | | 37トレンチ土層断面図(南壁) | ٥r |
| 第 1 | | 4 | 第一 | | | 37トレンチ工暦町面図 (| |
| 第 2 | | 6 | 第一 | | | 37トレンチ 出土遺物 1 | |
| 第 3 | | | 第一 | | | 41 トレンチ 田工退物 2 · · · · · · · · · · · · · · · · · · | . 07 |
| 第 4 | | | 第第 | | | 41 トレンチキョ図・断画侯式図 | . 00 |
| 第 5 | | | | | _ | 41 トレンチエ層断面図 (A ~ F 面) 41 トレンチ庭石 (立石) 石組み見通し断面図 | 71 |
| 第 6 | | | 第第 | | | 41 トレンチ(池) 平面図・見通し断面図 ···································· | יר. ווי |
| 第 7 | | | | | _ | 41トレンチ 出土遺物1 | |
| 第 8 | | | 第 | | | 41 トレンチ 出土遺物 2 | |
| 第 9 | | | 第 | | _ | | |
| 第 10 | | | 第 | | | 御角櫓跡平面図(青:平成4・5年調査分,赤:排水溝蓋)77, 御角櫓跡調査区トレンチ配置図 | |
| 第 11 | | | 第 | | | 御用僧跡調査区トレフテ配直図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · · | . /9 |
| 第 12 | | | 第 | | | 御用僧跡来側石垣兄趙し断面図(①面) 御角櫓跡石垣見通し図(南壁,②面) | |
| 第 13 | | | 第 | | | 御角僧跡七垣兄通し図(斛壁,②面) 御角櫓跡土層断面図(北壁,③面) | |
| 第 14 | | | 第 | | | | |
| 第 15 | | | 第 | | | 御角櫓跡基礎南北・東西トレンチ土層断面図 (A-A', B-B') … 御角櫓跡排水溝①・排水溝②土層断面図 (C-C') | |
| 第 16 | | | 第 | | | | . 00 |
| 第 17 | | | 第 | / 1 | M | 御角櫓跡上段:排水溝①見通し図(東壁, ④面) | |
| 第 18 | | | | | | 御角櫓跡中段:排水溝②見通し図(東壁, ⑤面) 御角櫓跡下段:排水溝②見通し図(西壁, ⑥面)············ | 0.6 |
| 第 19 第 20 | | | 44 | 70 | ভো | 御用僧跡下段: 排水海②見通し図(四壁, ⑤面) ·················· 御角櫓跡排水溝②土層断面図(東西, D-D') ··················· | |
| | | | 第 | | | 御用僧跡排水溝②上層断面図 (東四, D=D) 御角櫓跡排水溝③見通し図 (E-E') | .00 |
| 第 21 第 22 | | | 第第 | | | 御角僧跡排水溝②見通し図 (E=E) 御角櫓跡排水溝②③④土層断面図(東西, F-F') ·········· | .00 |
| 第 23 | | | 第 | | | 御角櫓跡調査区土層断面図(西壁,⑦面) | . 01 |
| 第 24 | | | 第 | | | 御角櫓跡調査区土層断面図(北壁, ⑧面) | |
| 第 25 | | | 第 | | | 御角櫓跡土層(南壁, ⑨面) | |
| AD 20 1 | ④ 布崩し積み石垣 10 段目 平面図3 | | 第 | | | 御角櫓跡上段: J-1・2トレンチ土層断面図(西壁, ⑩面) | 01 |
| 第 26 | | | 7, | , 0 | | 御角櫓跡下段:K-1土管埋設溝土層断面図(西壁, ⑪面)… | . 95 |
| N1 20 1 | ⑦布崩し積み石垣 13 段目 ⑧布崩し積み石垣 14 段目 | | 第 | 79 | 図 | 御角櫓跡 I-1·2区土層断面図 (西壁①面,南壁③面) … | |
| | 平面図 | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物1 | |
| 第 27 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物2 | 101 |
| 第 28 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物3 | 102 |
| 第 29 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物4 | |
| 第 30 [| | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物 5 ······· | |
| 第 31 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物 6 ··································· | |
| 第 32 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物7 ···································· | 109 |
| 第 33 | 図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物4 ··············3 | 39 | 第 | 87 | 义 | 御角櫓跡 出土遺物8 | 110 |
| 第 34 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物9 | 111 |
| 第 35 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物 10 ··································· | 112 |
| 第 36 | | | 第 | | | 御角櫓跡 出土遺物 11 | |
| 第 37 | | | 第 | 91 | 义 | 御角櫓跡 出土遺物 12 | |
| 第 38 | 図 御兵具所跡調査区 出土遺物4 | 4 | 第 | 92 | 义 | 御角櫓跡 出土遺物 13 ······· | 115 |
| 第 39 | | | 第 | 93 | 义 | 御角櫓跡 出土遺物 14 ··································· | |
| 第 40 | 図 御楼門跡南側石垣周辺調査区トレンチ配置図4 | 16 | 第 | 94 | 义 | 御角櫓跡 出土遺物 15 ··································· | 117 |
| 第 41 | 図 御楼門跡南側石垣周辺調査区 遺構配置図4 | 17 | 第 | | | 御角櫓跡西側石垣周辺調査区トレンチ配置図 | |
| 第 42 | | 18 | 第 | 96 | 义 | 46 トレンチ平面図 | |
| 第 43 | 図 43 トレンチ 出土遺物 15 | i0 | 第 | 97 | 义 | 昭和 10 年頃のプール想定図 | |
| 第 44 | 図 43 トレンチ 出土遺物 2 5 | 51 | 第 | 98 | 义 | 46 トレンチ 出土遺物 | |
| 第 45 | 図 43 トレンチ 出土遺物 3 | 52 | 第 | 99 | 义 | 48トレンチ平面図・断面図・土層断面図 | |
| 第 46 | 図 36 トレンチ平面図5 | i4 | 第1 | 00 | 义 | 48 トレンチ 出土遺物 1 | 124 |
| 第 47 | 図 36 トレンチ土層断面図(北壁)5 | 55 | 第1 | 01 [| 义 | 48 トレンチ 出土遺物 2 | |
| 第 48 | | | 第1 | 02 | 义 | 49トレンチ平面図・断面図・土層断面図 | |
| 第 49 | | | 第1 | 03 | 义 | 49 トレンチ 出土遺物 | |
| 第 50 | | 8 | 第1 | 04 | 义 | 昭和53・54年度調査と今回の調査のトレンチの位置対比図 | |
| 第 51 | | | 第1 | | | 47トレンチ平面図・断面図・土層断面図 | |
| 第 52 | | | 第1 | | | 外御庭跡調査区トレンチ配置図 | |
| 第 53 | | | 第1 | | | 32・33 トレンチ平面図 | |
| 第 54 | 図 37トレンチ平面図6 | 64 | 第1 | 80 | 义 | 33 トレンチ石垣立面図 | 133 |

| 第 109 図 | 34 トレンチ平面図 | | 第 134 図 | 能舞台跡 橋掛り 出土遺物 | |
|--------------------|--|-----|--------------------|--|-----|
| 第 110 図 | 32 トレンチ平面図 | | 第 135 図 | 御楼門跡 出土遺物 | |
| 第 111 図 | 32トレンチ井堰遺構東側土層断面図 (東壁) | | 第 136 図 | 鹿児島城跡の木材 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | |
| 第 112 図 | 32 トレンチ井堰遺構 側面図 | 137 | 第 137 図 | 校正年代詳細グラフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | |
| 第 113 図 | 32 トレンチ南側堀埋土状況1 | 138 | 第 138 図 | 花粉ダイヤグラム | |
| 第 114 図 | 32 トレンチ南側堀埋土状況2 | 139 | 第 139 図 | X 線分析試料写真······ | |
| 第 115 図 | 42 トレンチ土層断面図 (東壁・南壁) | | 第 140 図 | 瓦顕微鏡下観察結果 | |
| 第 116 図 | 第七高等学校造士館 排水溝 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | | 第 141 図 | 砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成 | 192 |
| 第 117 図 | 外御庭跡 出土遺物1 ······· | | 第 142 図 | 胎土化学組成散布図 | |
| 第 118 図 | 外御庭跡 出土遺物2 外御庭跡 出土遺物3 | | 第 143 図 | 砕屑物・基質・孔隙の割合 鹿児島城跡絵図① | 192 |
| 第 119 図 | 71阿尼斯 出土运物 | | 第 144 図 | 鹿児島城跡絵図② | 100 |
| 第 120 図 | | | 第 145 図 第 146 図 | 第七高等学校造士館配置図 | 200 |
| 第 121 図 第 122 図 | 外御庭跡 出土遺物5 外御庭跡 出土遺物6 | | 第 140 区 第 147 図 | 鹿児島城跡古写真 | 200 |
| 第 122 区 | 外御庭跡 出土遺物7 | | 第 147 区 第 148 図 | 本丸・二之丸遺構配置図 | |
| 第 124 図 | 外御庭跡 出土遺物8 | | 第 140 区 | 本丸・二之丸遺構配置図と第七高等学校造士館配置図の重ね図 209 | |
| 第 125 図 | 外御庭跡 出土遺物9 | | 第 150 図 | 本丸跡出土陶磁器の変遷図211 | |
| 第 126 図 | 外御庭跡 出土遺物 10 ······· | | 第 151 図 | 18~19世紀の竪野系を中心とした薩摩の陶器 | |
| 第 127 図 | 御池跡調査区トレンチ配置図 | | 第 152 図 | 17 世紀前半の瓦 | |
| 第 128 図 | 53トレンチ平面図・土層断面図 (西壁, 北壁) | | 第 153 図 | 17 世紀中葉~後葉の瓦 | |
| 第 129 図 | 54 トレンチ平面図・土層断面図 (西壁) | | 第 154 図 | 17 世紀末~ 18 世紀前葉の瓦 | |
| 第 130 図 | 御池跡 出土遺物 | | 第 155 図 | 18 世紀後半~19 世紀の瓦 | |
| 第 131 図 | 能舞台跡調査区 平面図 | 163 | 第 156 図 | 刻印瓦刻印一覧 1 ······ | |
| 第 132 図 | 能舞台跡 橋掛り 土層断面図 | | 第 157 図 | 刻印瓦刻印一覧2 | 245 |
| 第 133 図 | 能舞台跡 橋掛り 1,2,3トレンチ土層断面図 | | | | |
| 表目次 | 基準点座標値 | | 第 32 表 | 胎土分析の分析試料 | |
| 第 2 表 | 基本土層 | | 第 33 表 | 蛍光 X 線分析における各元素の定量分析結果 | |
| 第 3 表 | 御進物蔵跡周辺に推定される建物等 | 8 | 第 34 表 | 観察された鉱物組成 | |
| 第 4 表 | 41 トレンチ A・B・C・D・E・F 面土層注記 ······ | | 第 35 表 | 観察された微化石・砂粒物の特徴 | 190 |
| 第 5 表 | 御角櫓跡西壁土層注記 | | 第 36 表 | 試料一覧 | |
| 第6表 | 御角櫓跡 J-1・2西壁土層注記,K-1土管埋設溝西壁土層注記・ | | 第 37 表 | ガラスビード作製条件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | |
| 第7表 | 42 トレンチ土層注記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | | 第 38 表 | 蛍光 X 線装置条件 | |
| 第8表 | 33 トレンチエ暦注記 :::::::::::::::::::::::::::::::::::: | | 第 39 表 | 東方 X 線定重測定案件 | |
| 第9表 | 遺物2 (陶磁器) | 160 | 第 40 表 | 專戶観祭桁未 年表 ······· | |
| 第 10 表 | | | 第 41 表 | 平衣 軒丸瓦分類表1 ···································· | |
| 第 11 表第 12 表 | 遺物3 (陶磁器) | | 第 42 表 第 43 表 | 軒丸瓦分類表 2 | |
| 第 13 表 | 遺物5 (陶磁器) | | 第 44 表 | 軒丸瓦分類表3 | |
| 第 14 表 | 遺物6(陶磁器)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | | 第 45 表 | 軒丸瓦分類表4 | |
| 第 15 表 | 遺物7 (陶磁器) | | 第 46 表 | 軒丸瓦分類表5 | |
| 第 16 表 | 遺物8 (陶磁器) | 175 | 第 47 表 | 軒丸瓦分類表6 | |
| 第 17 表 | 遺物9(土製品・土器・石製品) | | 第 48 表 | 軒丸瓦分類表7 | |
| 第 18 表 | 遺物 10 (木製品) | 176 | 第 49 表 | 軒平瓦分類表1 | 232 |
| 第 19 表 | 遺物 11 (ガラス製品・骨製品・金属製品等) | 177 | 第 50 表 | 軒平瓦分類表2 | 233 |
| 第 20 表 | 遺物 12 (ガラス製品・金属製品等) | 178 | 第 51 表 | 軒平瓦分類表3 | 234 |
| 第 21 表 | 遺物 13 (瓦) | | 第 52 表 | 軒平瓦分類表4 | 235 |
| 第 22 表 | 遺物 14 (瓦) | 179 | 第 53 表 | 軒平瓦分類表5 | 236 |
| 第 23 表 | 遺物 15 (瓦) | 180 | 第 54 表 | 軒平瓦分類表6 | 237 |
| 第 24 表 | 遺物 16 (瓦) | 181 | 第 55 表 | 軒平瓦分類表7 | 238 |
| 第 25 表 | 遺物 17 (瓦) | 182 | 第 56 表 | 軒平瓦分類表8 | 239 |
| 第 26 表 | 遺物 18 (瓦) | | 第 57 表 | 軒平瓦分類表9 | |
| 第 27 表 | 遺物 19 (瓦) | | 第 58 表 | 軒平瓦分類表 10 | |
| 第 28 表 | 分析した木片及び木製品 | | 第 59 表 | 軒平瓦分類表 11 | |
| 第 29 表 | 樹種同定結果 | | 第 60 表 | 小菊瓦分類表 | |
| 第 30 表 | 放射性炭素年代測定結果 | | 第 61 表 | 刻印瓦検出数・瓦種表1 ······ | |
| 第31表 | 観察された花粉類 | 188 | 第 62 表 | 刻印瓦検出数·瓦種表2 ····· | 247 |
| 巻頭図版 | 軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・小菊瓦 | | 図版 13 | 外御庭跡 | |
| 図 版 1 | 御進物蔵跡・北御門跡土橋 | | 図版 14 | 外御庭跡 | |
| 図 版 2 | 北御門跡石橋周辺 | | 図版 15 | 外御庭跡・御池跡・能舞台跡 | |
| 図 版 3 | 北御門跡石橋周辺·石垣修復 | | 図 版 16 | 陶器瓦・古瓦・朝鮮系瓦 | |
| 図版4 | 北御門跡石垣修復・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | | 図版17 | 長崎瓦 | |
| 図版5 | 北御門跡石垣修復・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | | 図版18 | 丸瓦・平瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | |
| 図版6 | 御兵具所跡・御楼門跡南側石垣周辺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | | 図版19 | 桟瓦・塀瓦・海鼠瓦・塼瓦 ······ | |
| 図版7 | 御楼門跡南側石垣周辺 | | 図版20 | 鬼瓦 | |
| 図版8 | 御楼門跡南側石垣周辺 | | 図版21 | 主要陶器類(1) | |
| 図版9 | 御楼門跡南側石垣周辺·御角櫓跡周辺 ···································· | | 図版22 | 主要陶器類(2) | |
| 図版10 | 御角櫓跡 | | 図版23 | 土製品・金属製品・硯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | |
| 図版11図版12 | 御角櫓跡 | | 図版 24 | 木製品・近代陶磁器・ガラス製品 | 212 |
| 11/X 1/2 | (원) / 그 1 후 보기 (그) 전기 (나 주보 / 다) / 소 | 200 | | | |

第 I 章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

調査に至るまでの経緯については、同じく鶴丸城跡保 残整備事業の『鹿児島(鶴丸)城跡-御楼門跡周辺-』 (鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021・以下『御楼門跡 周辺』)で既に述べている。そのため、本書では、必要 でない限りは『御楼門跡周辺』刊行された令和2年度以 降の内容について述べることとする。

本報告書は、鶴丸城跡保全整備事業で実施した平成26~30年度の5年間で発掘した調査面積3,145㎡ののうち、御楼門周辺部分1,350㎡分を除いた1,795㎡および北御門跡周辺石垣修復に伴う発掘調査87㎡についての成果を記載する。なお、経過については、平成27年度以降の事業を含めて第2節以下に記載した。

第2節 鶴丸城跡保全整備事業について

鶴丸城跡保全整備事業については、『御楼門跡周辺』 にゆずり、本書では鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家 検討会議のうち、『御楼門跡周辺』刊行以降の令和2年 度に開催された会議の検討議題のみを記載する。

委員:三木靖,宮武正登,原口泉,渡辺芳郎,大木公 彦,北村良介,寺田仁志,松井敏也,麓和善 オブザーバー:文化庁

会議の項目

令和2年度

第1回(令和2年7月20日開催)

概要:令和2年度事業概要,北御門周辺部石垣の修復,修景整備計画(園庭),地下水位観測等の概要,次年度の事業計画(国指定史跡に向けて,御角櫓跡石垣修復に向けて),現地視察(北御門周辺部石垣修復工事,御楼門・修景整備予定地)

第2回(令和2年12月16日開催)

概要:国指定史跡に向けて(これまでの調査成果,文献調査の状況),北御門跡周辺部石垣の修復,唐御門跡の発掘調査,現地視察(北御門周辺部石垣・黎明館駐車場・大手口・照國神社・城山二之丸跡)

令和3年度

第1回(令和3年7月12日開催)

概要:鶴丸城跡保全整備事業について(今後の事業の進め方,過去に実施した調査成果,鹿児島城跡石垣台帳,今後のスケジュール),国史跡指定に向けた取組(令和3年度の取組,令和3年度の発掘調査状況(鹿児島県・鹿児島市),国指定範囲,総括報告書の構成とイメージ,

令和2年度文献調査の成果,今後のスケジュール),関連の試掘調査,鶴丸城跡VRアプリ作成事業,現地見学(本丸大奥跡)

第3節 発掘調査の経過

1 本調査

平成26年度から平成30年度までの発掘調査の経過については『御楼門跡周辺』にゆずり、令和2年以降の日誌抄を集約したものを月毎に記載する。

令和2年度

6月(令和2年6月1日~6月29日)

北御門跡石垣修復調査区A・B・a~d-37~39区, 調査開始。布崩し積み石垣部分(調査区東側), コンク リートブロック撤去・石垣解体立会, 石垣含む土層断面 図作成。1段目の面, 裏込検出, 石垣裏込めの実測・撮影。 2段目の面, 地覆石検出・実測・写真撮影。3段目の面, 石垣天端検出・実測・写真撮影。布崩し積み石垣部分(調 査区西側), コンクリートブロック撤去・石垣解体立会, 石垣含む土層断面図作成。石垣天端・裏込め検出・実測・ 写真撮影。

7月(令和2年7月3日~7月29日)

北御門跡石垣修復調査区A・B・a~d-38・39区, 布崩し積み石垣部分(調査区東側),石垣解体立会,石 垣裏側掘削開始立会,石垣平面図作成,石垣含む土層断 面図作成。谷崩し積み石垣部分(調査区西側),石垣解体, 石垣裏側掘削開始立会,石垣平面図作成,石垣含む土層 断面図作成。胴木検出・実測・写真撮影。石垣全体,前 段階の堀跡検出・掘削・写真撮影・平面実測。

8月(令和2年8月3日~8月12日)

北御門跡石垣修復調査区A・B・a ~ d - 37 ~ 39 区, 堀側東壁・南壁土層断面実測・写真撮影。東・西土層断 面実測図確認及び写真撮影(天端石~堀底)。鶴丸城跡保 全整備に係る専門家検討会議の現地協議対応,撤収作業。

2 調査体制

本項目についても、令和2年度以降を記載する。

令和2年度

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 前迫亮一

調査企画 " 次長兼総務課総務課長 野間口誠

調査課長兼南の縄文調査室長中村和美

" 調査課第一調査係長 三垣恵一

調査担当 " 文化財主事 山崎克之

" 文化財主事 西野元勝

事務担当 "総務課主事 日置淑乃

来跡・指導助言

御楼門復元専門家委員会,鹿児島市鹿児島城跡調査職員研修(遺跡見学),揚村固,大木公彦,北村良介,三木靖,宮武正登,渡辺芳郎

第4節 整理・報告書作成作業の経過 1 作業の経過

本項目についても、令和2年度以降を記載する。

令和2年度

遺物洗浄,選別,注記,接合,復元,実測,拓本,トレース,計測,レイアウト,遺構図面整理,遺構図面トレース,デジタルデータ(トータルステーションデータ等)整理,統合,トレース,レイアウト,現場写真整理,選別,遺物撮影,遺物レントゲン撮影,写真レイアウト,文章作成,陶磁器実測委託業務,自然科学分析委託(瓦の胎土分析,銃弾の組成分析)。

指導助言:大木公彦,太田秀春,金子智,小林善仁, 丹羽謙治,原口泉,松尾千歳,渡辺芳郎

令和3年度 本報告書刊行年度

遺物洗浄,選別,注記,接合,復元,実測,拓本,トレース,計測,レイアウト,遺構図面整理,遺構図面トレース,デジタルデータ(トータルステーションデータ等)整理,統合,トレース,レイアウト,現場写真整理,選別,遺物撮影,遺物レントゲン撮影,写真レイアウト,文章作成,陶磁器実測委託業務,自然科学分析委託契約(瓦・陶磁器・石製品の胎土分析・組成分析)

指導助言:金子智,三木靖,渡辺芳郎

2 整理作業の体制

令和2年度

整理担当 馬籠亮道文化財主事,山崎克之文化財主事, (黒木梨絵文化財主事,西野元勝文化財主事),三垣恵一 調査課第一調査係長

令和3年度

整理(本報告書作成)担当 西野元勝文化財主事, 黒木梨絵文化財主事(~6月), 彌榮久志文化財研究員(7月~),山下智沙子文化財主事,三垣恵一調査課第一調査係長,(浅田剛士文化財主事)

なお、令和2年度~3年度の報告書作成指導委員会及 び検討委員会は以下の日程で実施した。

<報告書作成指導委員会>

令和2年度

第1回 6月2日, 第2回8月4日 第3回 10月7日, 第4回 11月4日, 第5回 11月24日, 第6回 2月1日 出会者:中村和美調査課長兼南の縄文調査室長,三垣恵一調査課第一調査係長,横手浩二郎調査課第二調査係長,財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター寺原徹調査課長,福永修一調査第一係長,有馬孝一調査第二係長,黒川忠広調査第三係長,馬籠亮道文化財主事,山崎克之文化財主事

令和3年度

第1回 6月3日, 第2回 8月4日

第3回 10月6日, 第4回 11月2日

第5回 11月25日

出会者:寺原徹調査課長兼南の縄文調査室長,三垣恵一調査課第一調査係長,西園勝彦調査課第二調査係長,財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター福永修一調査課長,永濱功治調査第一係長,有馬孝一調査第二係長,黒川忠広調査第三係長,黒木梨絵文化財主事(~6月),西野元勝文化財主事,山下智沙子文化財主事,彌榮久志文化財研究員(7月~)

<報告書作成検討委員会>

令和2年度

第1回 6月8日, 第2回 8月7日

第3回 10月9日, 第4回 11月10日

第5回 11月26日, 第6回 2月5日

出会者:前迫亮一所長,野間口誠次長兼総務課長,山下 勝史主幹兼総務係長,中村和美調査課長兼南の縄文調査 室長,東和幸南の縄文調査室長補佐,三垣恵一調査課第 一調査係長,横手浩二郎調査課第二調査係長

令和3年度

第1回 6月3日, 第2回 8月4日,

第3回 10月6日, 第4回 11月2日,

第5回 11月29日

出会者:中原一成所長,大口浩嗣次長兼総務課長,山下勝史主幹兼総務係長,寺原徹調査課長兼南の縄文調査室長,東和幸南の縄文調査室長補佐,三垣恵一調査課第一調査係長,西園勝彦調査課第二調査係長

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本項目は、『御楼門周辺』で既に示されているため省略。

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

発掘調査の対象となる調査位置・範囲については鶴丸 城跡保全整備事業の計画及び関係機関との協議を基に設 定した。平成26~30年度は、石垣及び関連遺構の調査 を主とし、石垣背面構造や排水溝等、遺構の残存状況の 調査を行った。また、御楼門枡形虎口周辺の石垣に関連 する遺構(礎石・石畳・排水溝等)の調査も実施した。 令和2年度は、平成27年6月12日に大雨の影響で崩落 した北御門跡対岸の石垣修復に伴う発掘調査を行った。

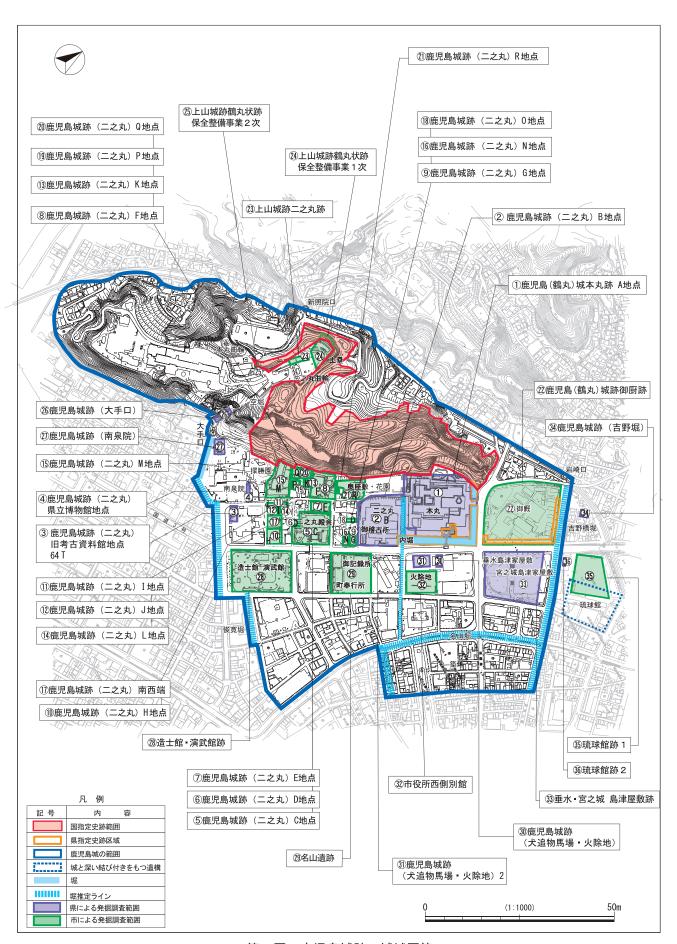
発掘調査は当初, 先行確認調査として2×4m程度の トレンチを設定し、必要に応じて調査範囲を拡張した。 表土は厚さ 10 ~ 30cm 程度あり、バックホー等の重機で 薄く掘削しながら除去し,表土除去後,人力で山鍬,鋤 簾,移植ごて、ねじり鎌等を用い、掘削した。遺構面及 び遺物の周囲は移植ごて、竹べら、竹串、手箒等を使 い, 丁寧に検出した。記録保存調査ではないため, 遺構 を検出後,実測・撮影等を行い,調査後は養生シート (寒冷紗) を覆うことで遺構表面を保護し、調査前の標 高まで元の覆土等で埋め戻した。遺構は基本的に検出時 と完掘後に写真撮影を行い、必要に応じて調査中の状況 等を撮影した。撮影にはデジタルカメラ (NIKON D3200, PENTAX K-m, Canon EOS Kiss X7, NIKON D5000)を使用し, 35mm フィルムカメラは NIKON FM2, FM3 を使用して白黒 フィルム (富士フイルム株式会社 NEOPAN 100 ACROS) とスライド用フィルム(富士フィルム株式会社 PROVIA 100F) を用い, 職員が撮影した。平成28~31年度は民 間業者に空中写真撮影を委託し、上空から遺跡及び周辺 地形の状況等を撮影した。

遺構等の測量は、平板とトータルステーションを用いて行った。世界測地系の国土座標と周辺の基準点(4級等)や黎明館内の既知の基準杭等を用いてトレンチや遺構の位置等を記録した。遺構の実測や測量は職員が行い、一部は民間業者に委託した。昭和53年の調査で設定したグリッドと同じ配置で調査区を5m間隔で区切り、調査を行った。グリッドは御隅櫓南東角を基準として東(国道10号線)側の石垣に平行にグリッド軸を設定したが平成11年度の石垣修復工事の際に積み替えが行われており、厳密に今回の調査で用いるグリッドに合わせることは出来ない。今回調査で用いた代表的な基準杭の国土座標値(世界測地系)、標高値と位置を第3表、第6図に示す。各調査地点のうち、38~40・50トレンチを御進物蔵跡、c~e-36~38区の調査区・石垣1~3ト

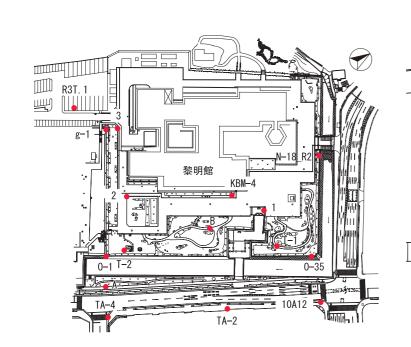
レンチを北御門跡周辺, A~C·a~c-37~39 区を 北御門跡周辺石垣修復地点,550・51・58 トレンチを兵 具所跡、36・37・41・43・44 トレンチを御楼門跡南側 石垣周辺, 11・14 トレンチおよびそれを拡張した I ~ N-1~3調査区を御角櫓跡周辺,46~49トレンチを 御角櫓跡南側石垣周辺, 32~34トレンチおよび32・33 トレンチを拡張した I ~ N -1' ~ 3' 調査区を外御庭 跡, 53・54 トレンチを御池跡, H~ J-11~14 調査区 を能舞台跡として報告する。外御庭跡を除く地点は標高 約11m,外御庭は約7.5mである。なお,調査区の各地 点名については、明治6(1873)年「鹿児島城跡本丸殿 舎配置図」(第4図,以下,成尾常矩指図)に記載され た建物名称を調査地点ごとに当てはめたものである。た だし、成尾常矩指図で「堀」となっている外御庭につい ては、他の堀との混同を避けるため、天保 14年 (1843) 年「天保年間鹿児島城下絵図」第145図⑥に書かれてい る外御庭跡を用いる。これは, 鹿児島城内の建物は大火 やシロアリの被害等によって複数回建て替えられ、建物 の配置等が変わっていると考えられること, 発掘調査は 遺構保護のため掘削を江戸時代の最終段階の遺構面を確 認した時点で止めており、調査で確認された遺構は明治 6 (1873) 年「鹿児島屋形及びその周辺」と整合する可 能性が高いためである。調査で確認された遺構の位置付 けついては、鹿児島城の絵図等を参考にした。今回、特 に参考にした絵図等については,第144~148図に示す。

遺物取り上げの際、一部についてはトータルステーションで位置情報を記録したが、包含層から出土したものは少なく、攪乱層や近現代の造成土から出土したものは層及びグリッド(トレンチ)の範囲で一括して取り上げた。その後、発掘調査事務所プレハブや埋蔵文化財センターで洗浄、選別作業を行い、大量に出土した瓦は軒の瓦当文様から型式が分かるものと比較的破損の少ないものを取り扱うこととした。

整理作業は、平成27年度から埋蔵文化財センター及び発掘調査事務所で実施した。出土遺物は洗浄、注記、選別、接合、復元、実測、トレース、レイアウト、写真撮影等を行い、遺構は図面整理、図面の統合、トレース、レイアウト等の一連の報告書作成の流れで行った。陶磁器の遺物実測トレースと胎土分析等の自然科学分析業務は民間業者に委託した。土層断面図、遺構、遺物のトレースはAdobe社の「Illustrator CC 2021」、「Photoshop CC 2021」を用い、編集レイアウトは「Windows Word 10」で行った。



第1図 鹿児島城跡 城域図等



• TA-5 第2図 測量基準点位置図

第1表 基準点座標值

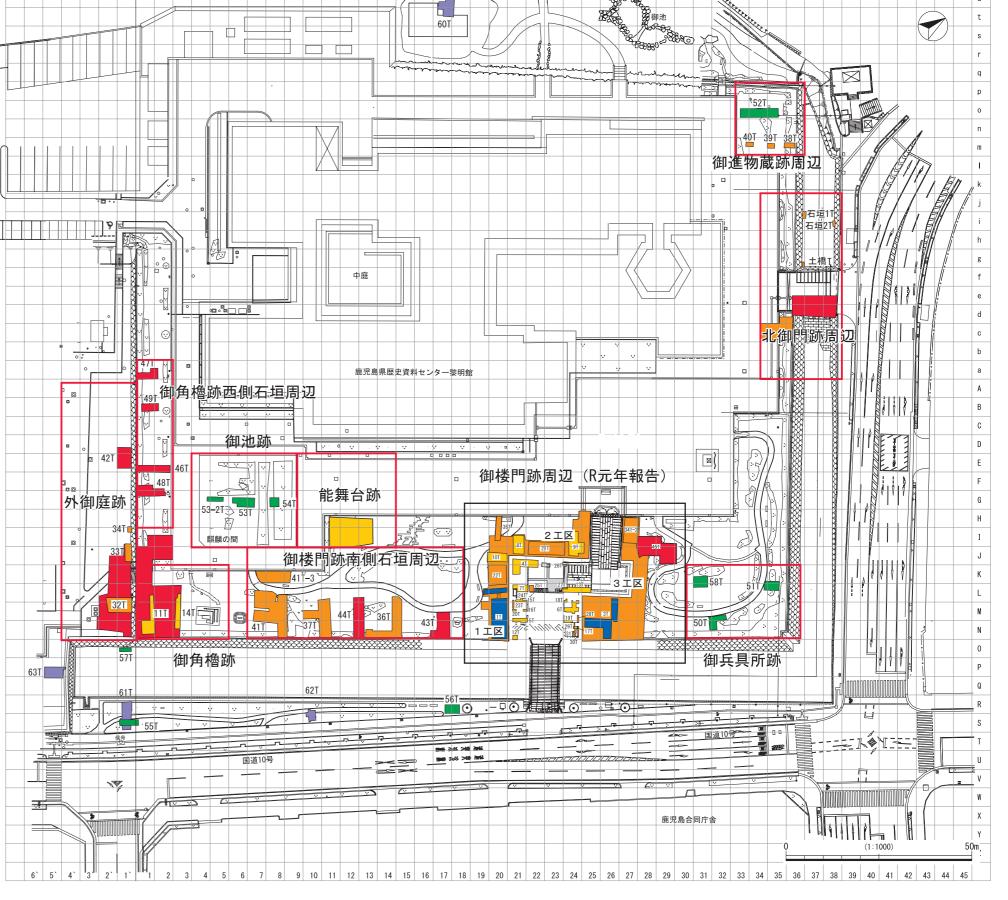
| No. | 点名 | X座標(m) | Y座標(m) | Z座標(m) | 備考 |
|-----|---------|--------------|-------------|---------|----------------------|
| 1 | 10A12 | -155297. 705 | -42094. 160 | 5. 090 | 既設(国道10号東側歩道・公共) |
| 2 | TA-2 | -155365. 873 | -42131. 123 | 5. 101 | 既設(国道10号東側歩道) |
| 3 | TA-4 | -155452, 923 | -42178, 131 | 4. 460 | 既設(国道10号東側歩道) |
| 4 | TA-5 | -155485. 718 | -42151. 878 | 3. 518 | 既設(名山小学校脇) |
| 5 | T-1 | -155303. 429 | -42152. 902 | 11. 995 | R元年度新設 (黎明館敷地内) |
| 6 | 1 | -155296. 560 | -42183. 490 | 10. 730 | H29年度新設(黎明館敷地内) |
| 7 | 2 | -155386. 253 | -42254. 085 | 11. 276 | H29年度新設 (黎明館敷地内) |
| 8 | 3 | -155362. 456 | -42305. 741 | 11. 881 | H29年度新設 (黎明館敷地内) |
| 9 | T-2 | -155411. 941 | -42217. 796 | 12. 060 | R元年度新設 (黎明館敷地内) |
| 20 | Α | -155440. 964 | -42200. 527 | 5. 041 | R元年度新設(国道10号線西側歩道) |
| 21 | В | -155342. 255 | -42195. 162 | 5. 031 | R元年度新設(国道10号線西側歩道) |
| 22 | 0–1 | -155427. 282 | -42221. 624 | = | H29年度新設 (N・0-0・1区) |
| 23 | 0-35 | -155283. 818 | -42130. 421 | - | H29年度新設 (N・0-34・35区) |
| 24 | g-1 | -155370. 951 | -42310, 234 | - | H29年度新設 (g・h-0・1区) |
| 25 | N-18_R2 | -155233. 796 | -42197. 243 | 11. 951 | R2年度新設(北御門脇) |
| 26 | R3T. 1 | -155383. 490 | -42339. 514 | 12. 369 | R3年度新設 (黎明館駐車場) |

本報告書調査対象範囲
 H26年度設定トレンチ(1T~3T)
 H27年度設定トレンチ(4T~20T)
 H28年度設定トレンチ(21T~41T・土橋1~3)
 H29年度設定トレンチ(42T~49T)

H30年度設定トレンチ(50T~58T)

■■ R1年度設定トレンチ(R54~63)

| R2年度設定トレンチ(北御門跡周辺石垣修復)



第3図トレンチ配置図

第2節 層序

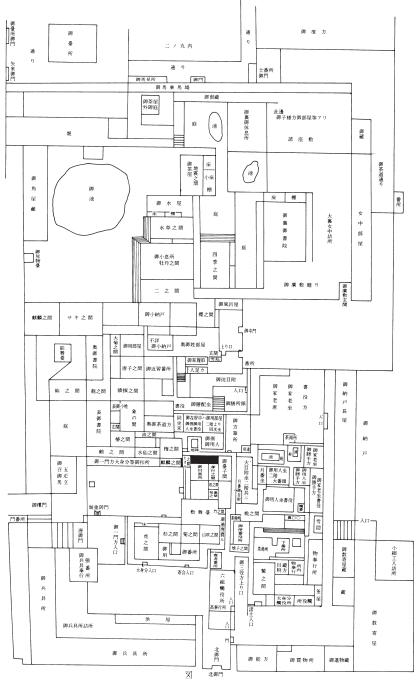
鹿児島城跡周辺の地質は『御楼 門跡周辺』「第Ⅱ章 第1節 3地 質」に記載のとおりで、ここでは各 トレンチにおける断面,遺構埋土 の断面に見られる局地的な土層(土 質) について掲載する。基本土層 模式図を第2表に記す。発掘調査 で確認した層位の中に噴出源や時 期が同定できるテフラはなかった が, 局所的に凹み等に溜まった火 山灰は認められた。遺構面から想 定して, 桜島 P 1 (大正 3 (1914)年) や P 2 (安永 8 (1779) 年) 等の 桜島起源の火山灰の可能性もある。 I層の表土と昭和53・54年度の発 掘調査後に埋め戻した埋土との違 いも明確ではなく, 土層表記も表 土以外に「造成土」や「攪乱土(層)」 等と表現している。また,調査範囲 の一部は昭和53・54年度の発掘調 査範囲と重複しており, その際の埋 め戻し土が造成土 (攪乱土) となっ ている。

基本土層は、 I 層黒色土が現在の 表土, II 層黄色褐色土は, 黎明館 建設時や昭和53・54年度の発掘調 査の埋土など現在の造成土で、Ⅲ層 黒褐色土は明治6 (1783) 年の本 丸が火災で焼失後の近代以降の造 成土, IV層暗褐色土は, 近世の最 終段階の造成土としている。また, Ⅳ層以前御造成土にはV層とつけ ている。ただし、今回の報告範囲 では, 基本は基本層序と同様だが, 全面が造成土であるという性格上, 土色や土質は場所ごとに異なって いることもある。そのため、今回 の層序については、それぞれの調 査地点ごとに述べることとする。

また,基本土層にはない排水溝等の各遺構の埋土については,遺構名+土層名(排水溝①)などとしている。

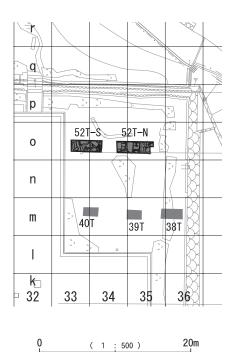
第2表 基本土層

| 層位 | 色調 | 備考 | 層厚 |
|-----|------|----------|------|
| I層 | 黒色土 | 表土 | 10cm |
| Ⅱ層 | 黄褐色土 | 近現代の造成土 | 20cm |
| Ⅲ層 | 黒褐色土 | 近現代の造成土 | 40cm |
| IV層 | 暗褐色土 | 近世の遺構検出面 | _ |



第4図 明治6 (1873) 年「鹿児島城本丸殿舎配置図」模式図





第5図 御進物蔵跡トレンチ配置図

第3表 御進物蔵跡周辺に推定される建物等

| 和暦 | 西暦 | 堀 | 石垣 | 長屋 | 門 | 土橋 |
|------|------|---|----|----|----|----|
| 寛文三 | 1663 | 無 | 無 | 東側 | 無 | 通路 |
| 元禄九 | 1696 | 有 | 有 | 西側 | 長屋 | 有 |
| 正徳三 | 1713 | 有 | 有 | 西側 | 長屋 | 有 |
| 宝暦六 | 1756 | 有 | 有 | 西側 | 長屋 | 有 |
| 文政五 | 1822 | 有 | 有 | 東西 | 北御 | 有 |
| 天保十四 | 1843 | 有 | 有 | 東西 | 北御 | 有 |
| 明治六 | 1873 | 有 | 有 | 東西 | 北御 | 有 |

第3節 各地点の調査成果

1 御進物蔵跡(第5~8図)

第3表は鹿児島城の絵図から北側の施設の変遷を示したもので、堀、石垣、長屋建物、門、土橋の標記の変遷を絵図から追ったものである。

本調査区は、元禄9 (1696) 年「鹿児島城絵図控」(第144図②)、宝暦6 (1756) 年「薩摩国鹿児島城絵図」(第144図④) 等の複数の絵図では、本丸北側の城壁に沿って造られた長屋状の建物があった位置の西端にあたる。この建物は、明治初期に撮影された御兵具所と北御門(第147図③) を参考にみると、石垣と塀を組み合わせた多聞櫓型式の建物が考えられ、規模は御兵具所と同等であると考えられる。この建物は、明治6 (1873) 年「鹿児島城本丸殿舎配置図」では、北御門側から「御能方」、「御買物所」、「御進物蔵」と書かれており、3つの施設が

入っていたようである。調査区は、このうち、「御進物蔵」 の位置にあたると想定される。

今回は、グリッドの $m \sim o-32 \sim 36$ 区に 52 トレンチ $-N \cdot S$ 、38 ~ 40 トレンチの 6 本のトレンチを設定した。

38 トレンチ・39 トレンチ・40 トレンチ (第5図)

概要 幅約1mの範囲を掘り下げたが,近代以降の攪乱 層が深く,遺構は検出されなかった。

出土遺物(第8図1~4)

遺物は攪乱層から少量の遺物が出土した。

1~3は、陶磁器で4は瓦である。1は、薩摩磁器の皿。型打ち成形である。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。総釉で、畳付は釉剝ぎされる。内面は型紙摺りで対になる鶴や竹・花が描かれる。外面は手書きで唐草風の文様が描かれる。近代。2は、薩摩磁器の筒形碗である。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。内面見込みに昆虫文が描かれる。18世紀末~19世紀初頭。3は、加治木・姶良系の陶器土瓶である。18世紀後半~19世紀。4は、陶器瓦の丸瓦である。破片だが、凸面が釉尻ハート型に施釉される田ノ浦窯跡系であると考えられる。出土遺物の時期は、17世紀後半~近代の遺物が混在して出土しており、近代以降に攪乱を受けていたことを裏付ける。

52 トレンチ -N (第5~7図)

概要 北堀に面する石垣の上端から約5m南側のo-34・ 35区に設定した。規模は4m×幅2mを基本とし、後に 北側を40cm拡張した。

層序は、北側で約90 cm、南側は約80 cmの表土・シラス盛土・攪乱があり、その下で造成土面を確認した。

遺構 標高 11.4m 前後で排水溝・石列等を検出した。

(1)排水溝(第6図·第7図)

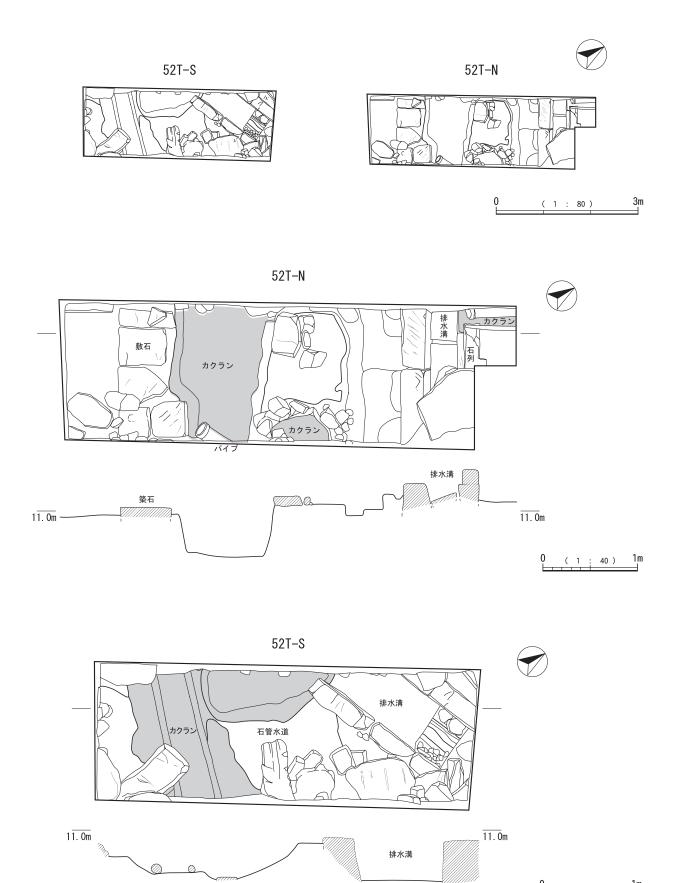
排水溝の規模は、幅約50 cm,深さ約30 cmである。築石は溶結凝灰岩で、表面が平滑に調整されている。北堀に面した石垣との平行になる。若干、移動している状況が認められたものの、蓋石状の板石が出土したことから、暗渠排水であった可能性がある。排水溝の南側には、城山層を利用した造成層がある。赤茶褐色を帯びており、排水溝を流れた水に含まれる鉄分の影響と考えられる。

(2) 敷石(第6図・第7図)

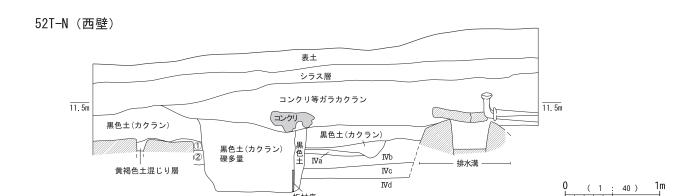
トレンチ中央では、3cm~拳大の溶結凝灰岩製の平石 や砕片があり,敷石として敷設されたことと考えられる。

(3)石列(第6図・第7図)

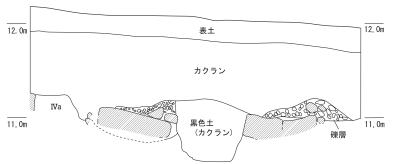
トレンチ南端では、南側面に平滑面がある石列を検出 した。上面は加工が施されていないことから、さらに上 位に同様の切石が重ねられていたものと考えられる。面 形状から石段の基壇にあたる可能性がある。



第6図 52 トレンチ -S・52 トレンチ -N 遺構平面図・断面図



52T-N (東壁)



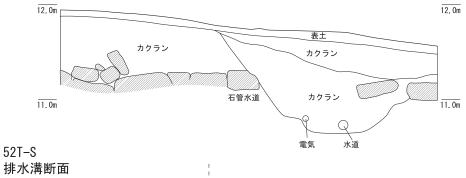
板材痕

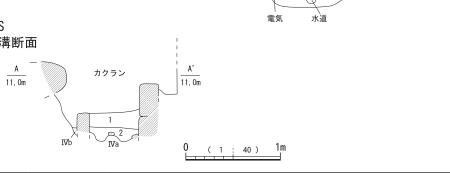
| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 |
|------|---------|---------|---------------------------------|
| IV a | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 橙色ブロックを含み粘質、シルト質混じり(城山層)、近世の造成土 |
| IV b | 10YR5/6 | 黄灰色土 | 砂質土。城山層混じり、近世の造成土 |
| IV c | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 砂層。近世の造成土 |
| IV d | 10YR7/2 | にぶい黄橙色土 | 砂層。軽石混じり、近世の造成土 |

(1 : 40) 1m

(1:40) 1m

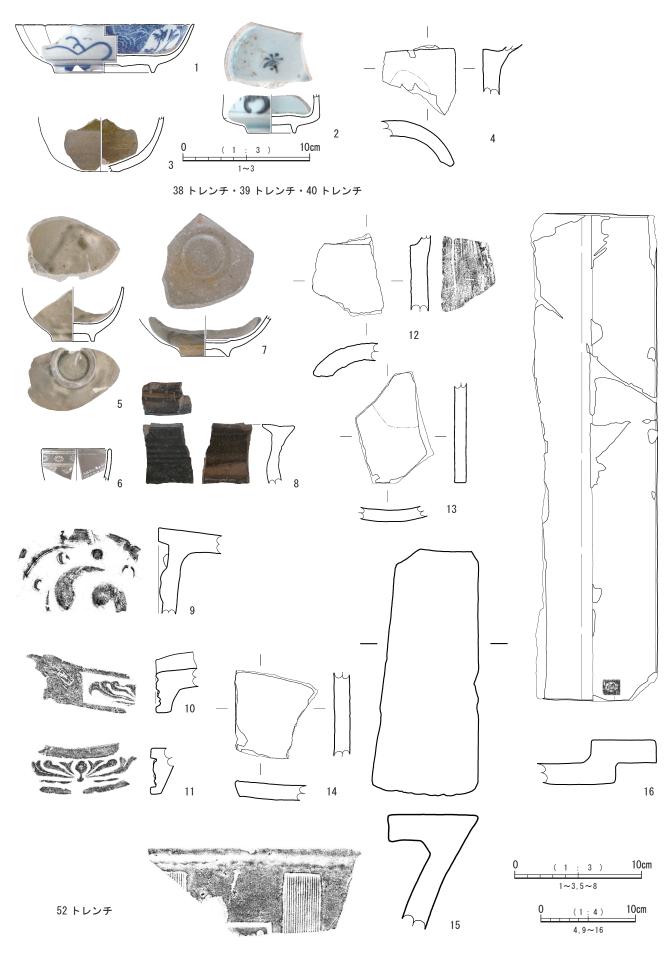
52T-S (東壁)





| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|------|-----------|------|---|
| 1 | 10YR4/1 | 黄灰色土 | 砂質土。排水に伴う埋土(水成堆積)溝埋土 |
| 2 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | I層土に1~3cmの亜角礫~円礫と混じって排水溝底面を作り出す(石敷でない石組排水溝)初めてかも。時期不明。溝埋土 |
| IV a | 2. 5YR7/1 | 灰白色土 | 粘土。均質。周辺の攪乱坑から地山ではなく排水溝に伴う貼面土、近世の造成土 |
| IV b | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 5 ~ 10 cmの礫を充填(裏栗), 近世の造成土 |

第7図 52 トレンチ -S・52 トレンチ -N 土層断面図



第8図 御進物蔵跡 出土遺物

52 トレンチ -S (第5~8図)

52 トレンチ -S は, 52 トレンチ -N の 1.2m 南に設定した。

概要 表土・攪乱が約 $30 \sim 70$ cm あり、遺構等を標高 $11.2 \sim 10.9$ m で検出した。

南側に深い攪乱があり、ポリ塩化ビニル製の水道管や、電気配線敷設に伴うジャバラホ-スが出土し、標高11.2m前後で凝灰岩製の平石を検出した。最下位に城山層が混ざる造成土を確認した。

遺構 北側に排水溝、中央に石管水道を確認した。

(1)排水溝(第6図・第7図)

幅 60 cm, 深さ 50 cm で東西方向に伸びる。標高は 10.9m である。底石は確認されていないが,底面を掘り下げた結果,側石に伴う栗石を確認した。

(2) 石管水道(第6図・第7図)

35 cm四方の凝灰岩を円筒状にくり貫いている。 調査区では約60cmを確認した。

出土遺物 (第8図5~16)

52 トレンチ -N・52 トレンチ -S では、遺物は近代以降の攪乱土中から出土した。多くは小片である。そのため、ここではまとめて記載する。

5~8は、陶磁器である。5は、竪野系の白薩摩と呼 ばれる白色陶胎の碗である。総釉で、畳付は釉剝ぎされ る。18世紀~19世紀。6は、竪野系の三島手と呼ばれ る象嵌陶器の小碗である。17世紀後半~18世紀。7は, 関西系の陶器碗である。内面中央部は丸く窪む。外面に は松文が描かれるが、高台周辺は露胎。18世紀。8は、 苗代川系の陶器甕である。18世紀後半。9~15は、瓦 である。9は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-024) である。瓦 当面には雲母子が目立つ。瓦当裏面は縦方向のナデ調整。 10・11は、 桟瓦。10は、 大坂式軒桟瓦 (A 種不明) で ある。瓦当左縁に四角に不明文字(刻印063-2)がある。 瓦当上端は面取りされる。11 は、大坂式軒桟瓦 (B-057) である。表面に雲母子が目立つ。瓦当上端・下端は面取 りされる。12は、17世紀代の古瓦の丸瓦である。凹面 端部が面取りされる。13は、陶器瓦の平瓦である。破 片だが、凹面が釉尻ハート型に施釉される田ノ浦窯跡系 であると考えられる。14は、17世紀代の古瓦の平瓦で ある。産地は不明だが、胎土が茶褐色を呈しており、薩 摩以外で生産されたものと考えられる。15は、近代の プレス瓦の袖瓦である。凹面に刻印があるが、刻印番号 は不明である。16は塀瓦である。側面に丸に不明文字 の刻印(刻印063-1)がある。

小結

今回は、建物に伴う礎石等の基礎構造は確認されなかったが、52トレンチ-N・52トレンチ-Sで排水溝が石垣と平行に確認された。出土遺物は大半が18世紀以

降の陶磁器・瓦であり、確認された遺構は、元禄9 (1696) 年の大火以降のものであると考えられる。保存目的の調査であるため、最上部の遺構で調査を止めていることから、この遺構が明治6 (1873) 年「鹿児島城本丸殿舎配置図」に描かれた遺構に関連する可能性が高い。

本丸跡では、多聞櫓型式の御兵具所跡の遺構が確認されている(鹿児島県立埋蔵文化財センタ-2020)。御兵具所跡では、本丸側の建物壁際に排水溝を廻らせており、絵図での描かれ方から、御進物蔵も御兵具所跡と同様の構造であったと考えられる。そのため、52-Nトレンチの排水溝は、御進物蔵に外側を巡る排水溝であり、建物は、排水溝の北側(石垣側)にあったと考えられる。

石垣天端から、52-Nトレンチの排水溝までの距離は、約6mであり、これが、御進物蔵の建物の幅であったと考えられる。この幅は、後述する51トレンチで推定される石垣天端から御兵具所跡外側の排水溝までの距離と同等である。そのため、御進物蔵跡は、御兵具所跡同規模の建物であったと考えられる。

2 北御門跡周辺(第9~21図)

概要 「北御門」は、鹿児島城内で役人が業務にあたる ために利用する通用門(登城門)とされる。

元禄9 (1696) 年「鹿児島城跡絵図控」(第144図②) 等の複数の絵図では、本丸北側の城壁に沿って造られた 長屋状の建物と一体化した門が描かれ、元禄9年の大 火では焼失したとの記録が残る。また、宝暦5 (1755) 年の天保14 (1843) 年「天保年間鹿児島城下絵図」(第 145図⑥) や明治5 (1872) 年の古写真では、東側の御 兵具所跡とも一体となっており、19世紀代には、東西 両方の多聞櫓形式の建物と一体となった門であったと考 えられる。

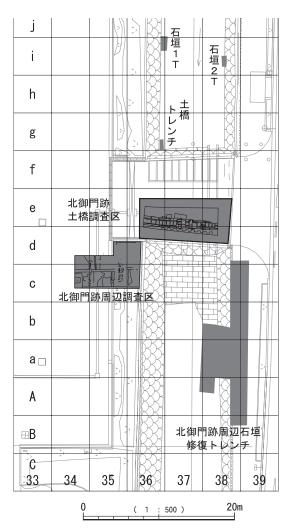
今回の調査は、「北御門」の周辺遺構の残存状況を確認するとともに、北御門跡周辺部石垣の背面構造を確認するために行った。また、18世紀までの絵図では土橋で描かれる北御門橋(現在は土橋として残存)が、天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」では木橋として描かれており、現在の「土橋」がいつ造られたか、黎明館建設時に石製欄干設置のための工事の影響の有無といった北御門橋の築造時期や北御門跡周辺の石垣の状態や下部構造を確認するための調査を行った。

(1) 石垣の下部構造確認のためのトレンチ①石垣1トレンチ(第10図)

概要 北御門跡西側の本丸跡側に設置した。

上部の石垣は, 鹿児島 (鶴丸) 城跡保存活用計画 (鶴丸) 城御楼門建設委員会/鹿児島県 2016) では, 精加工石材の布崩し積み②「規格石材を利用し, 横列に近づけるように積んでおり, 横目地が通っている。完全な間知





第9図 北御門跡周辺・北御門跡周辺石垣修復 調査区トレンチ配置図

石積ではない。製加工石材を利用し、多角形の石材を混用した「合端」合わせの積み方である。」となっている。 石材は溶結凝灰岩だが、詰石にはそれ以外の石材も含まれている。石垣上部には、排水口が設けられている。

石垣下部構造

現在の地表面から、約1m掘り下げた。下部構造の確認を目的とし、現在の堀地表面から下4段を確認したが、胴木の確認にまでは至らなかった。石垣は、布崩し積みを施行するが、地上の石垣に比べて築石に企画性はなく、大きさはばらばらである。また、一部築石は、排水口からの排水により摩耗していた。石垣はさらに下まで築かれており、現在の堀は、石垣構築時よりも埋まっていることが確認できた。

②石垣2トレンチ (第10図)

概要 石垣 2 トレンチは、石垣 1 トレンチの対岸である i-38 区に設定した。石垣の積み方は、石垣 1 と同じく 精加工石材の布崩し積み②であるが、築石は小型で加工が甘く、築石間の間隔が広がっている場所がみられる。 石材は、溶結凝灰岩である。

石垣下部構造

現在の地表面から、約1m掘り下げた。下部構造の確認を目的とし、現在の堀地表面から下3段を確認した。その下には胴木は確認されていないことから、この石垣は、堀底の砂層に直接築かれていることになる。石材は、溶結凝灰岩である。

築石は,直方体の切石を布崩し積み状に積み,頁岩等の間詰石を入れ込んでいる。下部では切込み剥ぎが見られる。

③土橋トレンチ (図版 1-⑦)

概要 石垣と北御門橋の西側付け根の g-36 区に設定した。石垣と北御門橋の接合部分の確認を目的としたトレンチである。築石は、規格性が高く、切石の目地を揃えた布崩し積み石垣である。下層部においても、本丸跡側石垣に北御門橋の石垣が載っていることから、現在の北御門橋は、本丸跡北側の石垣構築後に築かれたと考えられる。

(2) 北御門土橋調査区 (第11図・第12図)

概要 e・d-36~38区にあたり,昭和53・54年度の調査で,城内から城外へ延びる暗渠排水溝や石畳,石段等を検出した地点である。

今回の調査は、黎明館建設時の工事の影響等による孕 みの確認と排水溝の残存状況確認を行った。

①排水溝 (第11図)

排水溝の蓋石は幅 $90 \sim 120$ cm, 奥行き $40 \sim 60$ cm, 厚さ約 25 cmで, 溶結凝灰岩製である。表面には粗い鑿調整が見られる。暗渠排水溝の内側は, $60 \sim 70$ cmの四角形平石が底石になり,長さ $70 \sim 120$ cm, 厚さ $20 \sim 30$ cm側石を約 70 cm幅で組み立て,隙間を漆喰で埋めている。底石の勾配は約 5 度で,入口に若干の窪みがある。暗渠の蓋石から底石の高さは約 20 cmを測る。

②下層確認調査

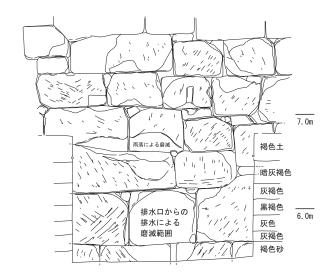
暗渠排水溝の両脇で下層確認を実施したところ、栗石等は確認されなかった。また、東側石垣で、孕み等の確認のため、石垣裏の確認調査を実施した。石垣裏はコンクリートで固め、円礫の裏込めが約20cm詰められていた。石垣の膨らみが元の傾斜に積み直されていたため、崩落の可能性は少ないことを確認した。

(3) 北御門跡周辺調査区(第13図)

概要 石垣の背面状況確認のための $c \sim d$ -34 ~ 36 区の調査である。北御門東側の城内にあたる。 $6 \times 11.5 m$ のトレンチを基本に、北西側に $2 \times 3.5 m$ 広げた。

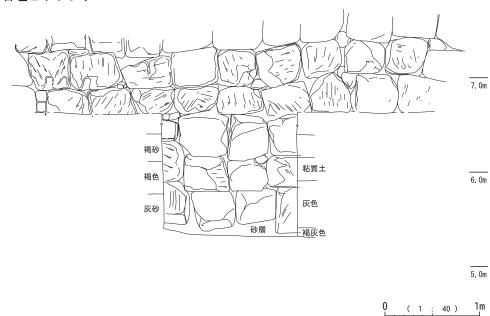
遺構 溶結凝灰岩で造られた排水溝2列と石垣の裏栗込

石垣1トレンチ



0 (1:40) 1m

石垣2トレンチ



第10図 北御門跡周辺トレンチ 石垣立面図

め、建物基礎石列を確認した。調査区南側では、鹿児島 大学医学部時代のガスメーター室があった場所で(1969 『鹿児島大学二十五年史』)、鋳鉄管を検出したほか、径 約4mの方形の窪みを確認した。

①排水溝1 (第14図)

排水溝 1 は、幅約 50 cm、深さ約 20 cmで、底石は 50 \times 70 cmの溶結凝灰岩を 1 列敷いている。側石の厚みは 北側が約 20 cm、南側は約 10 cmである。

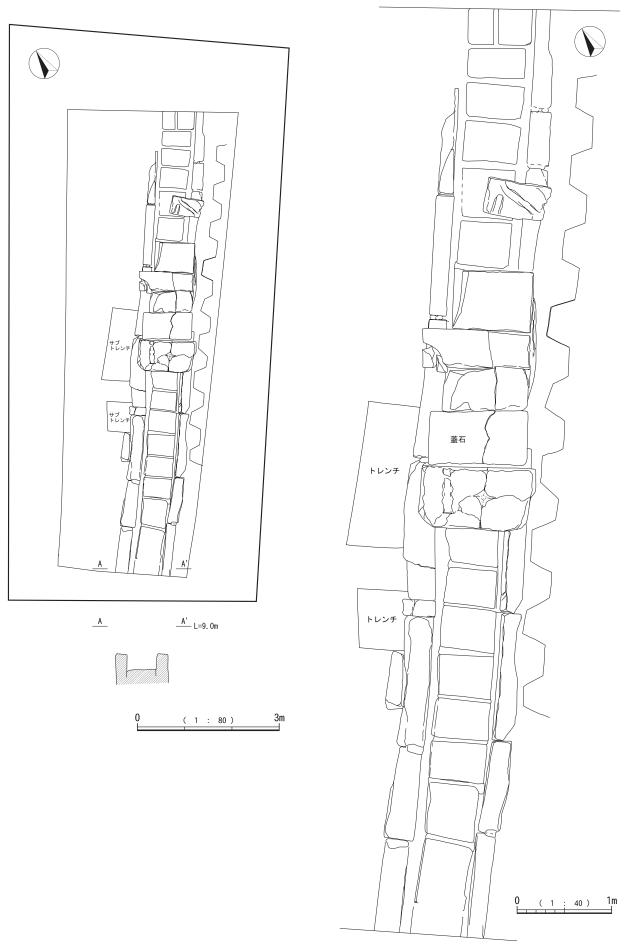
②排水溝2 (第14図)

排水溝2は石垣から約2m南側で,石垣と平行に検出

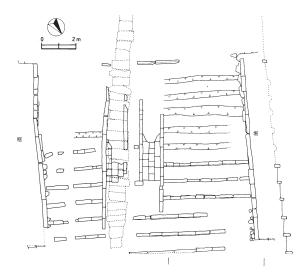
した。排水溝内面の幅 90 cmの中に、幅 $20\sim50$ cmの板石を 2 枚敷いて底石とした部分と、幅 90 cmの板石が 1 枚のみの部分があった。側石の厚さは 20 cm前後で、排水溝の深さは約 30 cmである。排水溝は、後世の水道管敷設等による攪乱を受け、コンクリートブロックも出土している。

③建物基礎石列 (第14図)

石垣と北御門の境には、切石が3石列配置されている。 東側の切石は御兵具所跡の建物基礎石で、西側の切石が 北御門の基礎石にあたる可能性がある。現在、基礎の上



第 11 図 北御門跡 土橋排水溝平面図



第 12 図 昭和 53・54 年度 発掘調査で確認された 北御門跡土橋遺構平面図

部には黎明館建設当時に石塀が積み増しされ、コンク リートで固められているが、切石自体は藩政期の建造物 の基礎石であり、切石間には板状の間詰石もみられる。

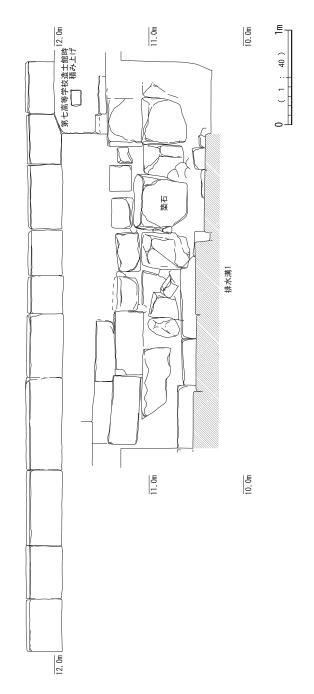
④裏込め (第14図)

石垣から排水溝までの間に、3cm~人頭大の礫を多量に含む裏込めを確認した。

出土遺物 (第 15 図~第 20 図 17 ~ 77)

17~27は近世の陶磁器である。17は、肥前の磁器碗 である。高台が高く直線的に開いて立ち上がる広東碗で ある。内面見込みには虫文が描かれる。1780~19世紀 前半。18は、肥前の外青染付の磁器筒型碗である。内 面の口縁部付近には四方襷文が描かれる。18世紀後半。 19は、関西系陶器の小碗である。高台付近は露胎。18 世紀。20は、関西系の陶器碗もしくは皿である。高台 付近は露胎。18世紀後半頃か。21は、白薩摩と呼ばれ る白色陶胎の小碗である。底部に墨書がある。高台は 内傾する。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。22は、肥前 の京焼風の色絵磁器皿である。内面には松が描かれる。 1690~18世紀第2四半期。23・24は、竪野系の灰色陶 胎の碗である。高台付近は釉剥ぎされる。18世紀後半 ~19世紀。25は、苗代川系の陶器土瓶蓋である。外面 は暗緑色の釉薬が掛かる。18世紀後半以降。26は、竪 野系の陶器蓋物の向付か。内面と高台上の張り出した部 分の側面のみ灰色の釉薬が掛かる。本来は蓋が付いてい たと考えられる。18世紀。27は、苗代川系の陶器甕。 口縁部上面は露胎。外面には工具によるヨコナデが残る。 18世紀~19世紀。

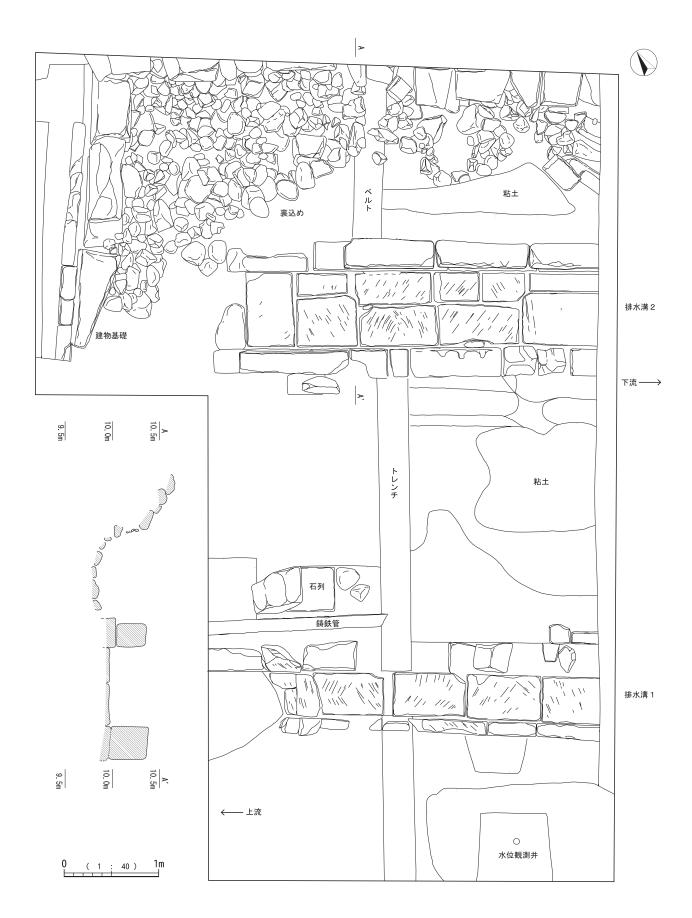
28~33 は近代の陶磁器である。28・29 は、磁器鉢。 植木鉢か。外面は口縁部付近を除いて露胎。口縁部上端 ~外面にかけて、竹もしくは笹が描かれる。30 は、信 楽系の陶器便器か。内面・外面は施釉される。31 は、 薩摩磁器皿である。内面・外面は型紙刷りで草花文が描



第 13 図 北御門跡周辺調査区 北壁立面図

かれる。高台内側は蛇の目釉剥ぎされる。32 は、肥前系の青磁染付小皿もしくは小鉢。型作りである。33 は、肥前系の磁器碗。統制食器。高台まで総釉で内面には織、外面には扇の周囲に TRADE MARK と書かれる。

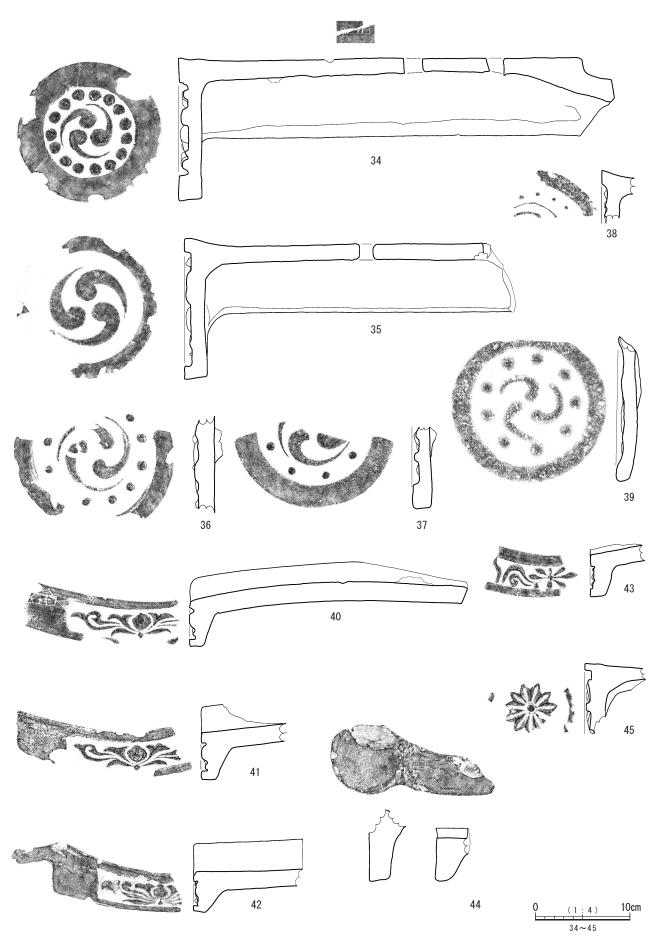
34~64 は瓦である。34 は,連珠三巴文軒丸瓦(A-009) である。瓦当周縁部は広い。瓦当は小さいが、丸部は長く、中央部に直径 3 cmの釘穴が焼成前に穿たれている。瓦当裏面には強い接合ナデ。丸瓦部凸面には縦方向のナデ、尻部はヨコナデ調整である。凹面には、布袋痕が残る。35 は、連珠三巴軒丸瓦 (A-012) である。丸瓦部凸面には縦方向のケズリ。丸部中央部には、焼成後に直径 3 cmの釘穴が穿たれている。36 は連珠三巴文軒



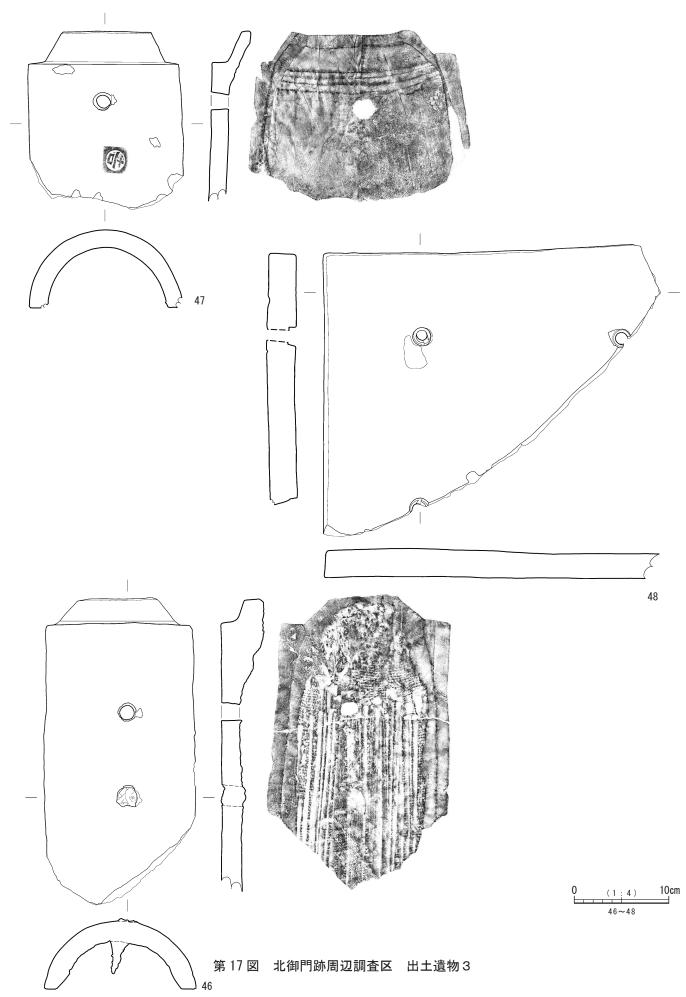
第14図 北御門跡周辺調査区 平面図・断面図

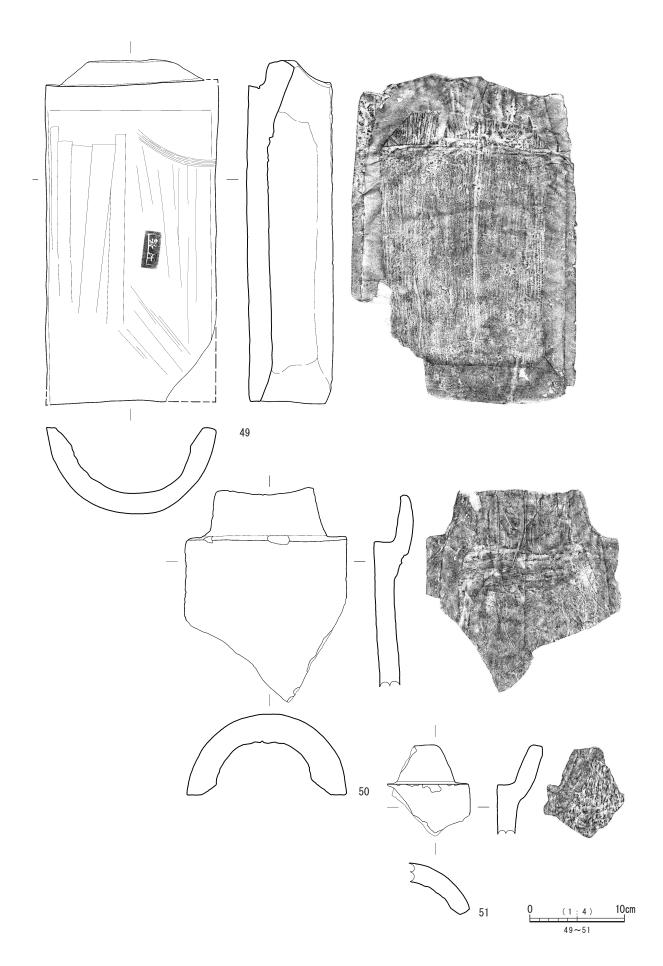


第 15 図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 1

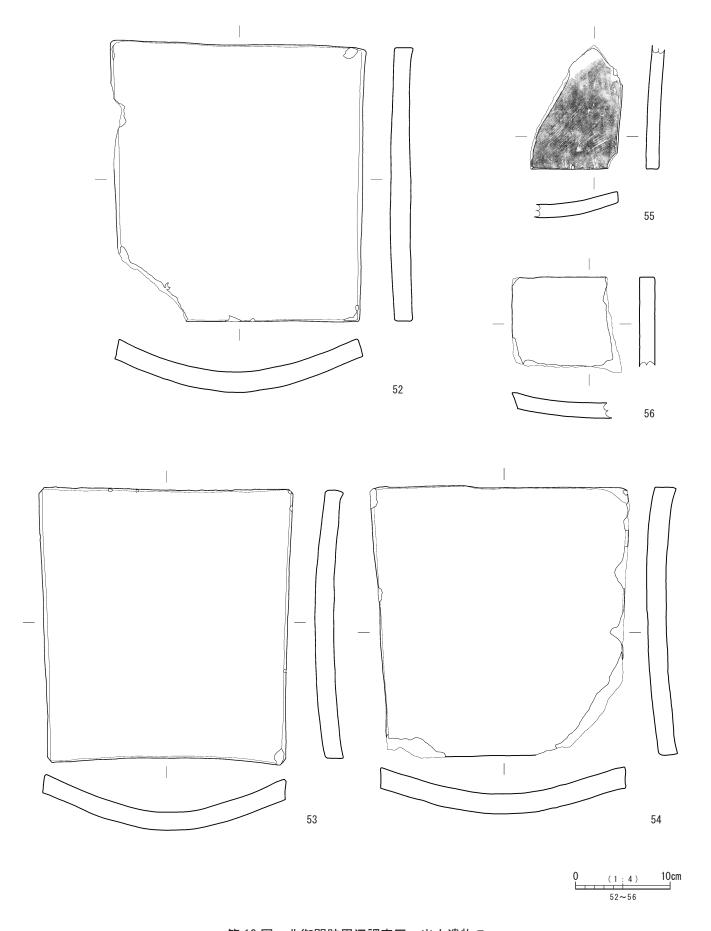


第 16 図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 2

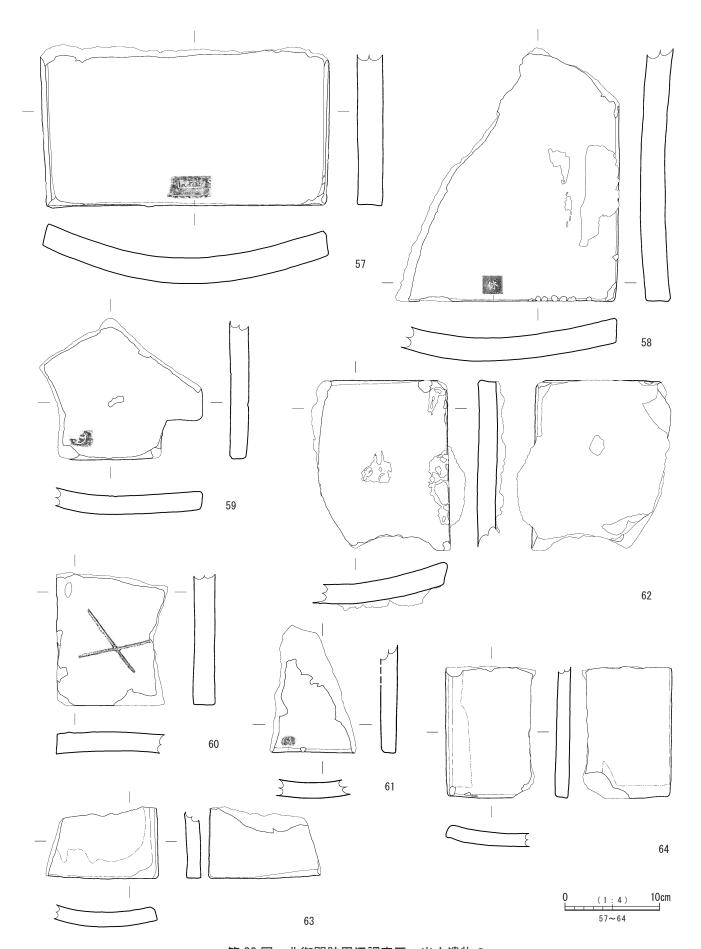




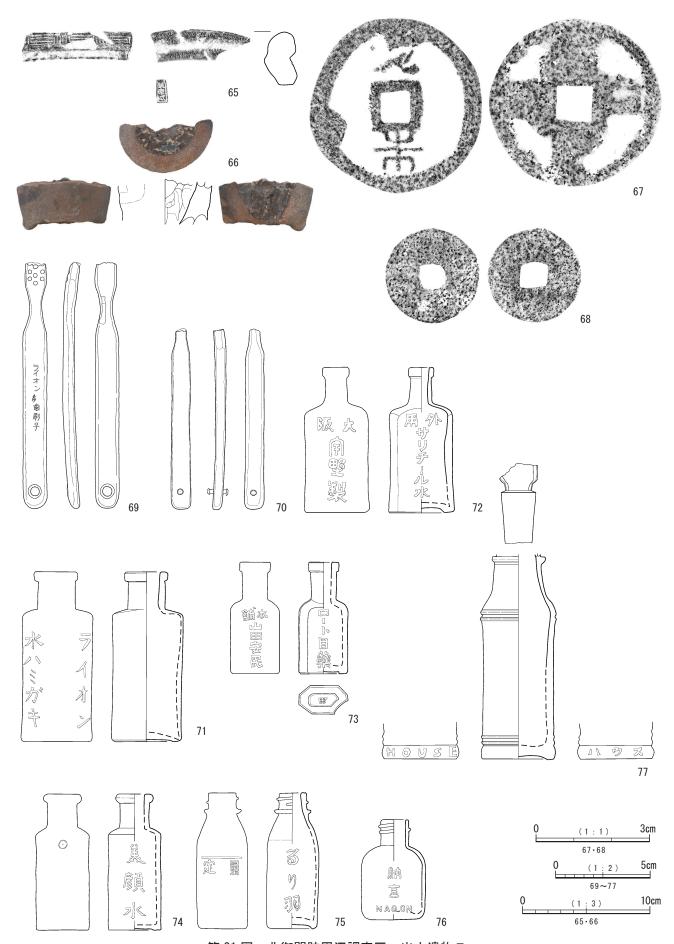
第 18 図 北御門跡周辺調査区 出土遺物 4



第19図 北御門跡周辺調査区 出土遺物5



第20図 北御門跡周辺調査区 出土遺物6



第21図 北御門跡周辺調査区 出土遺物7

丸瓦 (A-016) である。37 は、連珠三巴軒丸瓦 (A-031) である。焼成は良好で,他の瓦と比べると,黒色を呈す る。周縁はやや広い。薩摩以外で生産された可能性があ る。38は、連珠三巴文軒丸瓦(不明)である。灰白色 の胎土を呈しており、長崎で製作されたと考えられる。 39 は、連珠三巴文軒丸瓦(不明)である。全体が摩耗 している。丸部との接合面にはキザミを入れる。40は, 大坂式軒平瓦 (A-045) である。瓦当周縁左側には,四 角に太喜(刻印001)がある。瓦当上端および瓦当下端 の裏側は面取りされる。また、凹面の周縁も面取りされ る。凹面は縦方向のナデ調整,41は,大坂式軒平瓦(A-045) である。瓦当上端・下端, 下端裏側は面取りされて いる。凹面は、縦方向のナデ調整である。42は、大坂 式軒桟瓦(A-058)である。瓦当上端は幅広に面取りさ れる。43 は、その他の軒桟瓦 (D-045) である。熊本城 跡でも類似した笵のものが出土している。周辺地域で製 作され, 広い地域に広がった笵であるか, 同じ笵が広い 地域で使用された可能性がある。笵瓦当上端は狭く面取 りする。雲母子が目立つ。44は,その他の軒桟瓦(不明) である。瓦当上端は面取りされる。雲母子が目立つ。45 は小菊瓦(K-02)である。46は、軒丸瓦である。瓦当 は欠損している。中央部付近には、焼成前に直径約3cm の釘穴が穿たれており, 瓦当側の釘穴には, 釘が残って いる。凹面は、尻側の一部に布袋痕が残るが、それより 頭側はケズリ調整が施され,布袋痕は消えている。47は, 軒丸瓦である。瓦当は欠損している。尻側に焼成前に直 径約4cmの釘穴が穿たれている。凸面中央には丸に浮 彫りで吉(刻印046-6)の刻印がある。48は、海鼠瓦で ある。大型であるが、御楼門跡周辺で出土するものより はやや薄い。北御門周辺や御兵具所等の建物の装飾とし て使われた可能性がある。隅近くに焼成前に釘穴が穿た れる。周縁部は面取りされる。49は、丸瓦(楼門A類) である。凸面中央には、四角に太宗の刻印(刻印003) がある。凸面は、玉縁はヨコナデ、その他には縦方向の ケズリの痕跡が明瞭に残る。凹面は、ナデ調整により布 袋痕はわずかに残るのみである。頭側は、端部に向かっ て薄くなる。50は、丸瓦である。玉縁は長い。凸面は、 玉縁はヨコナデ、その他は縦方向のケズリまたはナデ調 整。51は、17世紀代の古瓦の丸瓦である。黒色で小型、 焼成はやや不良である。凸面には縦方向のケズリ痕、凹 面には布袋痕が残る。52・53・54は、平瓦(楼門F類) である。尻側に向かって幅が狭くなる。凹面周縁は面取 りする。凸面は縦方向のケズリ調整である。54は、凹 面・凸面両方で炭化しており、赤く変色した被熱瓦であ る。55は、17世紀代の古瓦の平瓦である。黒色で小型、 焼成はやや不良である。凹面・凸面に工具による刷毛目 痕が残る。56は、平瓦である。灰白色の胎土で雲母が 多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。57・58

は、大型の平瓦である。凹面周縁は面取りする。57は 頭側面に四角に玉水堂の刻印(刻印005)があり、58は 頭側面○に休の刻印(刻印039-3)がある。59は、桟瓦 である。凹面の凹面周縁は面取りする。側面に○に平の 刻印(刻印052)がある。60は、海鼠瓦である。斜め方 向のナデ調整痕が残る。隅の近くに「×」のような字が 刻書されている。61は、桟瓦である。凹面上端は面取 りされる。○に嶋の刻印(刻印180)がある。62は、平 瓦である。火災瓦である。凹面は赤く変色しており、凸 面には焼けた漆喰が張り付いている。明治6 (1873) 年 の大火に伴うものか。63・64は、陶器瓦の平瓦である。 粘土紐積み上げ調整。63は釉尻ハート型に釉薬を2条 もしくは3条で流し掛けされている,田ノ浦窯系の釉薬 瓦である。 凹面は縦方向の筋状の調整痕が残り、 周縁は 面取りされている。凸面には粘土紐を巻き上げの際の凹 凸が残り、工具による縦方向のナデ調整が残る。64は、 63と同様の特徴をもち、釉薬が筋状に掛けられている ことから, 田ノ浦窯系の陶器瓦と考えられる。

65 は、瓦質の環状土製品である。口縁部内側には、四角に栗原式の刻印がある。66 は、坩堝である。内部には、固まった物質が充填されていた。蛍光X線分析の結果、充填物については、ガラス(鉛ガラス)に関連する物質である可能性がある(第IV章第3節)。近世のものとすれば、鹿児島城跡では、二之丸で科学実験を行っており、そうした実験などに関わる遺物である可能性がある。

67 は、銅銭である。琉球通寶である。直径 4.35cmと大型の鋳造銭である。琉球通寶とは、文久 2 (1862) 年に薩摩藩が琉球救済の名目で幕府に 3 年間の期限付きで鋳造する許可を得て同年 8 月に鋳造した。半朱は文久 3 (1863) 年に鋳造され、1 両の 32 分の 1 の額面を持つ銅銭である。成分は主に銅と鉛、錫で構成される。指宿市河内山鉱山跡で出土している(鹿児島県立埋蔵文化財センタ -2018)。琉球通寶は、二之丸で製造実験を行っており、その実験に関連する可能性がある。68 は、薄手の古銭である。腐食が進み、銘文は判読できない。

69・70 は骨製品の歯ブラシの柄である。69 にはライオン()歯刷子()と刻印があることから、昭和2 (1927)年~昭和14 (1941)年製造の、株式会社小林商店(現:ライオン)の歯ブラシであると考えられる。

71~77はガラス製品。71は、水ハミガキ。ライオンのエンボスがある。口縁部に継ぎ目が見られない形状から昭和10(1925)年前後の物か。72は、大阪宇野製外用サリチール水とのエンボスがあるため、当時の皮膚科で皮膚真菌症の治療薬として使用したサリチル酸コロヂウムの瓶ではないかと考えられる。73は、本舗山田安民ロート目薬とエンボスがある。信天堂山田安民薬房(現:ロート製薬)製の目薬である。この瓶では明治42

(1909) 年~昭和6 (1931) 年頃。74 は,美顔水のエンボスがある。桃谷順天館 (現:明色化粧品)の製品で,瓶の形状から,明治18 (1885) 年~明治35 (1902) 年までの発売当初のものである。当初,薬として販売された化粧水である。75・76 は,白髪染めの瓶である。スクリューキャップであるため,少なくとも昭和35 (1955)年以降か。77 は,密閉容器ですり合わせの蓋がついている。底部の記号から山村硝子 (現:日本山村硝子)の製品である。

小結

調査区は、宝暦 5 (1755) 年の天保 14 (1843) 年「天保年間鹿児島城下絵図」(第 145 図⑥) 等の御兵具所跡がある。建物基礎石列は、その北西端にあたる可能性がある。御兵具所跡の幅は、石垣天端から排水溝 1 までの約 6 m であると考えられる。排水溝 2 は、石垣や排水口に到達せず、途中で途切れていることから、元禄 9 (1696) 年「鹿児島城絵図控」(第 144 図②) 等に描かれる塀の段階の排水溝の可能性がある。その場合、塀の幅は約1.8m が想定される。

3 北御門跡周辺石垣修復 (第22図~第33図)

概要 平成27年6月に本丸と北堀を挟んで対岸の北御 門跡周辺石垣の一部が崩落し、同年12月までに応急工 事を実施した。翌28年度には修復工事に係る調査,測量, 設計を計画し、平成30年度に設計、令和元年にボーリ ング調査を実施した。令和2年度には, 石垣の修復工事 が行われることとなり、 崩落した石垣の修復復元工事に 先立ち, 石垣と背面構造, 堀幅の確認を目的とした調査 を計画・実施した(第29図)。掘削部分の道路側は矢板 により補強し, 土層崩落防止対策を講じた。調査は北御門 跡周辺の石垣崩落箇所の歩道と堀を含めた長さ約20m, 幅約4mの範囲で実施した。発掘調査は、石垣の解体工 事と同時並行で行い、2か所にベルトを残しながら、石 垣を3~5段取り外し、その都度平面遺構検出・石垣背 面構造の確認を行いながら掘り下げた。石垣は本丸北堀 の下まで埋まっていたため, 石垣前面にあたる本丸北堀 の一部についてもトレンチを設定し、掘り下げた。平面 図は必要箇所にとどめ, 石垣の土層断面図については, 各工程で随時作成し、最終的に接ぎ合わせて完成させた。

石垣は、布崩し積み石垣と谷崩し積み石垣の接合部分で崩落していたことが確認できた。それぞれの背面構造を記録するため、それぞれの石垣に1か所ずつ、2組の計2か所のベルトを残しながら、発掘調査を行った。

調査成果 発掘調査の結果,布崩し積み石垣・谷崩し積み石垣とその背面構造,石垣構築以前の堀と考えられる腐植土層・ユリカス層などが確認され、3段階の石垣構築過程とそれぞれの背面構造が明かになった。

①谷崩し積み石垣1段目・布崩し積み石垣1段目(第

24 図①・第28 図・第29 図)

布崩し積み石垣1段目背面

現代の攪乱で削平されているが、幅約1mの裏込めが残存していることを確認した。裏込めは、拳大~人頭大の礫が隙間なく充填されており、礫の中には石垣の石材の破片など、加工されたものも多く含まれていた。布崩し積み石垣では、裏込めは1段目しかなく、下段に続かない。1段目のみが新しく積み直された石垣と考えられる。

谷崩し積み石垣1段目背面

谷崩し積み石垣は、最大長約50cm、幅約50cmの三角柱の石材を用い、その間に裏込めが充填される。裏込めは現代の攪乱で削平されているが幅約1mは残存している。谷崩し積み石垣の裏込めは、谷崩し積み石垣最下段まで続いている(第29図Xa層)。裏込めの中には、拳大~人頭大の角礫とともに、被熱して溶けた近代のガラス片やコンクリート片、陶磁器、瓦が多量に混じる。近世の陶磁器も含まれてはいるが、近代以降の火災の片付け層を裏込めに使用したと考えられる。

②布崩し積み石垣2段目・3段目(第25図②・第28図) 布崩し積み石垣2・3段目背面

2段目は、長さ約80cm、幅約30cmの長方形の石材を用いる。本来は、石垣最上段の地覆石であると考えられる。3段目は、長さ約 $60\sim90$ cm、幅約 $50\sim60$ cmの長方形の石材を並べている。どちらにも裏込めは充填されない。

③布崩し積み石垣7段目 ④布崩し積み石垣10段目(第25図③・④・第28図)

布崩し積み石垣7段目 (第25図③・第28図)

布崩し積み石垣7段目は、長さ約60~90cm、幅約30~60cmの長方形の石材を並べている。背面に裏込めは充填しない。調査区北側に泥炭層(XV層)を確認した。この泥炭層は、西側まで広がっていたため、10段目まで石垣を解体した後で、調査区全体で遺構検出を行った。

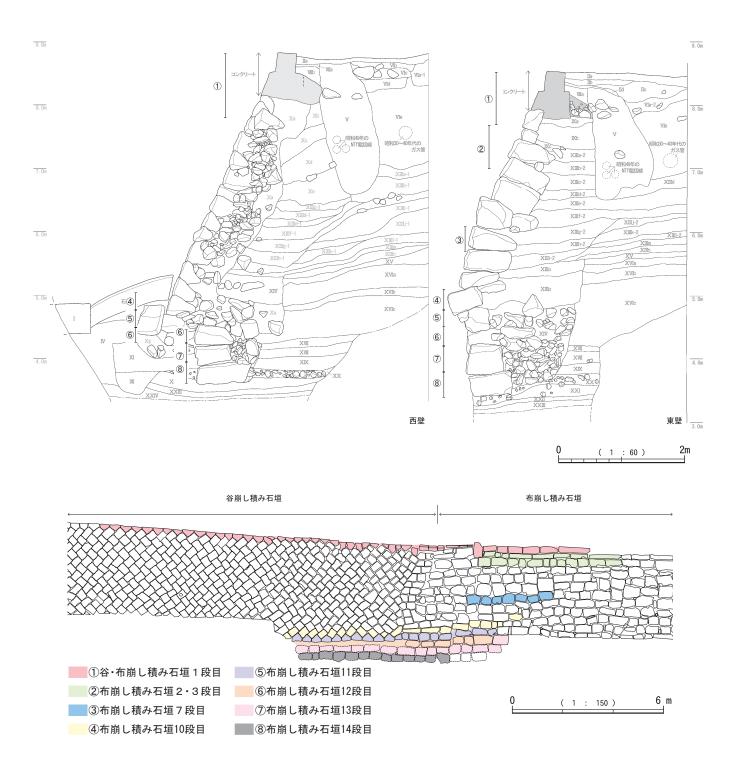
布崩し積み石垣 10 段目 (第25 図4・第28 図)

布崩し積み石垣 10 段目は,長さ約 $50 \sim 60$ cm,幅約 $30 \sim 60$ cm の長方形の石材を並べている。背後に裏込めは充填しない。この背面の $X \coprod p$ 層から出土した, $89 \sim 105$ の瓦は,すべて 17 世紀前半~後半のものと考えられることから,布崩し積み石垣の構築時期は 17 世紀後半以降に下る可能性がある。

石垣前段階の堀(旧本丸北堀)

布崩し積み石垣,谷崩し積み石垣北側では,標高約5.7mで長さ11.8m,幅21.6mに渡って泥炭層(XV層)を確認した。その泥炭層より下は,自然堆積層になっており,本来は,この泥炭層の上を水が流れていたと

第 22 図 北御門跡周辺石垣修復調査区 立面図



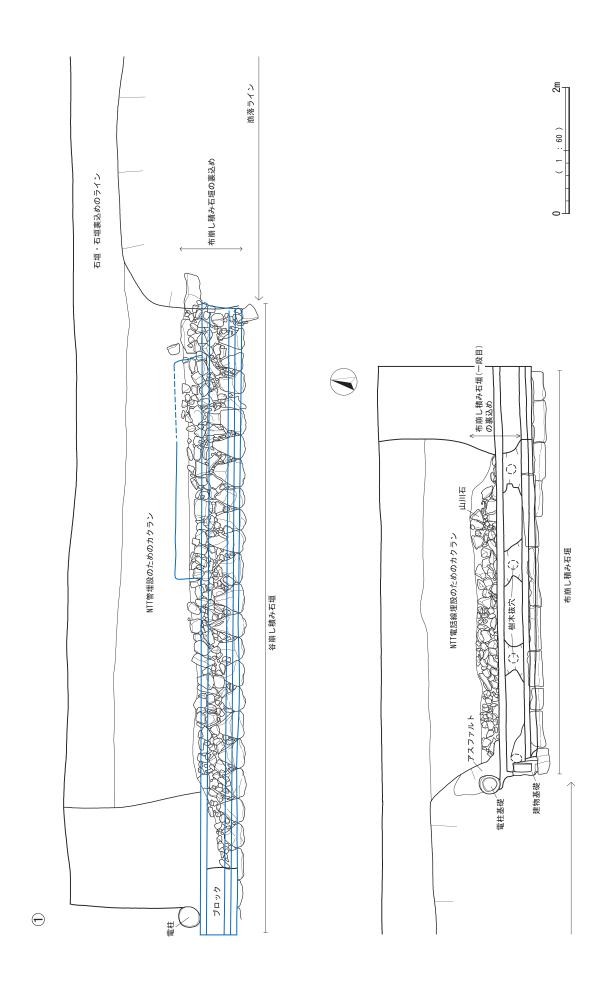
第23図 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 平面図 作成石垣位置図

考えられる。土層の観察から、布崩し積み石垣は、この泥炭層の南側(本丸側)を160cmほど掘り下げてから構築されている。また、炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、堀で出土した炭化物の年代は1504年~1697年の可能性が最も高い(第IV章第2節)。その年代に、この泥炭層は形成されていた可能性が高い。布崩し積み石垣の構築時期が17世紀後半以降であると考えられることから、この泥炭層が鹿児島城築城時の本丸北堀の底面であったと考えられる。

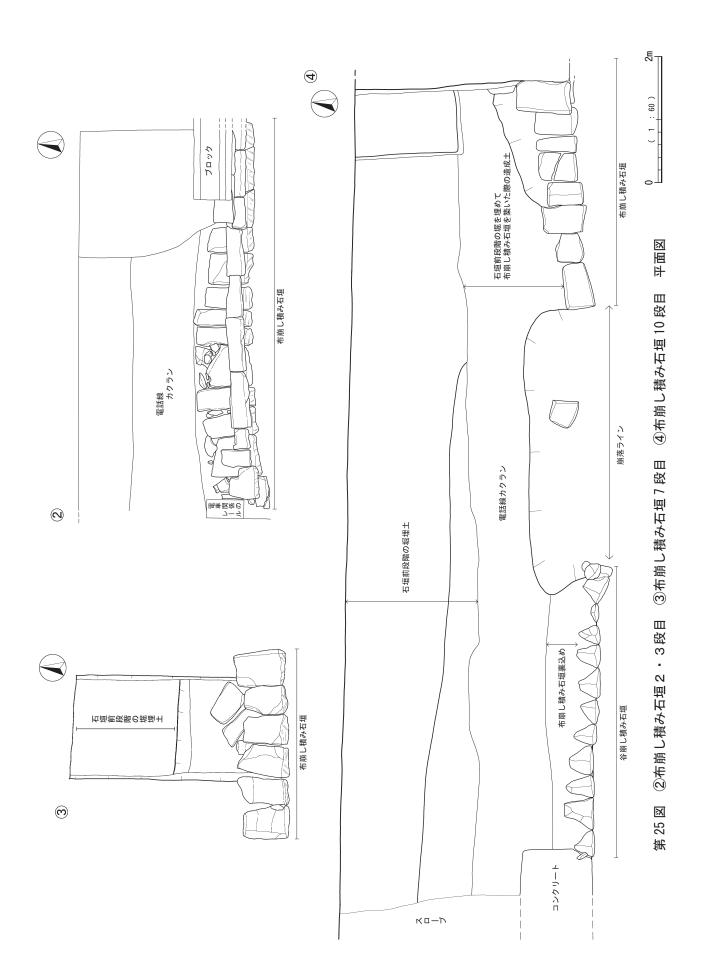
⑤布崩し積み石垣 11 段目 ⑥布崩し積み石垣 12 段目

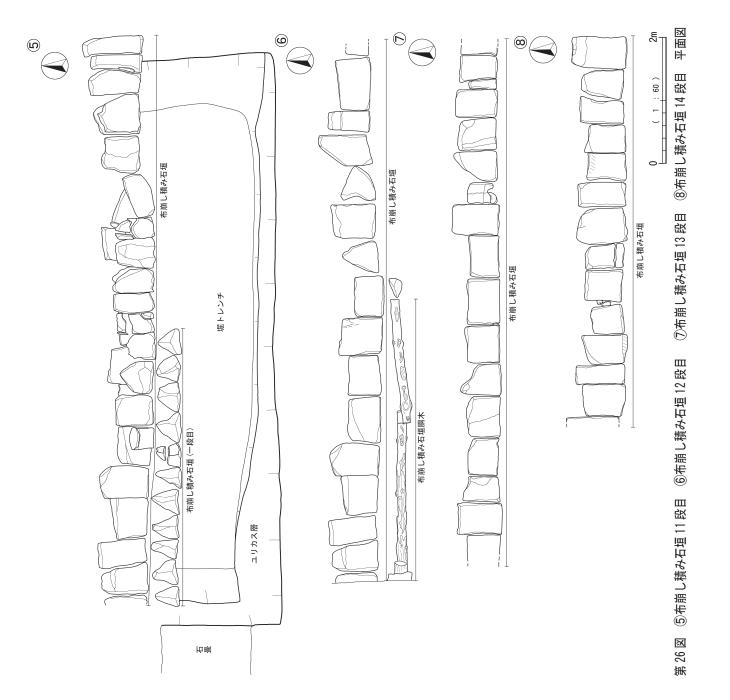
⑦布崩し積み石垣 13 段目 8 布崩し積み石垣 14 段目 (第 26 図~第 29 図) 堀トレンチ (第 27 図~第 28 図)

布崩し積み石垣 11 段目を調査したのち,現在の本北堀の堀底下に続く石垣確認のため,本丸北堀に長さ600cm,幅 140cmのトレンチを設定した。石垣の解体と並行してトレンチを堀り下げた。標高 4.4m で谷崩し積み石垣最下段の裏側に布崩し積み石垣 11 段目が埋まっていることを確認した。さらに、谷崩し積み石垣最下段の下位からは胴木を検出した。布崩し積み石垣は、さらにその下まで埋まっており、14 段目まで



第 24 図 ①谷崩し積み石垣1段目・布崩し積み石垣1段目 平面図





を確認した。また、堀トレンチの土層断面の観察から、本来の堀底に、黎明館建設に合わせて堀を埋めた際の造成土が最大で120cm 堆積しており、本来の堀底が、現在よりも標高約3.6mであったことを確認した。

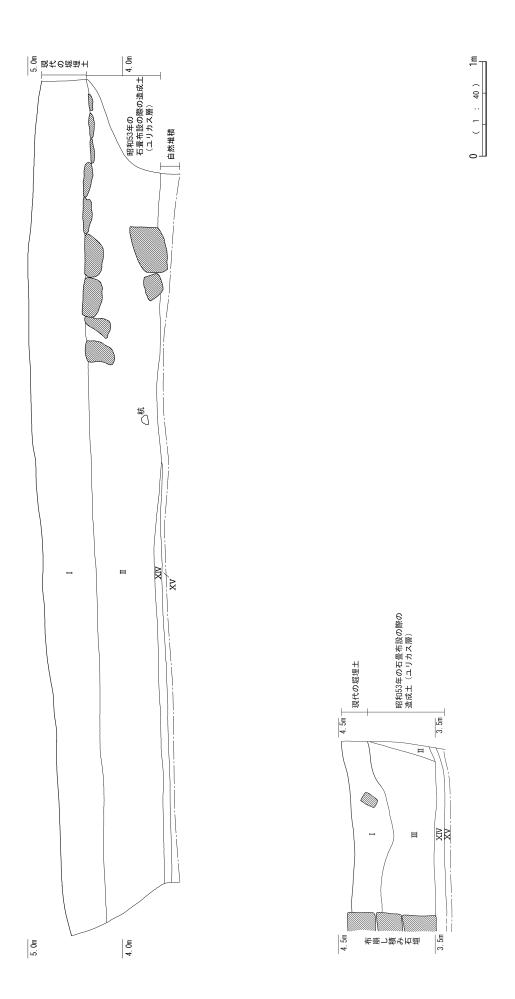
谷崩し積み石垣最下段・胴木

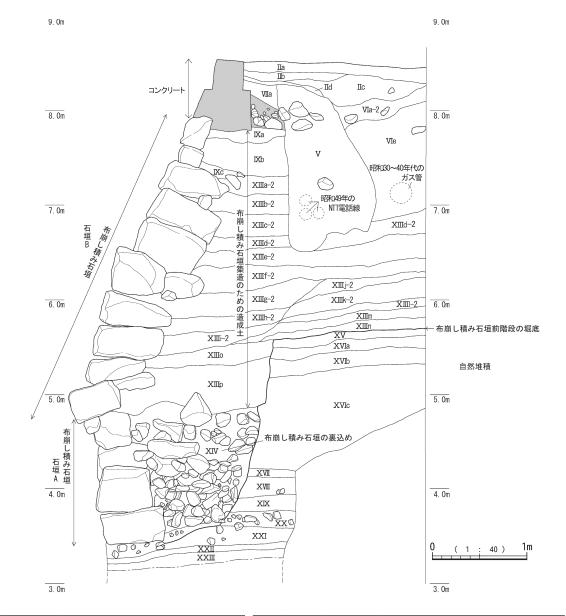
谷崩し積み石垣最下段は、布崩し積み石垣 11 段目の前面で確認された。その下位からは、標高約 4.4mで直径約 20cmの胴木 2 本を検出した。胴木同士は、金属のボルトでつなげられていた。谷崩し積み石垣は、布崩し積み石垣構築後、堀が埋まったあとに、その堀を掘って胴木を設置した上に築かれていた。谷崩し積み石垣の裏込めには、近代のガラス製品等の被熱

した遺物が多く含まれている。現在,黎明館屋外展示 ゾーン付近にあった第七高等学校造士館の寮は,昭和 2 (1927) 年に火災に遭っており,その際の片付け層 が利用した可能性がある。このため,谷崩し積み石垣 は,昭和2 (1927) 年以降に構築された可能性がある。

布崩し積み石垣 11 段目~14 段目

布崩し積み石垣 11 段目~14 段目は,石垣前段階の堀の南側(本丸側)を約 160cm深く掘って構築した石垣である。石材の大きさは揃っておらず,長さ約 $30 \sim 70$ cm,幅約 $20 \sim 40$ cm のものが並べられている。石垣 10 段目より上の石垣は上に向かって傾斜するが,石垣は直立する。また,これより上段の布崩し積み石

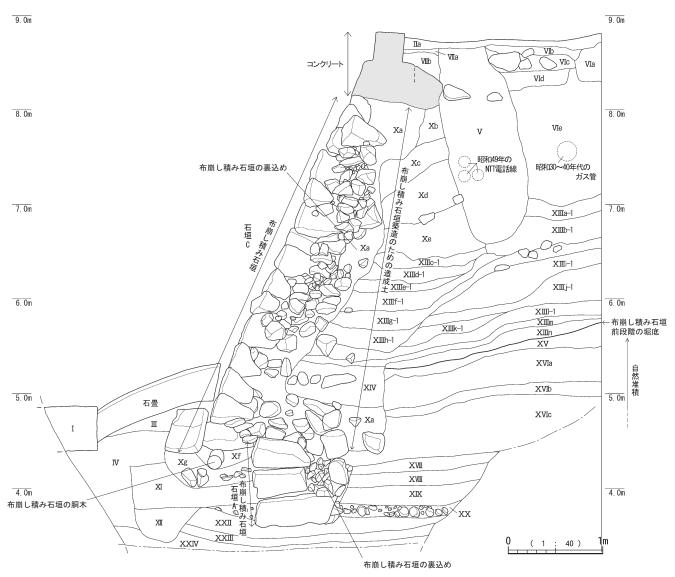




| Ⅱ a | 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 | |
|--|-----------|---------|---------|---------------------------|--|
| Ⅱ c 10YR4/3 にぶい黄褐色土 真砂土,3~5 cmの礫を含む Ⅱ d 10YR3/2 黒褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの礫を含む。固くしまる ▼ | Πa | | | 西壁と同じ | |
| Ⅱ d 10YR3/2 黒褐色土 きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。固くしまる V 西壁と同じ VI a-2 10YR6/2 にぶい黄褐色土 シラス層。3~5cmの礫を含む VI e 西壁と同じ 歴史同じ 区域 10YR4/3 にぷい黄褐色土 拳大~人頭大の核礫を多量に含む。瓦,陶磁器出土 区 b 10YR5/4 にぷい黄褐色土 巻大~人頭大の核礫を多量に含む。瓦,陶磁器出土 区 b 10YR5/4 にぷい黄褐色土 きめの細かい砂層。1~5cmの礫を含む 区 c 10YR5/4 にぷい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む 区 L にぷい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む 区 D 2 10YR5/4 にぷい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む 区 D 2 10YR5/4 にぷい黄褐色土 きめの細かい砂層。1~3cmの小礫を含む。0.1~0.5cmの黄橙色パミスを含む 区 10YR4/2 反黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5cmの小礫を含む。鉄分を多く含む I 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1~5cmの小礫を含む。上面固くしまる 区 10YR4/6 褐色土 きめの細いい砂層。1~5cmの円礫を含む と I 10YR4/6 褐色土 きめの細いい砂層。1~5cmの円礫を含む | Пþ | 10YR3/2 | 黒褐色土 | きめの細かい砂層。3 cm~拳大の礫を多量に含む | |
| V 西壁と同じ VI a-2 10YR6/2 にぶい黄褐色土 シラス層。3~5 cmの礫を含む VI e 西壁と同じ WI a 10YR4/3 にぶい黄褐色土 拳大~人頭大の核礫を多量に含む。瓦,陶磁器出土 IX b 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。1~5 cmの礫を含む IX c 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの円礫を含む XIII a-2 10YR5/3 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの円礫を含む XIII b-2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。1~3 cmの円礫を含む。0.1~0.5 cmの黄橙色バミスを含む XIII c-2 10YR4/2 灰黄褐色土 きめの細い砂層。1~5 cmの小礫を含む。針分を多く含む XIII c-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む。上面固くしまる XIII c-2 10YR4/6 褐色土 きめの細いい砂層。1 cm~拳大の礫を含む XIII c-2 10YR4/6 褐色土 きめの細いい砂層。1 cm~参大の礫を含む | Ιс | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 真砂土,3~5cmの礫を含む | |
| VI a | ΙΙd | 10YR3/2 | 黒褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む。固くしまる | |
| VI e | V | | | 西壁と同じ | |
| WII a | VI a-2 | 10YR6/2 | にぶい黄褐色土 | シラス層。3~5 cmの礫を含む | |
| IX a 10YR4/3 にぶい黄褐色土 拳大~人頭大の核礫を多量に含む。瓦,陶磁器出土 IX b 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。1~5 cmの礫を含む IX c 10YR5/4 にぶい黄褐色土 IX b と似るが、多量の礫を含む(裏込め層) XIII a-2 10YR5/3 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの円礫を含む XIII b-2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの円礫を含む XIII c-2 10YR7/1 灰白色土 きめの細かい砂層。1~3 cmの小礫を含む。0.1~0.5 cmの黄橙色パミスを含む XIII d-2 10YR4/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む。 生面固くしまる XIII f-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XIII g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細かい砂層。1~5 cmの円礫を含む XIII h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの細い砂層。1~5 cmの円礫を含む | VI e | | | 西壁と同じ | |
| IOYR5/4 | VII a | | | 西壁と同じ | |
| IX c | IX a | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 拳大~人頭大の核礫を多量に含む。瓦,陶磁器出土 | |
| XⅢ a-2 10YR5/3 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの円礫を含む XⅢ b-2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3~5 cmの円礫を含む XⅢ c-2 10YR7/1 灰白色土 きめの細かい砂層。1~3 cmの小礫を含む。0.1~0.5 cmの黄橙色パミスを含む XⅢ d-2 10YR4/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5 cmの小礫を含む。鉄分を多く含む XⅢ e-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む。上面固くしまる XⅢ f-2 10YR5/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XⅢ g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細い砂層。1~5 cmの円礫を含む XⅢ h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの細い砂層。1~5 cmの円礫を含む | IX b | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。1~5cmの礫を含む | |
| XⅢ b-2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 きめの細かい砂層。3 ~ 5 cmの円礫を含む XⅢ c-2 10YR7/1 灰白色土 きめの細かい砂層。1 ~ 3 cmの小礫を含む。0.1 ~ 0.5 cmの黄橙色パミスを含む XⅢ d-2 10YR4/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 ~ 5 cmの小礫を含む。鉄分を多く含む XⅢ e-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む。上面固くしまる XⅢ f-2 10YR5/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XⅢ g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細かい砂層。1 ~ 5 cmの円礫を含む XⅢ h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの組い砂層。1 ~ 5 cmの円礫を含む | IX c | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | IX b と似るが、多量の礫を含む(裏込め層) | |
| XⅢ c-2 10YR7/1 灰白色土 きめの細かい砂層。1~3 cmの小礫を含む。0.1~0.5 cmの黄橙色パミスを含む XⅢ d-2 10YR4/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5 cmの小礫を含む。鉄分を多く含む XⅢ e-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む。上面固くしまる XⅢ f-2 10YR5/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XⅢ g-2 10YR5/6 褐色土 きめの細い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XⅢ h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの細い砂層。1~5 cmの円礫を含む XⅢ h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの組い砂層。1~5 cmの円礫を含む | X III a−2 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む | |
| XIII c-2 IOTR//1 吹白色工 cmの黄橙色バミスを含む XIII c-2 10YR4/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5cmの小礫を含む。鉄分を多く含む XIII c-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1cm~拳大の礫を含む。上面固くしまる XIII c-2 10YR5/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1cm~拳大の礫を含む XIII g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XIII h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの細い砂層。1~5cmの円礫を含む XIII h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5cmの円礫を含む | X Ⅲ b-2 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む | |
| XIII G-2 IOTR4/2 灰食楠色士 く含む XIII G-2 10YR5/8 明褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む。上面固くしまる XIII G-2 10YR5/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む XIII g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細かい砂層。1~5 cmの円礫を含む XIII h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5 cmの円礫を含む | X Ⅲ c-2 | 10YR7/1 | 灰白色土 | | |
| X III e-2 IOTK5/8 明褐色工 しまる X III f-2 10YR5/2 灰黄褐色土 きめの粗い砂層。1 cm~拳大の礫を含む X III g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細かい砂層。1 ~ 5 cmの円礫を含む X III h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの粗い砂層。1 ~ 5 cmの円礫を含む | X Ⅲ d-2 | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | | |
| XIII g-2 10YR4/6 褐色土 きめの細かい砂層。1~5cmの円礫を含む XIII h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5cmの円礫を含む | X III e−2 | 10YR5/8 | 明褐色土 | | |
| XⅢ h-2 10YR5/6 黄褐色土 きめの粗い砂層。1~5cmの円礫を含む | X Ⅲ f-2 | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | きめの粗い砂層。1cm~拳大の礫を含む | |
| 7 | X Ⅲ g-2 | 10YR4/6 | 褐色土 | きめの細かい砂層。1~5cmの円礫を含む | |
| | X III h−2 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの円礫を含む | |
| XⅢ i-2 10YR6/4 にぶい黄褐色土 きめの粗い砂層。3 cm~拳大の円礫を含む。 | X Ⅲ i-2 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色土 | きめの粗い砂層。3 cm~拳大の円礫を含む。 | |

| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|-----------|----------|---------|---|
| ХШ j-2 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色土 | きめの粗い砂層。3cm~拳大の円礫を含む。上面に 鉄分の層がができる |
| X Ⅲ k-2 | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | きめの細かい砂層。1~5cmの小礫を含む。鉄分を 多く含む。やや粘性あり |
| X III 1−2 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3cm~拳大の円礫を含む |
| ΧШm | | | 西壁と同じ |
| XⅢn | | | 西壁と同じ |
| ХШо | 10YR7/2 | 明黄褐色土 | きめの細かい砂層。3cm~拳大の円礫,石垣片や瓦 を含む |
| ХШр | 10YR6/4 | 黄褐色土 | きめの粗い砂層。1cm~拳大の円礫を含む |
| XIV | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 拳大~人頭大の割石,円礫からなる砂層 |
| ΧV | | | 西壁と同じ |
| XVI a | | | 西壁と同じ |
| XVI b | | | 西壁と同じ |
| XVIc | | | 西壁と同じ |
| ΧVII | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 1~5 cmの小礫 (白礫)軽石を多く含む |
| ΧWI | 10YR4/3 | 暗褐色土 | XVII層に似るがやや粘性が強い |
| XIX | 10YR4/1 | 褐灰色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの小礫,軽石を多く含む |
| XX | 10YR3/1 | 黒褐色土 | きめの粗い砂層。2 cm~拳大の円礫を多く含む |
| XXI | 10YR4/1 | 褐灰色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの軽石を多量に含む |
| XXI | 2.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性強い、粘土層 |
| XXII | 10YR4/1 | 褐灰色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの円礫,軽石含む |

第28図 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (東壁)



| | | | 41.00 |
|-----------|-----------|---------|---|
| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
| I | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 粘性強い。大小の礫,瓦,人頭大の石(石垣の砂か) 含む |
| Πa | 10YR3/3 | 褐灰色土 | きめの細かい砂層。3cm~拳大の礫を含む |
| Ш | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 2 cm~拳大の礫を含む。粘性強い |
| IV | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 1~6 cmの多量の貝層。粘性強い。プラスチック片 と瓦片混じる |
| v | 10YR3/3 | 暗褐色土 | きめの細かい砂層。3cm~拳大の礫を多量に含む。 瓦出土,焼土を多く含む |
| VI a | 10YR6/2 | にぶい黄褐色土 | シラス層。3~5cmの礫を含む |
| VI b | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。拳大~人頭大のコンクリートブ ロックを含む |
| VI c | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 焼土を多く含む。 $3\sim5$ cmの礫, コンクリートブロックを含むガレキ層 |
| VId | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む |
| VI e | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | 昭和 30 ~ 40 年代のガス管 |
| VII a | 10YR3/3 | 暗褐色土 | きめの細かい砂層。3cmの礫を含む。上面は固くしまる |
| VII b | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む |
| X a | 10YR2/1 | 黒褐色土 | きめの細かい砂層。焼土を多量に含む。ガラス、瓦、 陶磁器、拳大~人頭大の角礫、円礫を多く含む |
| Хb | 10YR3/3 | 暗褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む |
| Хc | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの礫を含む |
| X d | 10YR4/4 | 褐色土 | きめの細かい砂層。焼土を含む。ガラス,瓦,拳大 ~人頭大の礫,コンクリートを含む |
| Хe | 10YR3/2 | 暗褐色土 | きめの細かい砂層。3 cm~拳大の礫を含む |
| Χf | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 1 ~ 5 cmの小礫を含む |
| Хg | 10YR4/1 | 褐灰色土 | きめの細かい砂層。1cm~拳大の割石,小礫を多く含む |
| XI | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 粘性強い。1~5 cmの小礫を含む |
| XII | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性強い。拳大の礫が多く入る |
| X III a−1 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む |
| X Ⅲ b-1 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色土 | 固くしまる。粗い砂層。1~3cmの小礫含む。1~3cmの黄橙色のパミス含む |
| X III c−1 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。3~5cmの円礫を含む |

| | | , | |
|-----------|----------|---------|--|
| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
| X Ⅲ d-1 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | きめの細かい砂層。1~3cmの小礫を多く含む。1 ~3cmの黄橙色のパミス含む |
| X III e−1 | 10YR4/5 | 褐色土 | きめの細かい砂層。1~3cmの小礫を多く含む。1 ~3cmの黄橙色のパミス含む |
| X III f−1 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。鉄分を多く含む。1cm~拳大の 円礫を含む |
| X III g−1 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色土 | きめの粗い砂層。1cm~拳大の礫を含む |
| X Ⅲ h-1 | 10YR6/2 | 灰黄褐色土 | やや粘性あり。1 cm~拳大の礫(角,円)を含む。 瓦出土 |
| XⅢ i-1 | 10YR4/4 | 褐色土 | きめの粗い砂層。上面は固く締まる |
| X III j−1 | 10YR5/3 | 褐色土 | きめの粗い砂層。1cm~拳大の円礫を含む |
| X III k−1 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。1~5cmの円礫を含む |
| X III 1−1 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの円礫含む。鉄分多く含む |
| ΧШm | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。1~5cmの円礫を含む |
| XⅢn | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。1~5cmの円礫を含む |
| XIV | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 拳大~人頭大の割石、円礫からなる砂層 |
| ΧV | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの円礫を含む。上面は鉄分が固くしまった面になっている |
| X VI a | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | シルト層。やや粘性あり。1~3cmの小礫を含む。 鉄分多く含む |
| XVI b | 10YR6/1 | 褐灰色土 | シルト層。XVI a 層よりやや粘性が強い |
| XVI c | 10YR2/1 | 黒色土 | 泥炭層。粘性強い。炭化物を含む。陶磁器出土 |
| ΧWI | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 1~5 cmの小礫を(白礫) 軽石を多く含む砂層 |
| ΧWI | 10YR3/4 | 暗褐色土 | XVII層に似るがやや粘性強い |
| XIX | 10YR4/1 | 褐灰色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの小礫, 軽石を多く含む |
| ХХ | 10YR3/1 | 黒褐色土 | きめの粗い砂層。2 cm~拳大の円礫を多く含む。1 ~5 cmの軽石含む |
| XXI | 2.5YR3/3 | 暗褐色土 | 粘性強い。粘土層 |
| XXII | 10YR4/1 | 褐灰色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの円礫,軽石含む |
| XXV | 10YR3/2 | 黒褐色土 | きめの粗い砂層。1~5cmの円礫,軽石含む |

第29図 北御門跡周辺石垣修復調査区 土層断面図 (西壁)

垣と違い、石垣背面に幅約120~140cmの裏込めをもつ。裏込めは、10cm~人頭大の円礫を充填している。 裏込めの中からは、わずかに瓦(107・108)が出土した。瓦は、17世紀後半のものであり、この布崩し積み石垣が築城当時のものではなく、17世紀以降に構築されたことを裏付ける。石垣下に胴木はなく、自然堆積層面にそのまま石垣を構築している。

出土遺物 北御門跡周辺石垣修復調査区では,78~108が出土した。遺物は,出土層位ごとに報告する。

V・VI層出土遺物(NTT電話線やガス管埋設のための現代の造成土・攪乱層)

78 は、中国景徳鎮窯系の青花碗である。16 世紀末~17 世紀第1四半期。外面に唐草文が描かれる。79 は、瀬戸美濃の磁器小碗である。内面見込みには、透明感のある釉薬で文様が描かれる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。80 は、豊前の陶器壺である。福岡県北九州市小倉の名物であった三官飴の容器である。近代。81 は、その他の軒平瓦(D-044)である。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。瓦当上端は幅広く面取りされる。82 は、陶器瓦の平瓦である。凹面は釉尻ハート型に釉薬が二条掛けられており、田ノ浦窯系のものと考えられる。凹面周縁は面取りされる。被熱しており、釉薬がただれている。83 は、桟瓦である。近代のプレス瓦である。被熱しており、赤く変色している。

X層出土遺物(谷崩し積み石垣の裏込め)

85 は、一木づくりの下駄である。胴木の埋土から出土した。隅丸長方形で、直線的な二本の肉厚な歯を有する。84,86~87 は、谷崩し積み石垣裏込めから出土した。84 は、肥前系の磁器小碗である。19世紀前半~中頃。86 は、竪野系の白薩摩とよばれる白色陶胎の皿である。総釉だが、畳付は釉剥ぎされる。見込みの上には白色陶胎が張り付いているが、これが文様を意図したものかは不明である。18世紀後半~19世紀。87 は、連珠三巴文軒丸瓦(A種不明)である。連珠は大きく、立体的である。尻側には直径3cmの釘穴が穿たれる。凹面の布袋痕は、工具によるケズリによってわずかに残るのみである。88 は、塀瓦。上面周縁は面取りされる。隅に直径2cmの釘穴が穿たれる。周辺の塀などに用いられたと考えられる。

XⅢ p 層出土遺物(裏込めをもたない布崩し積み石垣の造成土)

89 は、連珠三巴文軒丸瓦(A-049)である。瓦当周縁は広く、文様区は狭い。丸瓦部から瓦当上端に掛けてはややそり上がる。灰白色の胎土で、雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。90 は、丸瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面は、尻側に

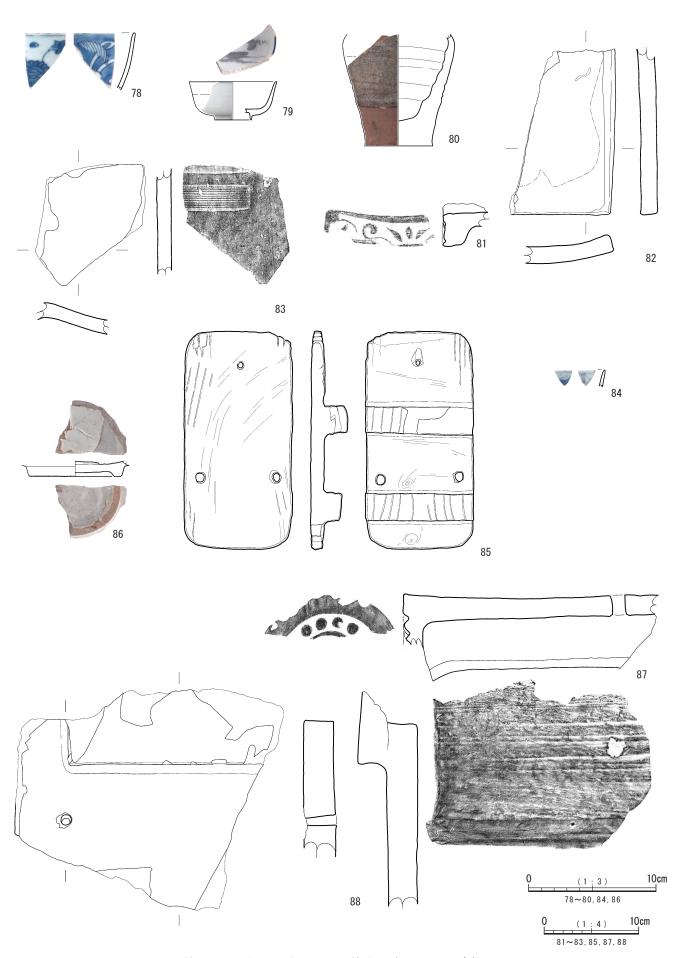
布袋痕,それより頭側にはコビキBが残る。91 は,丸 瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面 は布袋痕が残る。凸面は,縦方向のケズリ痕が残る。92 は丸瓦である。全体が鉄分を帯びており,調整等はみえ ない。灰白色の胎土で,きめは細かく雲母が多く含まれ る。長崎で製作されたと考えられる。93 は,平瓦である。 小型で焼成はやや不良。古式を呈する。凹面の周縁はわ ずかに面取りされる。灰白色の胎土で,きめは細かく雲 母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。94 は,平瓦である。小型で焼成はやや不良。古式を呈する。 凹面の周縁はわずかに面取りされる。薩摩以外で製作さ れた可能性がある。95 は,17世紀代の古瓦の平瓦である。 黒色で小型,焼成はやや不良である。96 は,朝鮮系瓦 の丸瓦である。小型で焼成はやや不良。凸面はタタキに よる幾何学模様が描かれる。

97~102は、陶器瓦である。97は、その他の軒丸瓦 (C-012) である。被熱しており、釉薬はただれている。 同笵の瓦は,苗代川系の堂平窯跡で出土している。98は, その他の軒平瓦 (D-037) である。瓦当貼付け技法。凹 面は幅広に面取りされ、瓦当との接合部付近から尻に向 かって縦方向に筋状の調整痕が残る。被熱しており、釉 薬はただれている。同笵の瓦は、苗代川系の堂平窯跡で 出土している。99 と 100 は、丸瓦である。成形は粘土 紐巻き上げ技法で、凹面には、粘土紐を積み上げた部分 に強いヨコナデ調整が残る。凸面は釉尻ハート型に釉薬 が2条もしくは3条流し掛けされており、田ノ浦窯系の 釉薬瓦と考えられる。被熱しており、凸面には炭がつい ている。101は、丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法。 尻側に焼成前に直径2cmの釘穴が穿たれる。凸面には 横方向に筋状の調整痕が残る。堂平窯跡系の陶器瓦であ る。被熱しており、釉薬はただれている。102は、平瓦 である。凹面は釉薬が釉尻ハート形に二条掛けられてお り、田ノ浦窯系のものと考えられる。凹面周縁は面取り される。被熱しており、釉薬がただれている。釉薬瓦は、 すべて被熱していた。

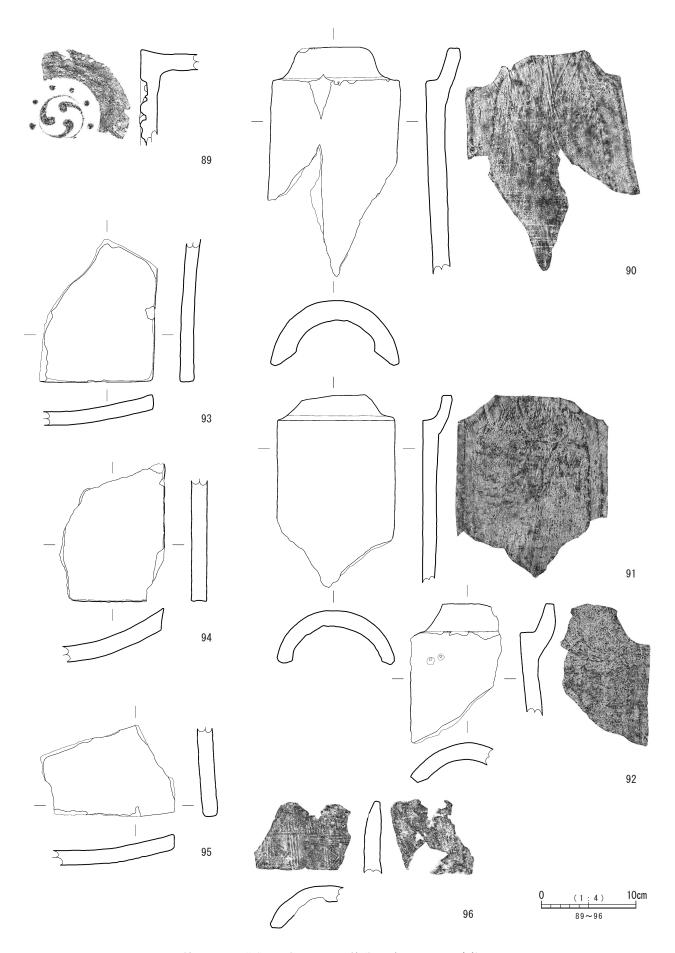
103 は、17世紀代の古瓦の丸瓦である。凹面には布袋 痕が残る。凸面には縦方向のケズリ痕が残る。黒色で小型、焼成はやや不良である。104 は、平瓦である。古式 瓦と考えられるが、その中では大型で焼成も良好である。 凹面の周縁はわずかに面取りされる。105 は、平瓦であ る。小型。凹面はわずかに面取りされョコナデ調整痕が 残る。凸面は斜め方向のケズリ痕が残る。106 は、木製品。 何らかの栓であると考えられる。

XIV層出土遺物 (裏込めをもつ布崩し積み石垣裏込め)

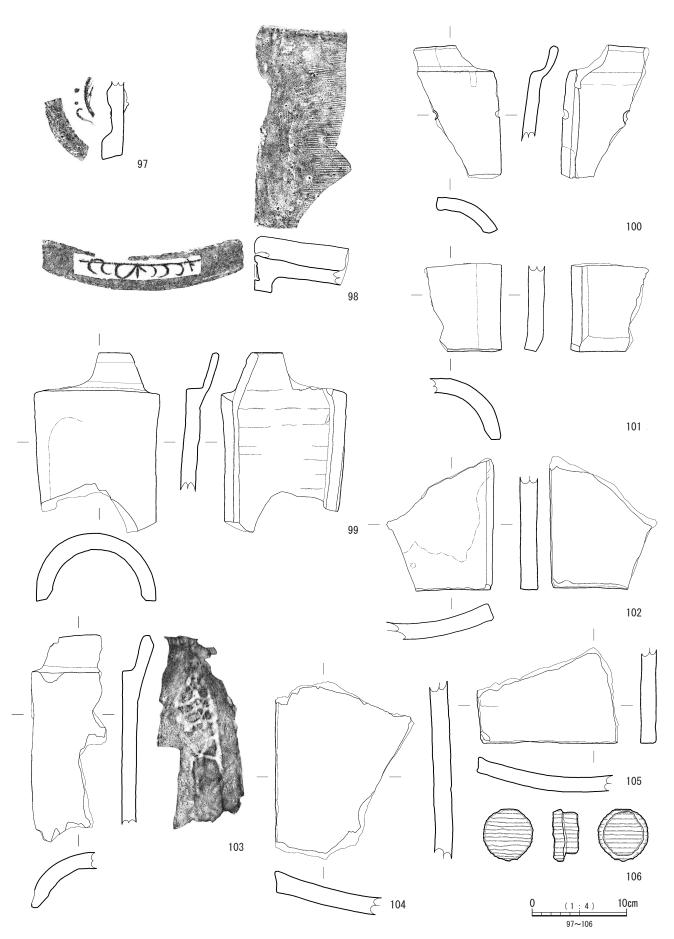
107 は、丸瓦である。凹面には布袋痕が残る。凸面は 縦方向のケズリ痕が残る。灰白色の胎土で雲母が多く含 まれる。長崎で製作されたと考えられる。108 は、陶器 瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で、粘土紐



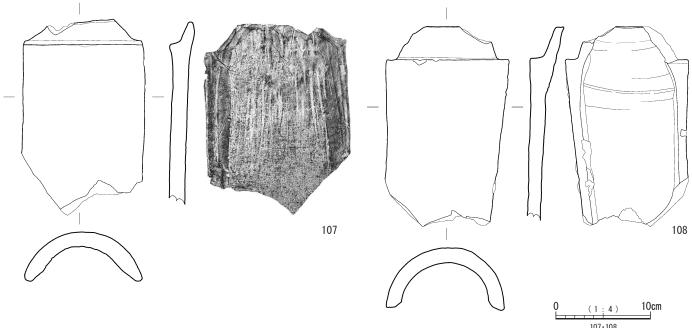
第30図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物1



第31図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物2



第32図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物3



第33図 北御門跡周辺石垣修復調査区 出土遺物4

を積み上げた部分に強いヨコナデ痕が残る。被熱しており、 釉薬はただれている。

小結

石垣は背面構造の違いにより、円礫の裏込めをもち垂直に立ち上がる布崩し積み石垣(布崩し積み石垣11~14段目、以下石垣A)、裏込めをもたない傾斜する布崩し積み石垣(布崩し積み石垣2~10段目、石垣B)、角礫の裏込めをもつ布崩し積み石垣(以下、石垣C)、谷崩し積みの石垣(以下石垣D)の4種類に大別できる。ここでは、石垣の構築過程とそれに伴う本丸北堀の変遷について述べる。

鹿児島城築城時は、石垣前段階の堀(XV層)が本丸 北堀であったと考えられる。本丸北堀は、現在よりも北 側まで広がっていたと考えられる。北岸に石垣があった かどうかは判断できない。その後、その堀の南側(本丸側) を深く掘り下げ、石垣Aを構築している。石垣前段階の 堀の直上には、固く締まった砂層(XⅢn層があるが)、 これは堀を埋める際に固く締めた砂層を敷き、その上を 作業路として石垣Aを構築した可能性がある。石垣Aを 構築したことで、本丸北堀は現在と同じ幅まで狭くなり、 160cmほど深く掘り下げられた。石垣Aの構築時期につ いては、108の瓦が被熱していることから、元禄9(1696) 年の大火以降の可能性がある。

その後、石垣Bが構築される。石垣A裏込め出土の瓦と石垣B裏側の造成土で出土瓦にはほぼ時期差もないことから、同時期の可能性もあるが、背面構造などの構築方法が異なっているため、同時期の石垣で構築過程が違うのか、時期差があるかは判断できない。

その後、石垣Cが築かれる。石垣Cは裏込めに被熱したガラス片やコンクリートブロックを含むことから、近代以降のものである。昭和2 (1927) 年の第七高等学校造士館の寮の火災からの片付け層と考えられる層を含んでいること、昭和2 (1927) 年に鹿児島電気軌道 (現在の鹿児島市電) 上町線が開通していることから、この時期に石垣Cは構築された可能性がある。石垣Dは、石垣Cの勾配に合わせて石垣Dの上に積み足したものと考えられる。

堀はその後,昭和53 (1978)年の黎明館建設に伴う 工事で約120cm 埋められ、現在の深さになった。

今回の発掘調査では、鹿児島城の石垣の背面構造をは じめて考古学的に調査できた。その結果、石垣の積み方 と背面構造から石垣の種類を分類できること、石垣の変 遷を追うことができたこと、石垣構築前に堀があり、現 在の堀よりも浅く広かったことを確認できた。

遺物は近世〜近代の瓦,陶磁器,ガラス,木製品が出土した。瓦は,特に,陶器瓦やコビキBをもつ丸瓦など, 鹿児島城内の他の調査地点に比べ,17世紀代のものが 目立つ。

4 御兵具所跡(第34図~第39図)

概要 「御兵具所」は、石垣と長屋が一体となった多聞櫓型式の建物である。天保 14 (1843) 年「天保年間鹿児島城下絵図」(第 145 図⑥) には、御楼門から北の石垣隅欠部、北御門にかけてL字状に描かれている。また、明治初期の古写真(第 147 図③)では、本瓦葺きで外壁を海鼠瓦で荘厳された建物が写っている。なお、元禄9(1696)年「鹿児島城絵図控」(第 144 図②)では塀とし

て描かれており、18世紀以降に塀が多聞櫓型式の建物 に変わったと考えられる。

御兵具所跡は、平成28年度の調査で、御楼門側のL~N-27・28区において、南端が本丸東側の石垣と一体となって検出されている(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020)。建物は、布基礎の上に基礎石を列状に巡らした構造で、石列内側には4間の梁間をもつ坪地業と礎石を検出している。その周囲には、幅約50cmの露台と排水溝を巡らしている。なお、石垣上端から排水溝までの御兵具所跡の幅は約8mある。排水溝側石の標高は10.8mで、深さは約20cmである。石材はすべて溶結凝灰岩である。

今回の調査は、「御兵具所」と付帯施設の確認とそれ に関連する石垣の背面状況確認を目的として実施した。

51 トレンチ (第35図)

概要 本丸跡北石垣側の御兵具所跡を確認するために, $K \cdot L - 34 \sim 35$ 区に設定した。規模は $4 \times 2.5 m$ で,園路と重なる部分については,安全確保のため保全した。

表土から約1.3m は黎明館建設時の緑地整備の際に使用したシラス等の造成土であり、遺構はその下位の標高11m 前後で確認した。

遺構 遺構は,坪地業と排水溝と組み合う石列を確認した。 (1)坪地業(第35図)

標高 10.8m 前後で,坪地業 5 基を検出した。坪地業 1-2 は梁間方向,坪地業 2-4 が桁行方向に並ぶ。坪地業 1-2間の 1間は 1 m 95 cm,坪地業 2-4間では 1 m 94 cm を測る。坪地業 2-3間は 97 cm,坪地業 3-4間は 97 cm ありおおよそ半間の規模である。なお,坪地業 3 は南側が削平されている。坪地業 5 は,坪地業 4 に隣接しており,建て替えや補強された痕跡の可能性がある。排水溝上にも柱痕がみられる。

これらの坪地業は、穴を掘り溶結凝灰岩と河原石を混ぜ、木槌等で潰し固めて充填したものである。柱の沈下を防ぐための地固めで、この上に建物の基礎石を載せる。

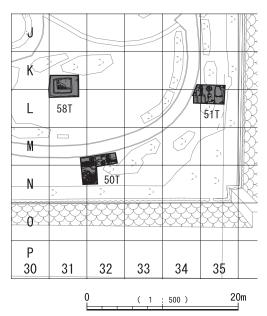
(2) 石列・排水溝(第35図)

石列は、石垣と平行して東西方向に2石検出している。 石列の角石は幅26 cm, 厚さ30 cm, 長さ約40 cmで, 面 調整が鑿で斜状に施され, 4列の刻みが見られる。調整 痕から判断すると、下段の角石にあたると思われる。ま た、南側には一段低い板石があり、板石の下と石列の石 垣側には栗石を敷きこんでいる裏込め石が見られる。こ れらは、建物の基礎石にあたり、礎石下部と排水溝を組 み合わせている。位置は、昭和53・54年度の調査の基 礎石と排水溝と重なる。

排水溝は,底石を確認した。溶結凝灰岩製である。 出土遺物 (第38図109~112)

109 は、肥前系の磁器碗である。いわゆる小広東碗で





第34図 御兵具所跡調査区トレンチ配置図

ある。外面には梵字文・内面見込みには虫文が描かれる。 1770~1810年。110は、加治木・姶良系の陶器鉢である。 龍門司三彩である。近代。111は、苗代川系の陶器擂鉢。 折り曲げ口縁である。18世紀後半。112は、大坂式軒平 瓦(A-011)である。瓦当貼り付け技法。凹面には横方 向のナデ調整痕が残る。

小結 排水溝と組み合う本丸跡北側石垣天端の幅は、約8mである。石列の内側に坪地業、外側に排水溝をもつ構造は、『御楼門跡周辺』で確認された御兵具所跡と同様である。また、この幅は、北御門跡周辺調査区の御兵具所跡の石垣天端から石列と排水溝1の幅と同様であることから、北御門跡側の御兵具所跡の一部が確認されたと考えられる。

50 トレンチ (第36図)

概要 本丸跡東石垣側の御兵具所跡を確認するため、N・M-31 \sim 32 区に L 字形で設定した。位置としては、鬼門除けの隅欠から約 15m 南にあたる。51 トレンチと同じく、標高約 11m までは盛土である。

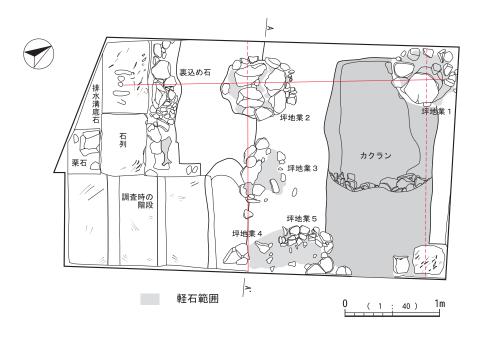
遺構 トレンチ東側において,石垣の裏込めを検出した。 また,トレンチの西側では,溶結凝灰岩を小さく割り, 敷き固めた布基礎を南北方向に検出した。

(1) 裏込め(第36図)

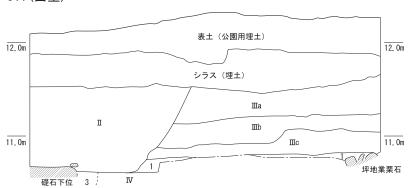
土層断面を確認したところ、検出面から西に向けて、 時期の新しい円礫が重なり、下位に大きめの円礫が潜り 込んでいる様子が窺えた。

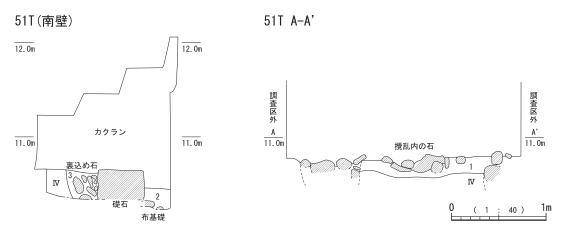
(2) 布地業 (第36図)

途中2か所で、溶結凝灰岩を充填する東西方向に延び



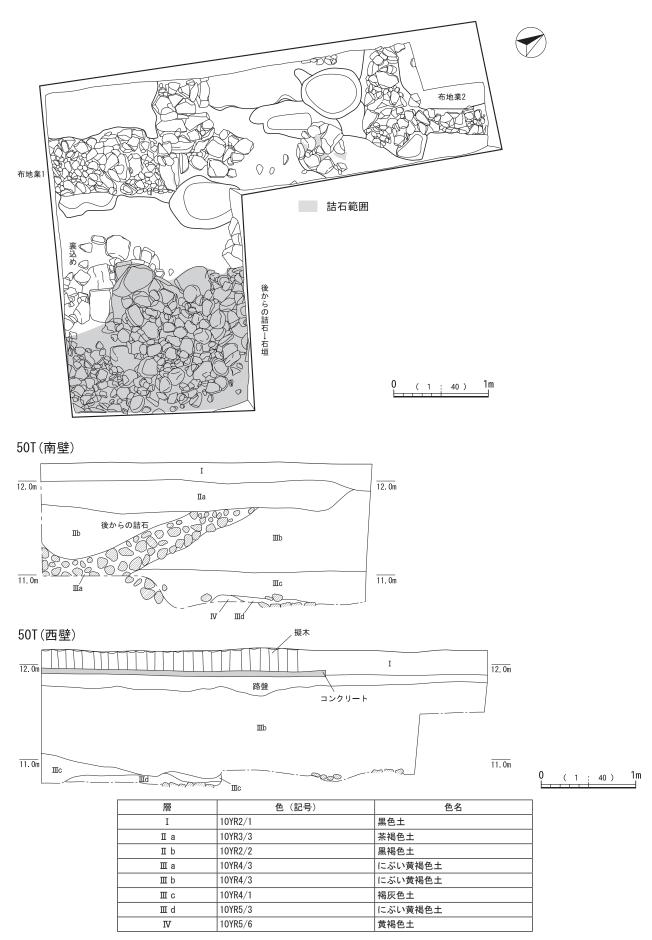
51T(西壁)



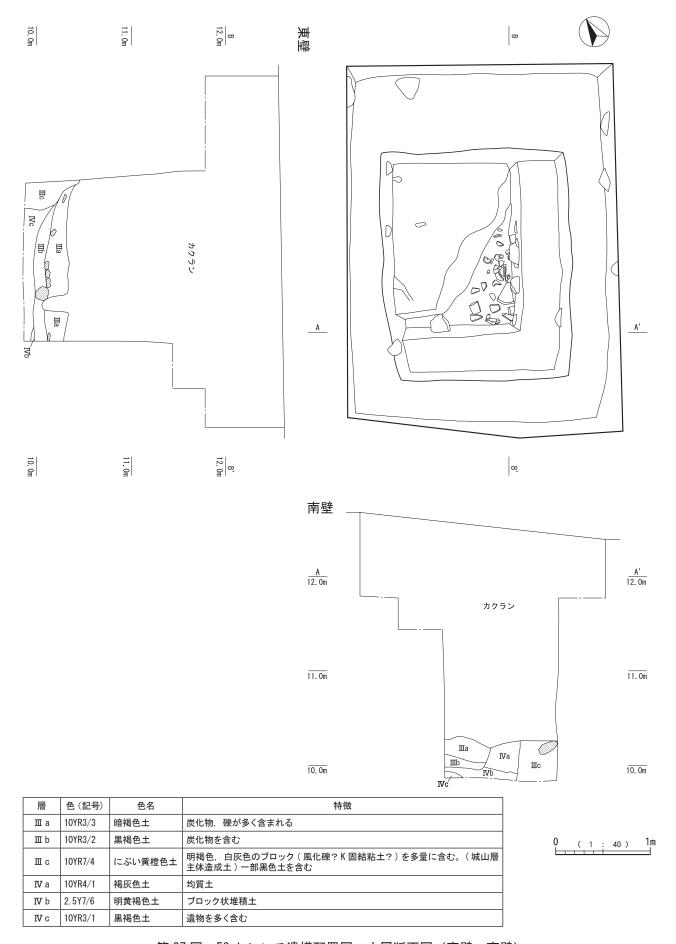


| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 |
|----|-----------|---------|--|
| П | 10YR3/1 | 黒褐色土 | |
| Ша | 10YR3/2 | 黒褐色土 | |
| Шb | 10YR4/1 | 褐灰色土 | |
| Шс | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | |
| IV | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 灰白(10YR7/1)~明黄褐色風化礫(10YR7/6) ブロック状混在土 |
| 1 | 10YR4/2 | 黒褐色土 | 砂礫が多く含まれる(礫φ5mm程) |
| 2 | 7. 5YR4/2 | 灰褐色土 | 砂質が強く $2\sim4$ cm程の円礫が多く含まれる。また土層にかかっていない部分に凝灰岩、軽石の中礫も含まれる |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 凝灰岩 10 ~ 20 cm程と円礫が多く入る。多聞櫓基礎埋設時土 |

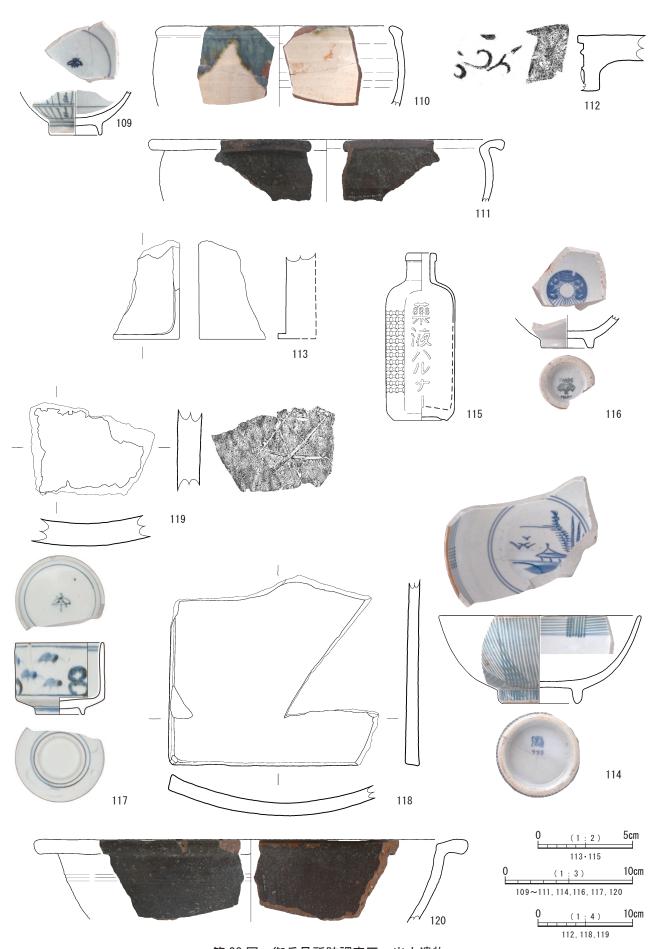
第35図 51トレンチ遺構配置図・土層断面図 (西壁・南壁・東西壁)



第36図 50トレンチ遺構配置図・土層断面図(南壁・西壁)



第37図 58トレンチ遺構配置図・土層断面図(東壁・南壁)



第38図 御兵具所跡調査区 出土遺物



第39図 御兵具所建物際の排水溝推定図

る布地業も確認された。地業間の間隔は1m95 cmで一間 ある。布基礎は布地業に対して直角に造られていること から間仕切りの布基礎と推定される。

出土遺物 (第38図113~116)

113 は、小型の硯である。周縁は薄く小型。114 は、瀬戸の磁器碗。高台内側には統制番号 770 が描かれる統制食器である。内面見込みには楼閣山水文が描かれる。第二次世界大戦中。115 は、薬液ハルナーというエンボスがあるため、橋本ケミカル合資会社の医薬品、薬液ハルナーである。皮膚疾患の一般治療薬であった。これは口縁部の形状から明治から戦前までの瓶であると考えられる。116 は、肥前の磁器碗である。第二次世界大戦中。小結 このトレンチでは布基礎と石垣の裏込めが確認された。このトレンチ外側では、昭和 53・54 年度の調査で、建物の基礎石と排水溝が確認されており、それが御兵具所跡の外側である。今回のトレンチは、その内側にあるため、布地業は、御兵具所跡建物の内部施設に関わる物である可能性がある。

58 トレンチ

58トレンチは、御兵具所番所 (I・J-27・28区) の範囲を確認するため、K・L-31区に設定した。この地点は、攪乱が深さ2m以上続くことが確認されたものの、築城時の造成土を検出することができたが、遺構は検出できなかった。

出土遺物 (第 38 図 117 ~ 120)

117 は、薩摩磁器碗である。腰部で折れて直線的に立ち上がる筒型碗である。見込みと外面には昆虫文が描かれる。18 世紀末~19 世紀初頭。118 は、平瓦である。凸面には、×が刻書される。119 は、平瓦である。凹面は面取りされている。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと考えられる。120 は、苗代川系の陶器擂鉢である。折曲げ口縁である。18 世紀後半。小結 近世遺物は確認したが、御兵具所の範囲からは外れており、遺構は確認できなかった。

小結 (第39図)

平成27年度の御楼門跡周辺と今回北御門跡周辺調査区、51トレンチの成果をあわせると、「御兵具所」は、北御門跡側は約6m(3間)、御楼門跡側は約8m(4間)の梁間をもつ建物で、天保14(1843)年「天保年間鹿児島城下絵図」や明治6(1873)年の「鹿児島屋形及びその周辺図」で描かれているように、北御門跡から御楼門跡周辺まで続いていたと考えられる。第39図は、その推定線である。また、その規模は、本丸跡北側石垣と本丸跡東側石垣で異なっていたことも確認できた。

5 御楼門跡南側石垣周辺(第40図~第63図)

概要 調査地区は、御楼門跡から御角櫓跡までの間の本 丸跡東石垣に沿った場所にあたり、区としては $K \sim N-7 \sim 17$ 区である。

この地区の石垣は、0-8 区より南は、平成 11 年に積み直されているものの、鹿児島城跡では比較的古いと考えられる粗加工石材の布積みが石垣下側で全長約 60m に及ぶ。今回は、塀および周辺施設の確認のため、石垣に平行して5本のトレンチを設定した。また、将来の石垣保全のための石垣の背面構造と排水施設を確認することを目的とした。ここでは、御楼門側から順に報告する。

この調査区は、黎明館建設に伴う昭和53・54年の発掘調査で排水溝部分のみ調査されており、その周辺部分の土層は攪乱を受けている。

43 トレンチ (第 42 図~第 45 図)

概要 43トレンチは当初 $M \cdot N - 17$ 区に 2×4 m で設置した。その後,N - 16 区を南に 1 m 拡張した。石垣側は石垣の天端の上に地覆石があり,その上に近代以降に二段の溶結凝灰岩の切石を積んでいる。現地表面は,下の築角石の天端で標高は 11.60 m である。地層は,石垣側が植樹のため大きく攪乱され,排水溝の上位は前回の調査で攪乱されている。 I c 層は,コンクリート片が混在しており,近代の攪乱である。瓦溜りは土層IV a 下部より掘り込まれ漆喰も含まれており,IV a 層が江戸期の城内生活面と考えられる。

遺構 遺構は、裏込め、排水溝を確認した。

(1)石垣と石垣背面構造(第49図)

石垣築石は,前面が広く,後方がやや狭まる形態で, 上面に矢穴が見られるが,丁寧な造りが認められる。地 覆石は幅 14 cm, 高さ 15 cm, 長さ約 1 m20 cmを測る。裏込めは拳大から人頭大までの河原石と溶結凝灰岩を入れ,一部には漆喰が付着した瓦片もみられた。埋土は,城山層が混ざった造成土で覆われている。瓦溜りの下部から裏込めが出土したことから,石垣上部の裏込めの幅は約 3 m であったと考えられる。

(2) 排水溝 (第49図)

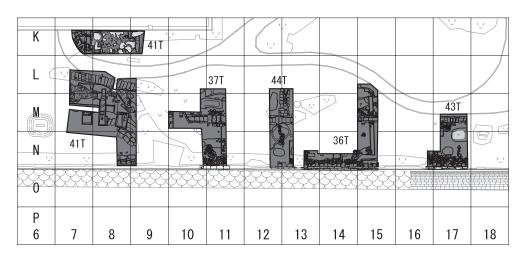
石垣を保護する機能をもつ排水溝は、石垣から城山側へ6m離れた位置で、石垣と平行に検出した。暗渠排水溝であるが、一部の蓋石は、ない状況で検出した。石材は溶結凝灰岩で外面の鑿調整は粗いが、側石や底石の内面調整は丁寧である。なお、蓋石は長短の規格性がない。排水溝の側石の面は標高10.85mに位置し、幅は40 cm、深さ70 cmである。

蓋石は約20 cm前後と考えれば、石垣の天端11.08mと近くなる。よって、排水溝の蓋石は、視覚確認ができる露出の可能性がある。側石の横には、補助用の板石と思われるものがあるが、定位置としては疑わしい。また、その下には栗石がある。この栗石は土層Va内にあり、溶結凝灰岩の平石も混入しているため、数回は補修工事をしていると考えられる。蓋石の散乱は細工した板石もあり、随時取り換えた可能性も考えられる。排水溝の一部は、砂や泥を掃除することもあったと考えられる。

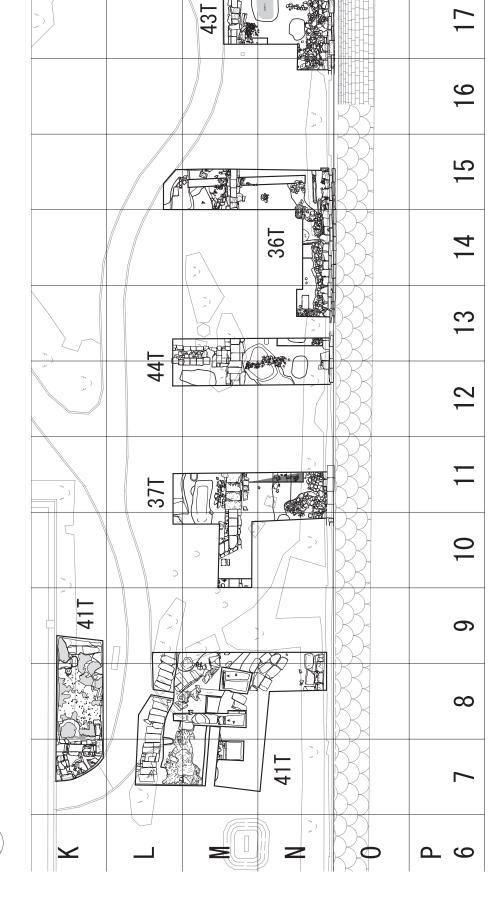
出土遺物 (第 43 ~ 45 図 121 ~ 160)

121~128は陶磁器である。121は、古武雄と呼ばれる肥前の陶器皿である。内面には連続した刷毛目文が描かれる。口縁部下には1段、段がつく。外面には強いヨコナデ。17世紀後半~18世紀初頭。122は、竪野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の陶器碗もしくは鉢である。白色土に黒色土を練り込んで成形する。口縁は波状、外





第 40 図 御楼門跡南側石垣周辺調査区トレンチ配置図 0 (1 ; 500) 20m

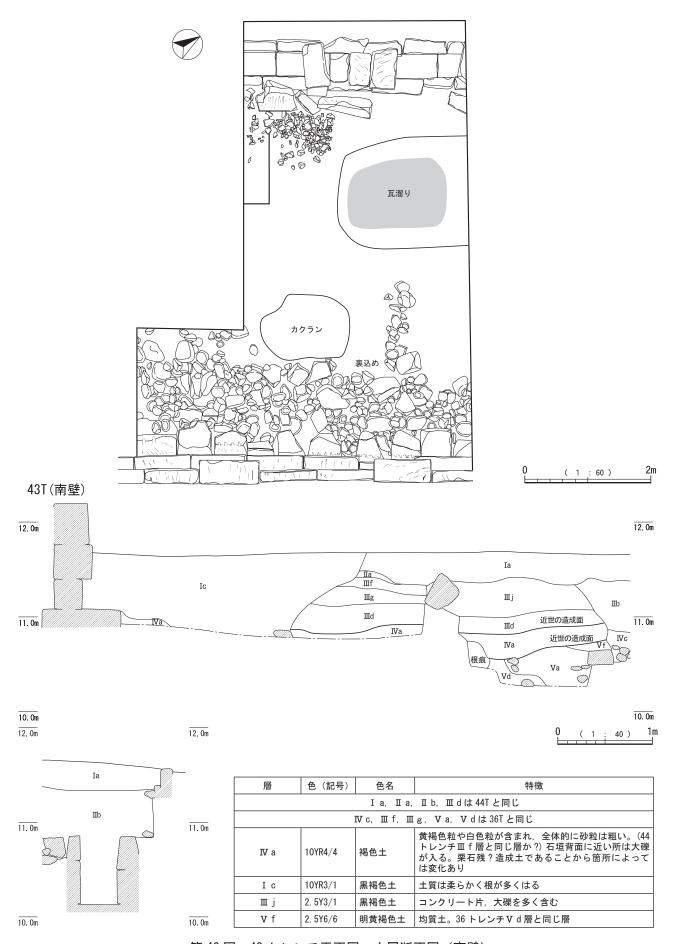




第41 図 御楼門跡南側石垣周辺調査区 遺構配置図

₽ | |

(1 : 250)

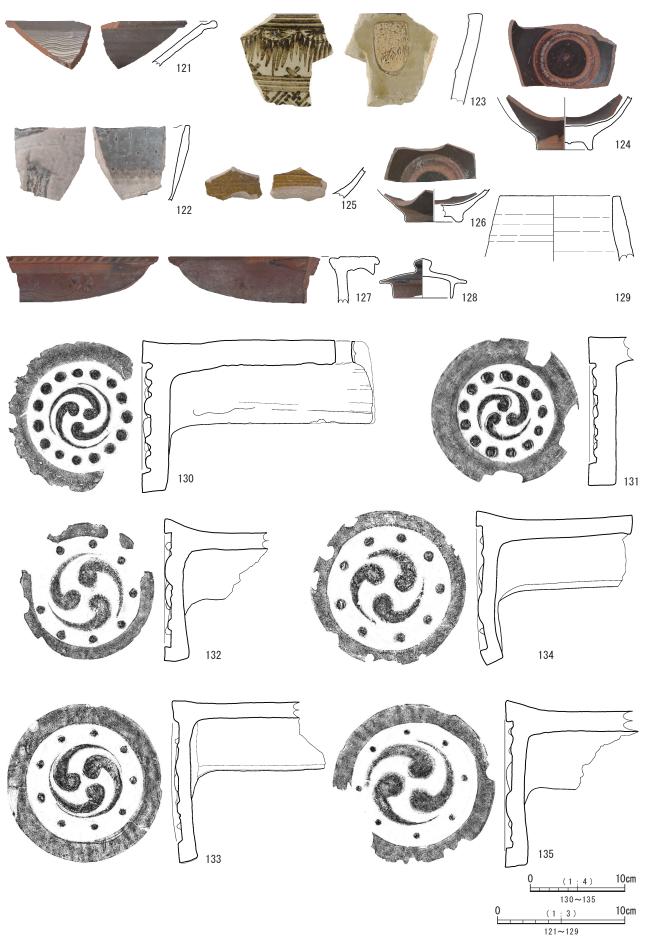


第42図 43トレンチ平面図・土層断面図(南壁)

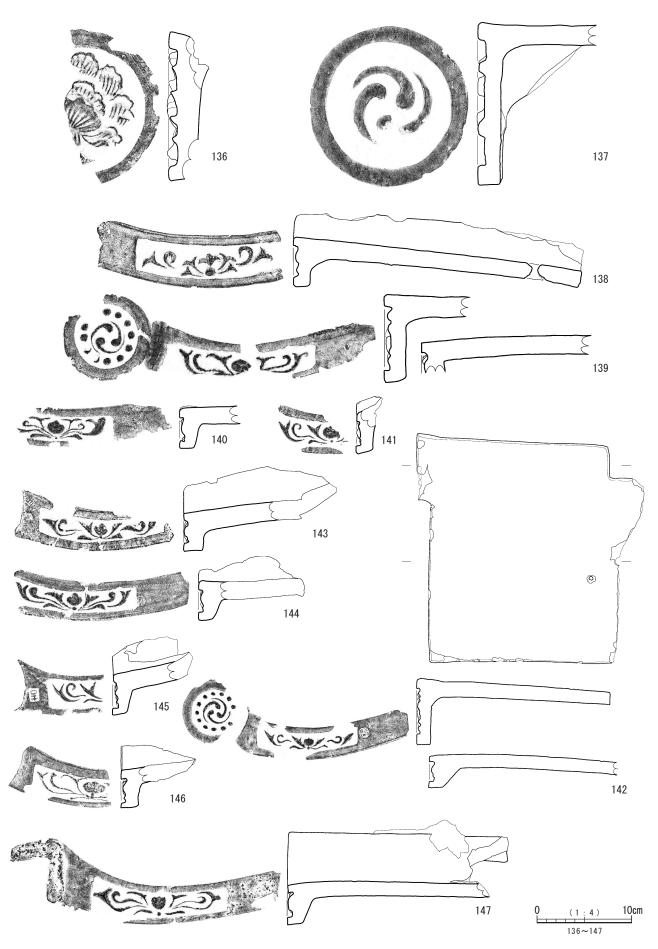
面は凹凸をつける。18世紀~19世紀。123 は、竪野系の宋胡録写の風炉である。欠損しているが、内面には突起がつく。外面には竹などが描かれる。18世紀~19世紀。124・126 は、加治木・姶良系の半陶半磁の透明釉の碗である。初期龍門司窯で焼かれたと考えられる。高台は露胎で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。125 は、加治木・姶良系の陶器碗である。飴釉が施され、内面は蛇の目釉剥ぎされる。内面には轆轤目が残る。127 は、琉球陶器鉢である。植木鉢か。口縁端部にはキザミが入り、外面には文様が線刻される。128 は、苗代川系の陶器土瓶蓋である。18世紀後半以降。外面のみ釉薬が掛かる。129 は、瓦質の土製品である。外面には筋状調整痕が残る。130~159 は、瓦である。130 は、連珠三巴文軒丸瓦

130~159は、瓦である。130は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-001) である。ナデ調整。凸面は、瓦当との接合部 はヨコナデ, それより尻側には縦方向のケズリ痕が残 る。凹面には布袋痕が残る。131 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-011) である。凹面は瓦当との接合部には強いヨコナ デがある。132 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-012) である。 三巴文は上面が平らで浮き上がらない。瓦当幅に比べて 丸部の幅は狭く、瓦当は上端に向かって反り上がる。凸 面の瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縦 方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消されて いる。薩摩以外で製作されたと考えられる。133は、連 珠三巴文軒丸瓦(A-046)である。連珠は小型で少なく, 三巴文は上面が平らで浮き上がらない。凸面には縦方向 のケズリ痕が残る。凹面は布袋痕がナデ消されている。 134 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-014) である。連珠は数 が少なく, 三巴文は巴同士の間が短い。瓦当周縁は狭 い。瓦当幅に比べて丸部の幅はやや狭く、瓦当は上端に 向かってやや反り上がる。凸面は瓦当と丸部の接合部は ヨコナデでそれより尻へは縦方向のケズリ痕が残る。凹 面は、布袋痕がナデ消されている。135は、連珠三巴文 軒丸瓦(A-019)である。連珠は数が少なく,三巴文は 大型。瓦当周縁はやや狭い。瓦当幅に比べて丸部の幅は やや狭く, 瓦当は上端に向かってやや反り上がる。丸部 は他の瓦と比べて厚い。凸面の瓦当と丸部の接合部はヨ コナデでそれより尻へは縦方向のケズリ痕が残る。凹面 は、布袋痕がナデ消されている。136は、牡丹紋軒丸瓦 (B-004) である。文様は花弁の上面が浮き上がる。周縁 はやや狭い。割面では、瓦当と丸部の間に接合のための カキメが残る。137 は、その他の軒丸瓦(C-014)であ る。連珠のない巴文で、巴上面は平たくくびれない。周 縁はやや狭い。丸部はやや厚みがある。凸面は縦方向の ケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消されている。 138 は大坂式軒平瓦 (A-040) である。瓦当貼付け技法。 文様区の上下、瓦当上端および凹面周縁は面取りされ る。 尻側に直径 1.5cm の釘穴が焼成後に穿たれる。139 は,大坂式軒桟瓦 (A-026) である。瓦当は顎貼付けで

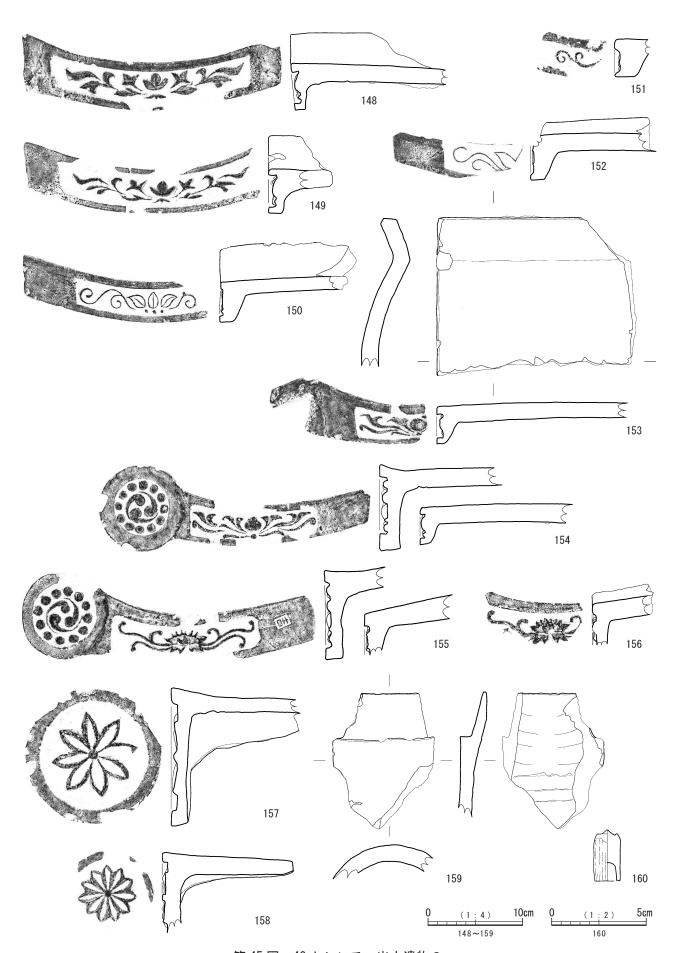
ある。瓦当上端は面取りされる。右上端部は、凹面尻側 に向かって三角形に面取りされ(江戸切り), 凹面周縁 部も面取りされる。140は、大坂式軒桟瓦(A-051)で ある。瓦当は顎貼付けである。瓦当上端・下端は面取り される。瓦当面には雲母子が目立つ。141は、大坂式軒 桟瓦 (A-044) である。瓦当は顎貼付けでる。瓦当上端・ 下端は面取りされる。文様区は狭い。142は、完形に近 い大坂式軒桟瓦(A-049)である。瓦当は顎貼付けであ る。焼成は良好。文様区は狭く, 瓦当右周縁に丸に吉の 刻印(刻印040-7)がある。右上端部は,凹面尻側に向かっ て三角形に面取りされ (江戸切り), 凹面周縁部も面取 りされる。尻側に焼成後に直径1cmの釘穴が穿たれる。 143 は, 大坂式軒桟瓦 (A-054) である。瓦当は顎貼付 けでる。焼成は良好。瓦当左周縁に丸に記号の刻印(刻 印 085) がある。瓦当上端・下端は面取りされる。144 は, 大坂式軒桟瓦 (A-056) である。瓦当は顎貼付けである。 文様区は狭い。瓦当上端・下端は面取りされる。右上端 部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切 り), 凹面周縁部も面取りされる。145 は, 大坂式軒桟 瓦(A-040)である。瓦当は顎貼付けである。瓦当左周 縁に四角に吉の刻印(刻印040-8)がある。瓦当上端は 面取りされる。146は、大坂式軒桟瓦(A-053)である。 瓦当は顎貼付けである。焼成は良好。瓦当上端は面取り される。147 は,大坂式軒桟瓦 (A-052) である。鎌桟瓦。 瓦当は顎貼付けである。焼成は良好。瓦当上端は面取り される。凹面周縁も面取りされる。148は、大坂式の変 形の軒平瓦 (C-005) である。瓦当貼付け技法。右上端 部は, 凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切 り), 凹面周縁部も面取りされる。149は, 大坂式の変 形の軒平瓦 (C-005) である。148よりも文様に稜線は ない。瓦当上端は面取りされる。凹面周縁も面取りされ る。150 はその他の軒平瓦 (D-005) である。文様区は 狭く周縁部が広い。瓦当上端と瓦当裏側下端を面取りさ れる。胎土が灰白色を呈し、表面には雲母が目立つ。長 崎で製作された瓦である。151は、17世紀以前の古瓦の 軒平瓦 (D-034) である。瓦当正面は面取りされる。薩 摩以外で製作された可能性がある。152は、その他の軒 平瓦 (D-003) である。文様区は狭く周縁部が広い。瓦 当上端と瓦当裏側下端を面取りする。胎土が灰白色を呈 し,表面には雲母が目立つ。長崎で製作された瓦である。 153 は、鹿児島式軒桟瓦 (B-023) である。鎌桟瓦。文 様区は狭い。瓦当上端は面取りされる。154は、鹿児島 式軒桟瓦 (B-023) である。文様区は狭い。瓦当上端は 面取りされる。右上端部は、凹面尻側に向かって三角形 に面取りされ (江戸切り), 凹面周縁部も面取りされる。 155・156は、その他の軒桟瓦 (D-035) である。155に は瓦当右周縁には四角に吉の刻印(刻印040-8)がある。 瓦当上端は面取りされる。右上端部は、凹面尻側に向かっ



第 43 図 43 トレンチ 出土遺物 1



第 44 図 43 トレンチ 出土遺物 2



第 45 図 43 トレンチ 出土遺物 3

て三角形に面取りされ(江戸切り),凹面周縁部も面取りされる。福岡県久留米市善導寺でほぼ同様の瓦当文様を確認している。広範囲に流通する笵を用いた可能性がある。157 は,大型の小菊瓦(K-07)である。尻から瓦当に向かって反り上がる。158 は,小菊瓦(K-04)である。尻側に向かってすぼまっている。159 は,陶器瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で,凹面と凸面の丸部に強いヨコナデ痕が残る。被熱しており,釉薬はただれている。160 は,エンフィールド銃の銃弾である。先端部は強い衝撃で潰れている。石垣や建造物等にぶつかったためか。

小結 43トレンチでは、IVa層上面で排水溝を確認した。 また, 121や122, 123といった一般集落ではほとんど 出土しない上級武士の暮らしを示す陶磁器が出土してい る。また, 瓦では, 長崎瓦 (150) が出土している。

36 トレンチ (第 46 図~第 48 図)

概要 36 トレンチは, $L \sim N-13 \sim 15$ 区に設定した。ここでは,排水溝の構築方法塔を確認するため,トレンチ内にサブトレンチを入れて下層を確認した。

遺構 遺構は,近世の裏込め,建物基礎の可能性のある 切石,排水溝を確認した。現代では,鹿児島大学医学部 の北側動物舎の礎石と排水管(土管)を確認した。

(1) 近世

①石垣と石垣背面構造

南北トレンチでは、石垣の築石は控えを面取った四角形のものが N-14・15 区に、尖るものが 13 区に見られる。石垣の天端は平坦に揃え、高さ 18 cmの地覆石載せている。裏込め石は拳大から頭大の川原石が目立つ。裏込め石の覆土には、幅 15 cm深さ 5 cm の細い溝が確認されているほか塀関係の遺構は確認されなかった。

②切石

南側の N-13 区には 44 × 22 cmの切石が検出した。この切石の北側にはやや窪み暗茶褐色の層の落ち込みが確認されている部分があり, 柱等の抜き跡野可能性がある。 遺構の性格は、建物基礎石と思われる。

③排水溝

排水溝は、石垣線から 6 m40 cmで石垣と平行に検出した。暗渠排水溝である。蓋は 3 枚確認されたが、他は被っていなかった。側石の幅は 40 cm、深さは 80 cmで、底石の標高は 10m である。側石は、60~70 cmの角石を 2 段積み上げ、底石は 60 cm前後の切石で内面を丁寧に鑿調整している。標高は約 10m で、接合面は水漏れが無いように合している。これらの石材は溶結凝灰岩である。

サブトレンチでは、排水溝の構築方法等の確認のため、 石垣の裏込め石から排水溝を切った。石垣近くは、おも に拳大の川原石が裏込め石として使用され、石垣から排 水溝までは、平坦な土層が互層でみられ、暗渠排水溝の 両脇は窪み状の埋め立て線があり、小さく割った溶結凝灰岩の角石を詰めている。そして、城内中心側は平坦な土層が見られる。この層位を見ると、排水溝は築城の造成を平坦に造り整地した後から造り埋めている。暗渠蓋と整地表面の関係は、昭和53・54年度の発掘調査にいる攪乱で確認できなかった。しかし、この状態から観察すれば石蓋の厚みによるが暗渠蓋は10~20cm埋まっている状況である。場所によっては、露見しているところもあったと思われる。

(2) 現代

①土管

土管は西側屋根と東側屋根からの合流し,近世の排水 溝に抉り穴をあけ,排水を流し込むようになっている。

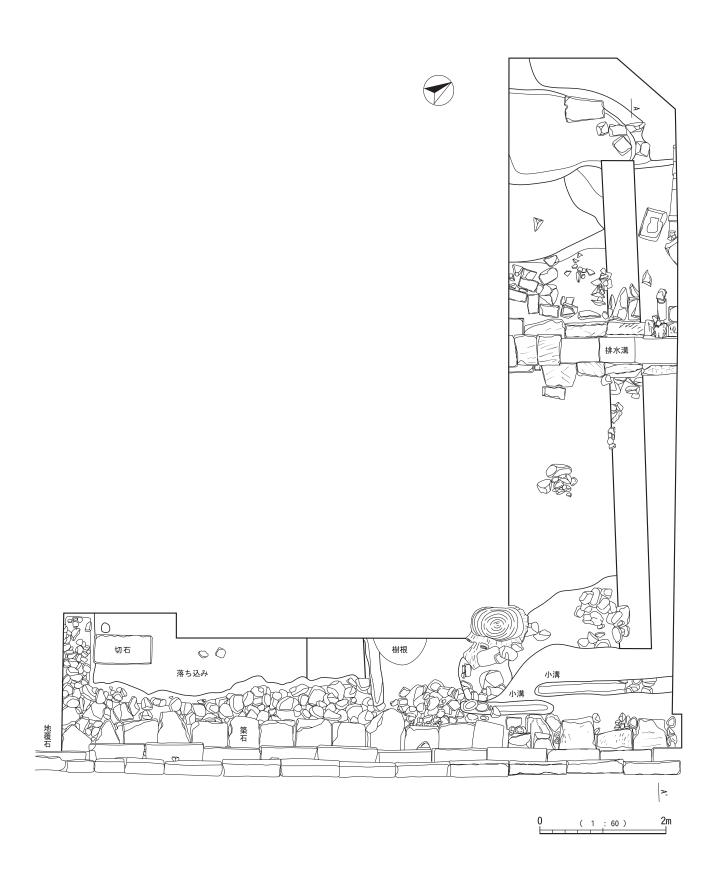
②鹿児島大学医学部の北側動物舎

礎石は溶結凝灰岩の切石で、築城面の上に設置している。南側には栗石の痕跡があり、その間は 190 cmを測る。この動物舎はサブトレンチの断面をみると黄褐色の造成土(土層 II c)が鹿大学医学部の旧表層と思われる。築城造成土の上に平石があるが攪乱部である。

出土遺物 (第 48 図 161 ~ 176)

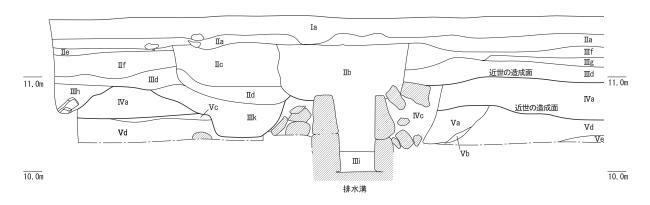
161~170は、陶磁器である。161は、中国景徳鎮窯 系の青花皿である。底部外面が碁笥底になる小野分類染 付皿Ⅲ群である。内面見込みには鳥が描かれる。162は, 肥前系磁器の輪花皿もしくは鉢である。型打ち製品であ る。外面には山文が描かれ、内面の文様は海藻か。19 世紀初頭~幕末。163 は、肥前の磁器小碗。文様は型紙 摺りで両面に描かれる。明治・大正時代。164は、竪野 系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎の碗か。外面の文様は, 島津家の家紋である「丸に十の字」の可能性がある。18 世紀~19世紀。166は、瀬戸美濃の磁器筒型碗である。 統制食器で、外面には二条線の下に「國立高田…」と書 かれる。施設名は不明である。165・167は、竪野系の 灰色陶胎の小碗である。総釉で、高台付近は露胎。165 は端反碗で、167は高台小さい。18世紀~19世紀。168 は加治木・姶良系の陶器小碗である。内面見込みは蛇の 目釉剥ぎされる。被熱しており、釉薬はただれている。 18世紀後半以降。169は、陶器屏風立てである。前面に は同心円文, 側面には花文が描かれ, 内面も施釉される が、背面は露胎である。屏風の押さえとして使用された と考えられる。170は、苗代川系の陶器甕である。内面・ 外面に横方向の調整痕がある。

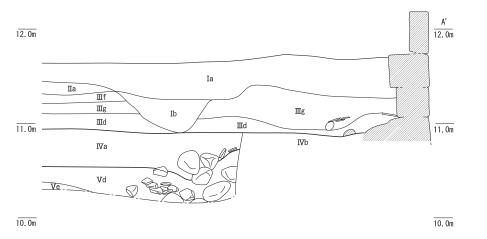
 $171 \sim 174$ は、瓦である。171 は、鹿児島式軒平瓦 (B種) である。瓦当貼付け技法。瓦当上端・下端は面取りされる。 172 は、塼瓦である。上面には、同心円状の文様が彫られている。173 は、17 世紀代の古瓦の平瓦である。凹面・凸面ともに、コビキ A が残る。凹面には、タタキ系の工具痕が残っている。朝鮮系瓦の影響か。<math>174 は、塀瓦である。塀瓦にしては薄い。釘穴は穿たれていない。上面



第 46 図 36 トレンチ平面図

 $\frac{A}{12.0m}$ $\frac{12.0m}{}$

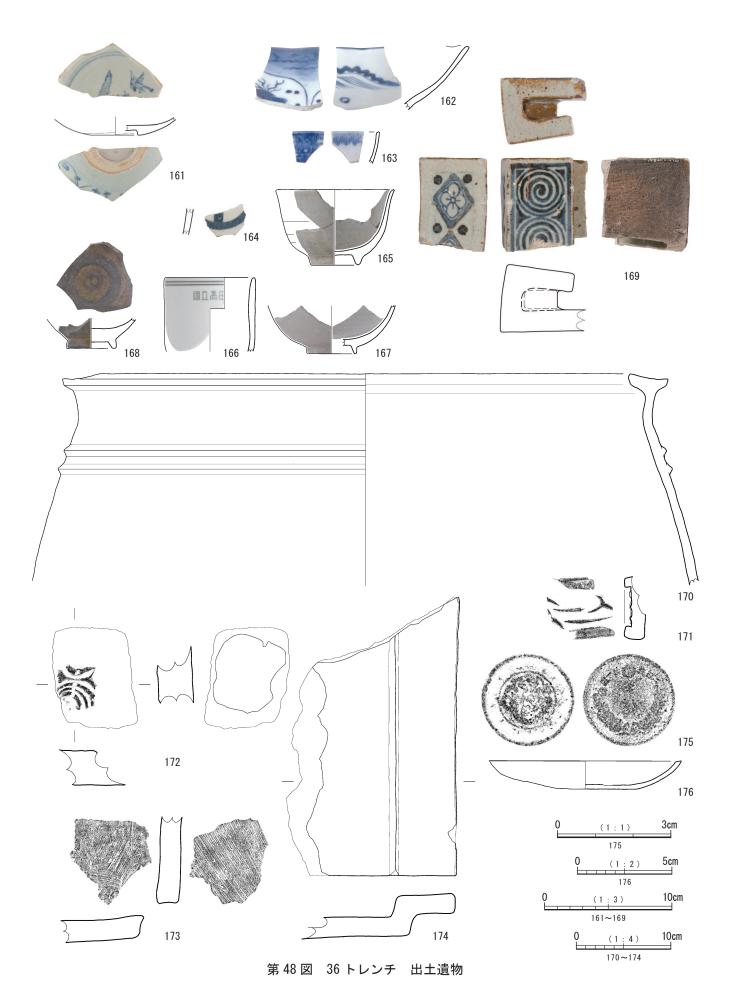




0 (1:40) 1m

| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 | | |
|------|---|---------|--|--|--|
| | I а, II в, II с, II d, II e, II f, III dは44Tと同じ | | | | |
| Ⅲ h | 2. 5Y4/2 | 暗灰黄色土 | 白色粒が多く含まれ、瓦が多く出土。遺構か? | | |
| IV b | 10YR4/4 | 褐色土 | 黄褐色風化礫。白色粘性粒など含み,土質はしまる。(排水溝天端,石垣天端に近いレベルの為, 藩政期造成土か?) | | |
| IV c | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 土質は柔らかく均質。(排水溝裏込め)角状、破砕、凝灰岩が多く入る | | |
| Шi | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 褐灰色砂土 (10YR4/1) 互層 (排水溝機能時か発掘調査時の埋戻しまでの水成堆積かは判断できず) | | |
| Ⅲf | 2. 5Y3/2 | 黒褐色土 | やや粘性がある | | |
| Шg | 2. 5Y4/1 | 黄灰色土 | 砂粒が粗く, 針金(番線), 瓦が入る | | |
| IV a | 10YR4/4 | 褐色土 | 黄褐色粒や白色粒が含まれ、全体的に砂粒は粗い。(44 トレンチⅢf層と同じ層か?)石垣背面に近い所は大礫が入る。栗石残?造成土であることから箇所よっては変化あり | | |
| Шk | 7. 5YR4/1 | 褐灰色土 | 1 cm未満の礫が多く含まれる | | |
| V a | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 礫、凝灰岩片が多く入る | | |
| V b | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 細かい凝灰岩破砕礫層 | | |
| V c | 7. 5YR6/2 | 灰褐色土 | 細かい凝灰岩破砕礫層と砂の混合層 | | |
| V d | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 砂質が強く 0.5 ~ 3 cmの礫が多く含まれる | | |
| V e | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 均質層 | | |

第47図 36トレンチ土層断面図(北壁)



- 56 -

の周縁は面取りされている。

175 は、銅銭である。明治 14 (1881) 年の半銭である。 176 は、鉄製の皿である。内面見込み中央部周辺は円形 に削られている。近代以降のものと考えられる。

小結 切石は、建物の基礎石の可能性がある。明治6 (1873) 年「鹿児島屋形及びその周辺図」(第145 図⑦)では、能舞台が奥御書院・サギ之間・麒麟之間と龍之間・熊之間に北・西・南を囲まれ、囲み東は直線の塀で囲んでいる。明治初期の古写真(第147 図⑥)では、サギ之間及び麒麟之間の能舞台側に塀が写っている。この塀は庭園奥の方まであり、位置的には熊之間からも離れたと思われる。よって何になるか、確定はできなかった。

近世の造成面であるIV b 層より下で確認された石垣と排水溝の間の栗石は、排水溝と石垣の天端ラインより低く、掘り込みラインがないので造成土の中の円礫集中と思われる。遺構であるとすれば、この付近に庭園が築かれる以前のものである可能性がある。

陶器屏風立て (169) の出土は、藩主の私的空間としての意味合いの強いこの周辺にあった建物に、屛風が立てられていたことを示唆する。

第44トレンチ (第49図~第53図)

概要 44トレンチは $N\sim L-12\cdot 13$ 区に設定した。昭和 $53\cdot 54$ 年度の調査では、熊之間から石垣に向かう排水溝が確認されていなかった。今回の調査では、能舞台の橋掛りと熊之間の一部が確認されたため、それらの施設からの排水溝を確認することも目的とされた。

当初は、 $2m \times 10m$ トレンチの調査範囲で進めたが、 コンクリート基礎と布基礎が検出されたため、幅を1m拡げ、 $3m \times 11m$ トレンチで調査した。

土層は、排水溝上面まで、大半が近代建物遺構で撹乱されていた。近世の造成面及び遺構は、IV層と排水溝蓋の上面である。そのため、遺物は大半が攪乱層でコンクリートブロックや鬼瓦と混在している近代の造成土中で出土している。

遺構 遺構は, 裏込め, 近世の排水溝2列, 現代の鹿児 島大学医学部の南側の動物舎, 土管を確認した。

(1) 近世

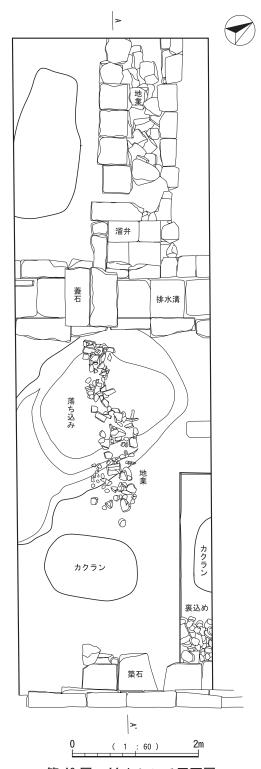
①石垣と石垣背面構造

石垣の天端を出し、一部裏込め石を検出した。天端の上には高さ14cmの地覆石を置き、頭大から拳大の裏込めを確認した。

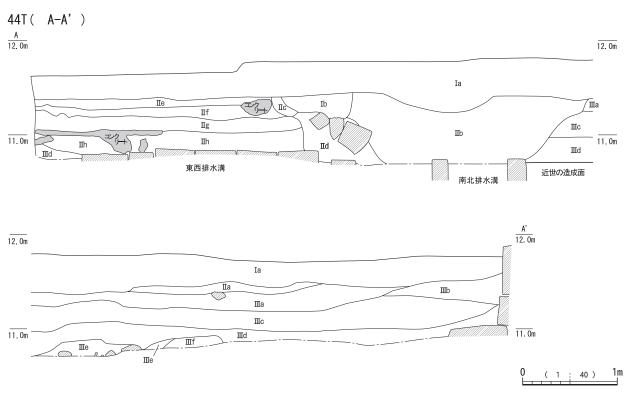
②排水溝

排水溝は南北方向と東西方向が T 字型に検出された。 南北方向の暗渠排水溝は昭和53・54 年度に検出されているものである。排水溝蓋は標高10.94mと10.92mで, 側石高が約10.7mを測る。底面は標高10.1mで,幅約60 cm,高さ約70 cm弱の暗渠排水溝である。この排水溝 は厚さの異なる溶結凝灰岩の板石を使用し、内面の接着 は丁寧に面取りしている。

東西の暗渠排水溝は、動物舎の布基礎部に当たったため約50cm幅で暗渠の中には、暗渠蓋を壊し、頭大の円礫や角礫を暗渠の中に詰めていた。暗渠蓋は溶結凝灰岩で約1.3m~0.4m程と思われる。廃絶時には、排水溝蓋の真ん中を潰し角礫・円礫や鬼瓦等を詰め込んでいた。



第 49 図 44 トレンチ平面図



| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 |
|-------|-----------|---------|--------------------------------|
| I a | 7. 5YR4/3 | 褐色土 | 明褐色土 (7.5YR5/6) ブロック土が多く含まれる |
| I b | 7. 5YR4/3 | 褐色土 | 明褐色土 (7.5YR5/6) 樹痕 |
| Ιа | 2. 5Y5/2 | 暗灰黄色土 | 砂質が強く、土質はしまる。(トレンチによっては部分的に有無) |
| Пb | 10YR3/2 | 黒褐色土 | コンクリ,礫,瓦が多く含まれる |
| Ιс | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 均質土。土質は柔らかい |
| Ιd | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | 凝灰岩切石。コンクリート廃棄坑?溝状? |
| Пе | 2. 5Y4/1 | 黄灰色土 | 土質は固くしまる |
| II f | 10YR6/4 | にぶい黄褐色土 | 土質は固くしまる |
| Пg | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 炭化物、白色粒が含まれる |
| Ιh | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | コンクリートが多量に入り、コンクリート構築物基礎が残存 |
| III a | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | φ 1 ~ 5 mm礫が多く,砂質が強い |
| Шb | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 土質は非常に柔らかい |
| Шс | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 砂質が強く、崩れやすい。瓦が多量に含まれる |
| Ⅲ d | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 砂質土。Φ 2 ~ 4 mmの礫が含まれる |
| III e | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質土。瓦片、漆喰片が多く含まれる |
| Ⅲf | 10YR4/4 | 褐色土 | 砂質土。黄褐色土粒が多く含まれる |

第50図 44トレンチ土層断面図(北壁)

東西方向の排水溝は、南北方向の暗渠排水溝へ通ずる接合部は、幅86cm、奥行き72cm、深さ59cmの枡形排水調整施設になっている。底石は角石4枚で平坦面である。調整板石は、東西側石の一部に支柱を立てて必要時に開けるように、周りに隙間が見られる。そして、奥には溶結凝灰岩に枘を切り、そこに板を差し込み、水流の調整をする施設ある。南北排水溝等の側石は小柱を立て、四角石1枚を外せる細工が見られる。よって、この部分の廃液調整桝は、開渠の可能性も考えられる。この施設は、奥にある能舞台や熊之間関連の排水溝と城郭を回る

排水溝等と考えられる。これらの石材は全て溶結凝灰岩 製である。

(2) 近代・現代

①鹿児島大学医学部南側動物舎

建物は鹿児島大学医学部の南側の動物舎にあたる。この動物舎は当時の配置図では36トレンチで検出した北側の動物舎より若干大きめである。排水溝廃絶気に、その上にコンクリート基礎を置いていた。

②土管

コンクリート基礎より南側に土管が並行して検出され

た。土管は地下に埋設されており、当時の地表と思われる切り石が一段上に検出されている。

③その他

円礫や瓦片等が列状に集められている。この遺構の下からも間層を得て漆喰を含む瓦廃棄が行われた落ち込みが確認された。上層には焼け瓦が入るが、下層には焼け瓦が混入していない。下層の瓦溜りは、暗渠排水溝の側石まで及んでおり、城放棄後のものと思われる。よって、円礫等列状は近代遺構と考えられる。また、石垣側にも、同様な瓦溜りもみられる。

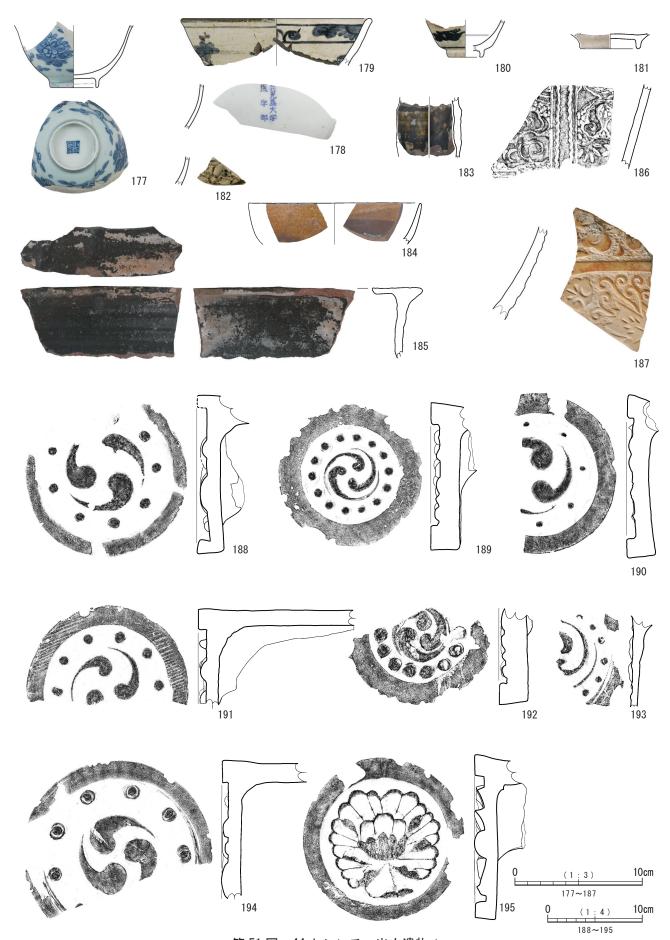
出土遺物 (第 51 ~ 53 図 177 ~ 213)

177~187は、陶磁器である。177は、中国景徳鎮窯 系の青花碗である。清朝磁器である。外面には牡丹唐草 文が描かれる。高台内側には文字文がある。17世紀末 ~19世紀。178は、磁器壺か。外面に「鹿児島大学医 学部」と書かれている。昭和32(1957)年~昭和49(1974) 年の間に用いられたものと考えられる。179は、産地不 明の陶胎染付碗である。薩摩の可能性があるが、類例は 今のところ確認されていない。ベトナムの安南染付の模 倣か。厚手。内面は一条線の下に、外面は二条線の間と その下に草花文が描かれる。18世紀~19世紀。180は, 薩摩の陶胎染付小碗である。外面は、高台付近に一条 線、その上に文様が描かれる。高台まで総釉だが畳付は 釉剥ぎされる。18世紀~19世紀。181は、竪野系の白 薩摩と呼ばれる白色陶胎の碗か皿である。高台裏側には 4か所にハリの痕が残る。チャツに入れて焼かれたもの か。高台まで総釉だが畳付は釉剥ぎされる。18世紀後 半以降。182 は、宋胡録写の碗等の小片である。18 世紀 後半~19世紀。183は、竪野系の茶入である。器壁が 厚く, 肩衝型で胴部が直線的になる (関分類 I -1-①)。 御里窯製のものか。17世紀前半。184は、加治木・姶良 系陶器碗である。赤褐色系胎土に鉄釉を掛ける。18世 紀後半以降。185 は、苗代川系陶器鉢である。口縁部が T字型を呈す。18世紀。186·187は、陶器甕か。無釉で、 花や唐草を浮彫りする。近代か。

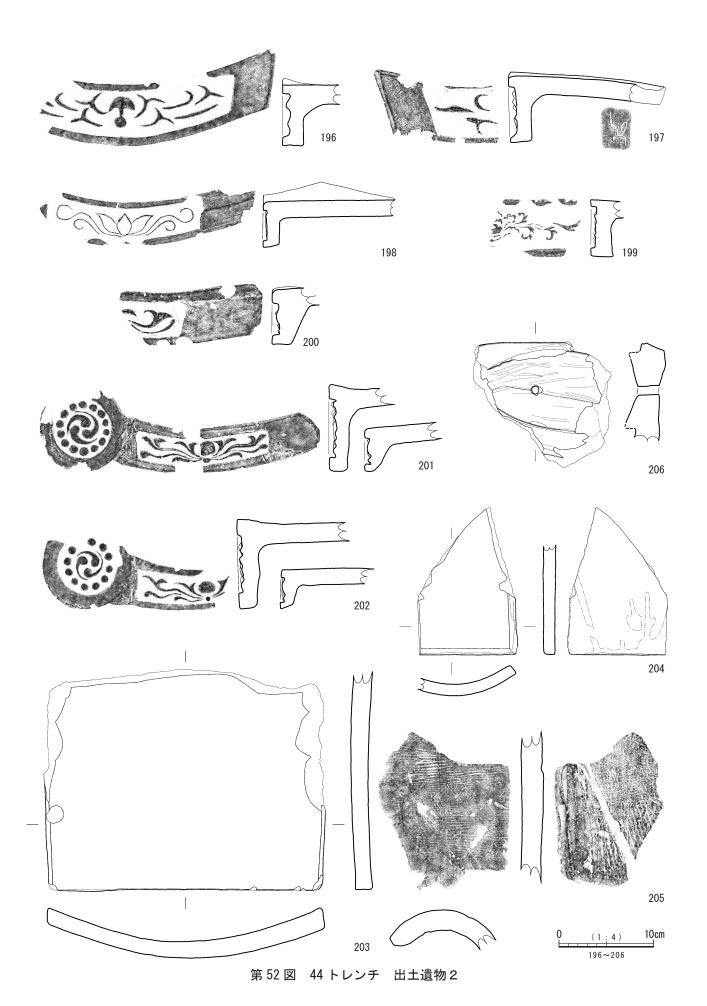
188~210 は、瓦である。188 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-024)である。連珠は大型だが数は少なく間隔は広い。 瓦当周縁は狭く、側面には強いナデの痕が残る。189 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-058) である。瓦当は厚く、周縁は広い。瓦当表面には雲母子が目立つ。190 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-057) である。大型だが、連珠は小さい。巴文は頭が大きい。瓦当裏側は、周縁に沿ってナデの痕が残る。191 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-059) である。瓦当周縁には、板状の圧痕が残る。凸面は瓦当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縦方向のケズリ痕が残る。凹面は、布袋痕がナデ消され、瓦当との接合部は、指オサエの痕が残る。192 は、連珠三巴文軒丸瓦である。瓦当周縁は広い。瓦当表面には雲母子が目立つ。193 は、

連珠三巴文軒丸瓦(A-064)である。連珠は小型で,巴 文は長い。丸瓦部から瓦当上端に掛けてはやや反り上が る。灰白色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作さ れたと考えられる。194 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-060) である。大型だが、連珠は小型で少ない。凹面は、布袋 痕がナデ消される。195は、牡丹紋軒丸瓦 (B-003) で ある。丸部から瓦当にかけてやや反り上がる。凸面は瓦 当と丸部の接合部はヨコナデでそれより尻へは縦方向の ケズリ痕が残る。196 は、大型の鹿児島式軒平瓦 (B-016) である。瓦当右周縁を面取りする。瓦当は、瓦当貼付け である。瓦当との接合部には、強いヨコナデ痕が残る。 197 は,大坂式の変形の軒平瓦 (C-003) である。瓦当は, 瓦当貼付け。瓦当上端と左周縁を面取りする。文様区下 側を強くなでる。凹面はヨコナデ調整。凸面には、旧字 の「ゐ」のような字が線刻される。198 は、その他の軒 平瓦 (D-003) である。瓦当正面は面取りされる。灰白 色の胎土で雲母が多く含まれる。長崎で製作されたと 考えられる。199は、その他の軒平瓦 (D-039) である。 瓦当は瓦当貼付け。瓦当には面取りしない。200は、軒 平瓦(分類不明)。文様区は狭く, 周縁が広い。瓦当上 端を面取りする。201は、鹿児島式軒桟瓦 (B-008) で ある。瓦当上端・下端は面取りする。瓦当右周縁から凹 面尻側に向かって三角形に面取りされる (江戸切り)。 202 は, 鹿児島式軒桟瓦 (B-008) である。瓦当上端・ 下端は面取りする。203は、平瓦である。凹面・凸面の 瓦当周縁は面取りする。凹面には、水が流れた痕が残る。 204 は、陶器瓦の平瓦である。粘土紐巻き上げ技法で成 形され、凸面にはタタキ痕が残る。凹面周縁は面取りさ れる。釉薬は凹面全面に施されており堂平窯跡で製作さ れたと考えられる。被熱しており、釉薬はただれている。 205 は、朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面は、タタキによる 文様がある。場の凹面には布袋痕が残る。朝鮮系瓦にし ては厚く, 意図的な文様でもないことから, 朝鮮系瓦の 技術を用いた在地瓦か。206は、鬼板瓦である。鱗状の 表現が見られる。207は、丸瓦である。凸面に四角に木 藤の刻印(刻印025)がある。凹面の布袋痕は、ナデ消 されて残らない。玉縁と玉縁との接合部には、強いヨコ ナデの痕が残る。208は、丸瓦である。凸面には、土山 弥右衛門の刻印(刻印172-1)がある。熊本県益城町の 土山瓦のものである。凹面には、布袋痕が残る。胎土 は,在地のもと似ているが,灰色がかっている。209は, 平瓦である。凹面に六角形に「太左衛門」の刻印(刻印 026-2)がある。凹面の周縁は面取りされている。凸面 には、縦方向のケズリ痕が残る。210は、輪違いである。 凸面には、丸に兵の刻印(刻印070)である。凸面周縁 は面取りされる。

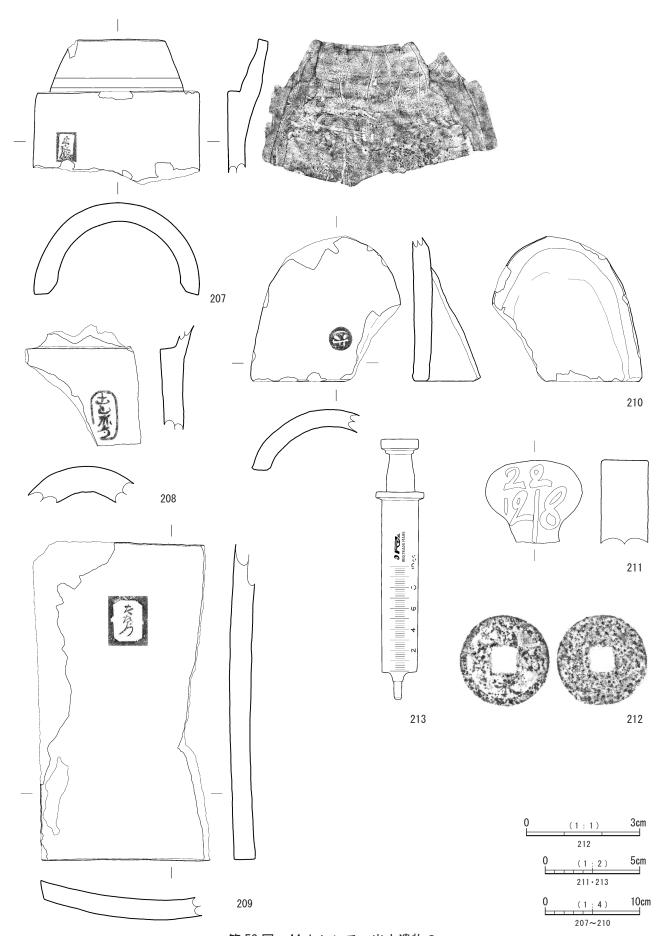
211 は、コンクリート製の標識である。表面に油性ペンで書かれたと思われる表記があるため戦後のものか。



第51図 44トレンチ 出土遺物1



-61 -



第53図 44トレンチ 出土遺物3

212 は、銅銭である。寛永通寶の新寛永である。213 は、 注射器または浣腸器のプランジャーである。登録商標の あるマークが刻印されているが、詳細は不明。

小結 東西方向と南北方向の排水溝の接合部では、溜弁を用いた水量調整を行っていたことが確認できた。

遺物では、長崎瓦(198)、肥後の土山瓦(208)が出土している。土山瓦とは、熊本城築城時に熊本市小山で瓦を焼いていた瓦職人が、18世紀初頭に益城町土山に移り住んで焼いた瓦で、熊本城だけでなく、近隣の豪商の商家などにも用いられたという。「土山瓦師頭領事績」によれば、各瓦師家(北村、猿渡、福田、坂上、芦原)の初代は加藤清正に瓦師の任命を受けたとされており、御作事頭に所属する藩直轄の時期と郡直轄の時期があるものの、基本的には藩の管理を受ける御用瓦師であった。土山瓦は、北村、猿渡、福田、坂上の家がそれぞれ瓦師の頭領を踏襲しており、芦原家のみ瓦師横目(瓦師を管轄する役人)から瓦職人となっている。この刻印172-1は、芦原弥右衛門(天明7(1787)年~文政8(1825)年)が用いたものである。肥後で製作されたものと考えられる。

37 トレンチ (第54 図~第57 図)

概要 L~N-10・11 に設定した。この地点は、昭和53・54年の調査で、「く」の字に折れる排水溝が確認されている。今回は、石垣背面構造の確認とともに、その排水溝の再確認と水路屈曲の原因を探ることを目的とした。

最初に石垣に直交して3m×10mのトレンチを設定し、その後、石垣と平行に2m幅で5m拡張した。土層は、第I層~III f層までは現代整地層と近代特に鹿児島大学医学部関係層で、コンクリートブロック、土管等出土している。近世の造成面は、標高約10.3mで確認された。遺構 遺構は、近世の裏込めと排水溝、現代の鹿児島大学医学部動物学者の一部を確認した。

(1) 近世

①石垣と石垣背面構造(第54図・第55図)

石垣の積み方は、石垣天端の上に地覆石が乗りその上 に第七高等学校以降の石塀が見られる。

石垣裏込めは、頭大から拳大の石が確認されているが、 調査区南側には、特に大きい石が目立つ。

②排水溝 (第54図・第55図)

昭和53・54年度で確認した形排水溝は,蓋が4枚見られる。蓋の両脇には同レベルで動物舎のセメント遺構が残り,当時は排水溝と同じ使用面と考えられる。

排水溝が「く」の字状に折れた部分は、切り石が溝内に埋められていた。その切り石を取り上げて排水溝の中を確認した。

「く」の字に折れる部分の北側排水溝の側石は2~3 段積の四角形もしくは多角形の切り石の技法が見られ, 石材表面は鑿調整で平滑に整えられていた。しかし、「く」の字に折れる西側の排水溝の側壁は石面が小まめな鑿調整で渕取りを施したものと枘穴のある二次使用板石を積み上げている。また、北側排水溝が直進した場合の延長線上にサブトレンチを設定したところ、排水溝を検出した。この側溝の幅は約60cmで「く」の字に折れる北側の排水溝の規格と共通する。これらの技法・規格の違いや南北に直進した場合の排水溝が確認されたことから、排水溝はもともと南北に直線的に伸びていたものが、あとから「く」の字7に曲がるように付け替えられたと考えられる。

(2) 現代

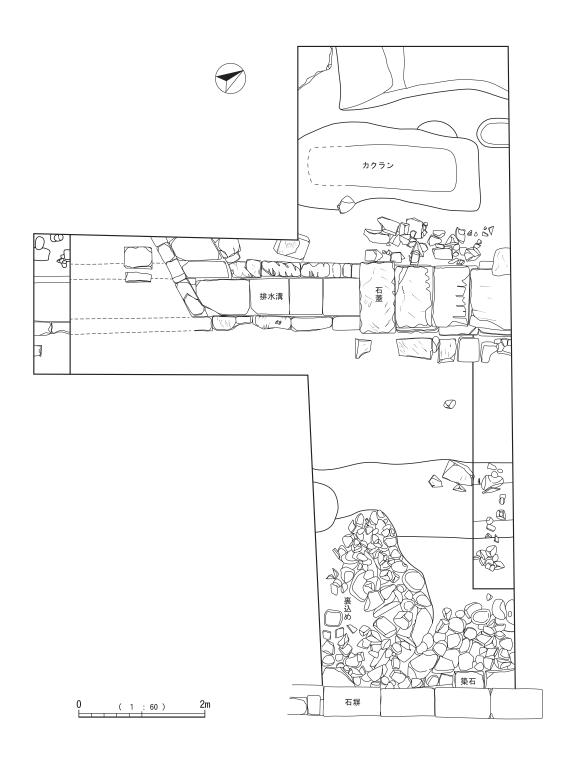
①鹿児島大学医学部南側動物舎

第Ⅱ b 層検出の土管は、江戸時代の暗渠排水溝の蓋と側石に枘穴を加工し接続できるようにしている。また、M-11 区には動物舎の基礎と思われる漆喰混じりのブロックが掘りこまれ上面にモルタルが塗られている。これらの層には漆喰粒子が混ざり、かなり攪乱を受けた様子が伺えられる。拡張部では石垣と平行する水路と平行に約 5m の土管繋目を漆喰で巻いた状態で検出した。これらは、鹿児島大学医学部動物舎跡と考えられ、標高は土管の下部が標高約 11m である。

出土遺物 (第 56 図~第 57 図 214 ~ 229)

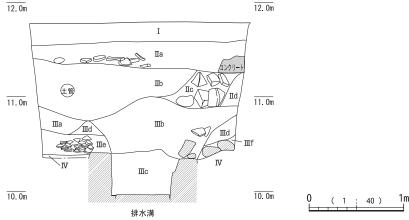
214~217 は、陶磁器である。214 は、中国龍泉窯系青磁の壺である。外面には、蓮弁がある。明末のもので、14世紀後半~15世紀中頃。215 は、加治木・姶良系の陶器碗である。龍門司窯で焼かれた物である。内面見込みも蛇の目釉剥ぎされる。18世紀後半以降。216 は、肥前有田の磁器皿である。内面見込中央に草花文、その周囲には余白があり、そこから再び草花文が描かれる。高台内側には、釘書で、「~〇次」の文字が彫られている。1820~1860年代。217 は、陶器鉢である。植木鉢か。産地は不明だが、薩摩か。外面には、白化粧土と黒化粧土で線状の文様が入る。19世紀。218 は、土師器坏である。底部には、糸切り痕が残る。口縁部が黒色化しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

219~226 は瓦である。219 は,牡丹紋軒丸瓦 (B-008) である。瓦当周縁は広く、B種の中では厚手である。220 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-021) である。連珠は小さく巴は長い。瓦当周縁は広い。瓦当裏側は、周縁に沿って強くナデられており、一段低くなっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。221 は、大坂式軒桟瓦 (A-054) である。小型で、文様区は狭い。瓦当上端・下端は面取りされる。瓦当右周縁に〇に平の刻印(刻印 052)がある。222 は、大坂式軒谷瓦 (A-050) である。瓦当上端・下端は面取りされる。大坂式軒平瓦の中では、焼成が不良である。右周縁に山に西の刻印(刻印 043-1)がある。223 は、



第54図 37トレンチ平面図

37T(南壁)



| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 |
|-----|-----------|-------|---|
| I | | | 表土 |
| Па | 10YR6/1 | 褐灰色土 | コンクリ,瓦片,多量。現代整地土 |
| Пþ | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 土管埋設溝。近代 |
| Ιс | 7. 5YR2/1 | 黒色土 | コンクリート塊。廃棄土坑 |
| Πd | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 5 mm程の礫が多く含まれる。排水溝付替後整地層 |
| Ша | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 黄褐色土混じり。近代坑 |
| Шb | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 砂質土。5~20cmの礫を含み,しまりがない。側石抜き取り後埋土 |
| Шс | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 砂礫層。礫は5㎜程,砂粒は粗い |
| Шd | 7. 5YR3/1 | 黒褐色土 | 砂質土。砂粒は粗く,5mm程の白色軽石粒を含む。抜き取り側石裏込土 |
| Ⅲ e | 2. 5Y3/1 | 黒褐色土 | 砂礫層。凝灰岩破砕礫層。砂混じり。排水溝上段 (抜き取り部)裏栗部,一部抜き取り後流れ込む。 (破線部右側) |
| Ⅲ f | 2. 5Y3/1 | 黒褐色土 | 砂礫層。Ⅲ e 層と同じ。20 cm程の礫を含む |
| IV | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 明黄色~白色の風化礫を多く含む。側石下段裏込土 |
| | | | |

第55図 37トレンチ土層断面図(南壁)

塀瓦である。上面の周縁は面取りされている。張り出しの接合部付近に、直径 1.5cm の釘穴が焼成後に穿たれ、 蜻膨れした釘が残っている。224 は、平瓦である。凸面 には、×のような刻書がある。225 は、丸瓦である。隅 丸方形に正衛門の刻印(刻印 027-3)がある。凸面は、 玉縁とその接合部付近に強いヨコナデ痕が残る。凹面には、玉縁付近に布袋痕が残り、それより頭側にはコビキ Bが残る。226 は、鬼瓦である。鬼面の額部分と考えられる。額部分にはキザミがあり、その下には、貼付けた 眉毛の粘土がとれた痕が残る。背後の支え野部分に板状の面を貼付けて鬼面を作っている。

227 は、硯である。幅広で大きい長方硯で、黒川分類の黒褐色系のものである。228 は、注射器または浣腸器である。登録商標のマークが刻印されているが、詳細は不明。鹿児島大学医学部と関係か。229 は、ウニの瓶詰である。スクリューキャップであるので、昭和35(1960)年以降の製品であると考えられる。底部の記号から瓶の製造元は山村硝子(または山村製壜所)である。

小結 このトレンチでは、最初の排水溝設置以降に、排水溝の付け替えという新たな造成が行われたことを確認できた。

遺物では、長崎瓦(220)が確認された。

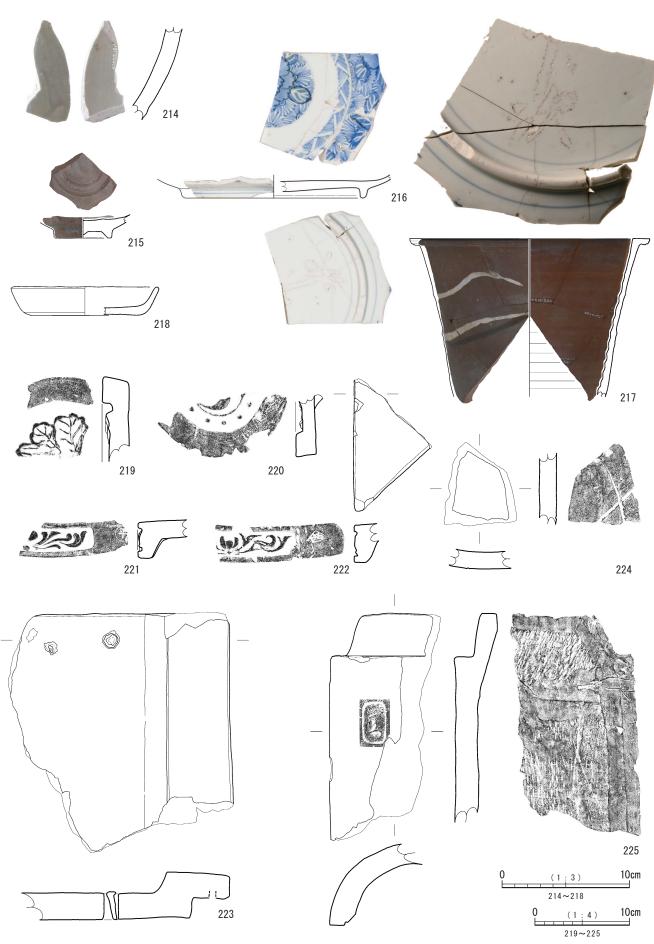
41 トレンチ東 (第58 図~第63 図)

概要 調査区は、明治5 (1872)年「島津御本丸庭園景」(第 147 図⑥)で、麒麟之間の東方向で築山と滝状の落水と 小池が、同年「島津御本丸池畦景」(第147 図⑤)で御 庭があった場所に想定されている。

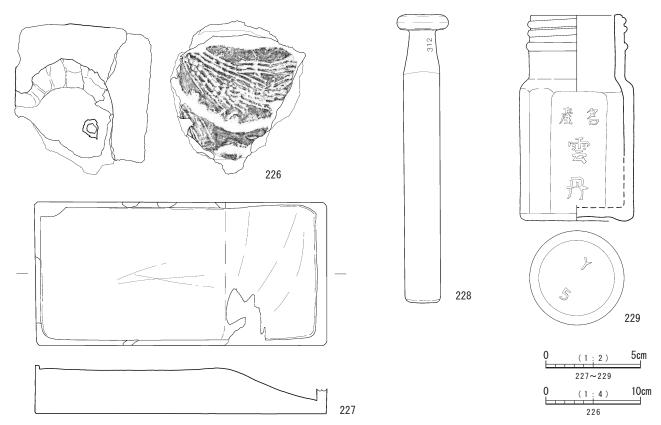
41トレンチは、東が L・M-7~9区と西は K-7~9区の2か所に設定した。当初、37トレンチからの排水溝延長部の確認と平成11年の石垣修復の際の掘削範囲の確認のためのトレンチを設定し、調査を行った。その後、設定したトレンチ中央部が高まりになっており、幅広の扁平板石が露出していたことから、地下に御庭に遺構が残存している可能性が高いと判断し、御庭遺構の確認を目的として調査区を西側に拡張した。その後、東トレンチで築山遺構が確認され、その西側に池があることが想定されたことから、その池を確認するために西トレンチを調査した。

41 トレンチ東区 (第58 図・第60 図)

概要 当初設定した2m×9mの南北方向のトレンチを設定したが、それを御庭の遺構残存状況確認のために拡張した。築山遺構の確認後、土層やその下層遺構確認のためにサブトレンチを設定した。調査の結果、石垣この工事範囲を確認し、排水溝や御庭の築山を確認した。



第56図 37トレンチ 出土遺物1



第57図 37トレンチ 出土遺物2

石垣工事範囲 (第58図)

平成11年度の石垣修復工事の際の掘削は、石垣天端から、約5~6mの範囲で行われていたことを確認した。その埋土には、裏込めを詰めて整地した後、石垣修復時の残りの築石を残していた。いずれも溶結凝灰岩で保存状態は良かった。

遺構 遺構は、排水溝の排水溝2列、御庭の築山が確認 された。

(1) 排水溝

排水溝① (第 58 図·第 59 図)

排水溝①は,築山の造成土確認のためのサブトレンチの下層から確認された。37トレンチで確認された「く」の字に曲がる以前の御楼門部分から直線的に伸びる排水溝である。37トレンチの排水溝と同じく,御庭造営のため壊されており,その残骸の上に築山の盛土が造成されている。

排水溝は,築山造営時に廃棄されたようで,築山の造成土には,その破片が入っている。石材は溶結凝灰岩である。形が長方形で切り込みは直線,調整面は鑿切痕で丁寧な仕上げである。

第59図B面やE面・F面で確認されたのは、北側側壁で、南側の側壁や底石は抜き取られている。C面の2a層は、底石の抜き跡である。このことから、現在サブトレンチ $1\sim3$ で確認されているものは、側壁の西壁であり、本

来はこの東側に底石,東側の側壁があったが,それらは,抜き取られたと考えられる。側壁の天端高は,10.3mである。その後,排水溝は1m近く埋められており(標高 $11m \sim 11.2m$),その埋土上に築山は,その上に造成された(第58図下)。

排水溝② (第 58 図・第 59 図)

サブトレンチ3のF面では、石材が密集していた。これらの石材は、溶結凝灰岩である。割れ面以外は、表面は平滑に整えられているものが多い。土層北側では、石材2石が2石重なっており、これが排水溝の側壁であると考えられる。これは、排水溝①と合流すると考えられる東西方向の排水溝である。この地点は、排水溝②と排水溝①の合流点であったと考えられる。

F7面下から2段目の石材はL字上になっており、この部分で西側からの排水の水量を調節していた可能性がある。周辺に大型の堰合は、この排水溝の残骸である。

この排水溝も、排水溝①と同じく、庭園の造成に伴って廃棄されたものと考えられる。

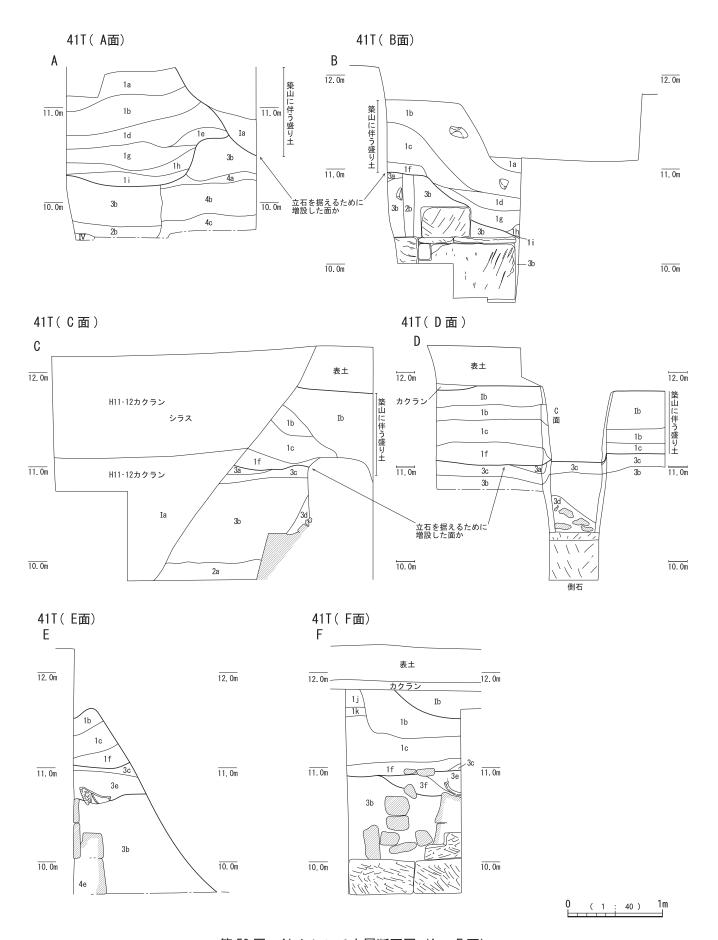
排水溝③ (第58図・第60図)

37トレンチで「く」の字に折れた排水溝は,M-9・10区で更に屈折し、この排水溝③になっていると考えられる。御庭造成時に付け替えられた排水溝である。

排水溝の標高は、北側が 11.51m, 弧状部が 10.81m で、 東が 10.74m である。そして、この暗渠排水溝の破損



第58図 41トレンチ平面図・断面模式図



第59図 41 トレンチ土層断面図 (A~F面)

第 4 表 41 トレンチ A・B・C・D・E・F 面土層注記

| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 | | | |
|--------|-----------|---------|---------------------------------------|--|--|--|
| I a | 10YR3/1 | 黒褐色土 | H11. 12 年攪乱 | | | |
| 築山 1a | 7. 5YR4/2 | 灰褐色土 | 白色礫を多く含む。立石埋土、築山積土 | | | |
| 築山 1b | 7. 5YR4/3 | 褐色土 | 砂礫を多く含む。立石埋土,築山積土 | | | |
| 築山 1c | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 黒色粘土,灰色粘土を含む。立石埋土,築山積土 | | | |
| 築山 1d | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 0.5~1㎝の礫を多く含む。立石埋土,築山積土 | | | |
| 築山 1e | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質土。砂粒が粗い。立石埋土,築山積土 | | | |
| 築山 1f | 2. 5Y4/2 | 暗灰黄色土 | 均質土。立石埋土,築山積土 | | | |
| 築山 1g | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 砂質土。1㎝程の礫を多く含む。立石埋土、築山積土 | | | |
| 築山 1h | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質土。浅黄色風化礫を多く含む。立石埋土、築山積土 | | | |
| 築山 1i | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 立石埋土,築山積土 | | | |
| 築山 2a | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 砂質土。土質ブロック、礫を多く含む | | | |
| 築山 2b | 2. 5Y5/4 | 黄褐色土 | 砂質土。土質にしまりがない。杭の打ち込み痕か? | | | |
| 築山 3a | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 砂土。粗~細かい砂粒。旧排水溝、解体時埋土 | | | |
| 築山 3b | 10YR4/4 | 褐色土 | 0.2~1㎝の礫を多く含む。旧排水溝,解体時埋土 | | | |
| 築山 4a | 7. 5YR3/1 | 黒褐色土 | 砂粒の粗い砂を多く含む。旧排水溝,裏込土 or 造成土 | | | |
| 築山 4b | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質が強く、5 mm程の礫を非常に多く含む。旧排水溝、裏込土 or 造成土 | | | |
| 築山 4c | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 砂質土。砂粒が粗い。旧排水溝,裏込土 or 造成土 | | | |
| IV | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 白色風化礫を多く含む | | | |
| I b | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 攪乱 | | | |
| 築山 3c | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質が強く、砂粒が粗い | | | |
| 築山 3d | | | 凝灰岩破砕礫層、排水溝裏込め礫層か(もう一石積んでいた?) | | | |
| 築山 1 j | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 5 cmの礫が多く含まれる。立石埋土,築山積土程の礫が多く含まれる | | | |
| 築山 11 | 10YR5/2 | 灰黄褐色土 | 砂土。砂粒は中粒程度で薄く堆積 | | | |
| 築山 3e | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 砂質土。砂質が強く黒漆喰片が含まれる | | | |
| 築山 3f | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 0.5~2cm程の礫が多く含まれ, しまりがない | | | |
| 築山 4e | 2. 5Y5/6 | 黄褐色土 | 白色軽石粒が入り、しまりが良い | | | |

部では、暗渠蓋が標高 10.8m, 3 段積側石の高さが標高 10.6m, 底面は、標高 9.8m を測る。なお、暗渠排水溝に並列して検出した石列は幅 18 cm, 長さ 50 cmと 52 cmである。標高は 11.55m と 11.57m を測る。石列表面は粗面である。全てに排水溝に蓋があること、江戸時代の地表面が 11m 前後でありながら、それよりを低いところを通ることから、地下を通る暗渠排水溝である可能性がある。

確認した排水溝は、トレンチ中央の高まりを避けるように微妙に弧状を描きながら南に続いている。

その西側中央に長方形の切り石を2石が列状に埋め込んでいることも確認した。この2石は検出状況からみて暗渠排水溝の補助石と思われる。

(3) 庭園遺構(築山)(第58~60図)

中央部には、厚さ10 cm, 高さ1m, 幅1.8mの板石を確認した(立石1)。この板石は一部欠損しており、下には劣化で剥がれた小片も出土した。石材は、北薩地方の安山岩である。石の下には、やや角をもつ約50 cmの石を支え石として使用している。その石支え石の下部は硬化面があり、標高11mを測る。この板石は、築山の荘厳だけでなく、築山の土留石としての意味もあったと考えられる。

板石の西側には,高さ74 cm,長さ1.35m,幅40 cmの 三角形の立石を確認した(立石2)。この石は,粘板岩 状堆積岩で、角が摩耗している。この石の麓にも丸石の 支え石が2石ある。板石と同じく、築山の荘厳と土留め の意味をもつものと考えられる。

板石の隣には摩耗した筒状で $60~\text{cm} \times 20~\text{cm} \times 80~\text{cm} \times 50~\text{cm}$ の三角形の石を確認した。標高は 12.39m と 12.58m である。三角形の石は筋がみられ,石材は堆積岩と考えられる。

板石の周辺では、小型だが扁平で幅広な安山岩の切石を確認した。これらも、築山の荘厳と土留めの意味を果たした石材であったと考えられる。こうした石材を築山の土留石に使う事例は玉里島津庭園にもあることから、ここも築山に使用されたと考えられる。

近世の地表面は、3層の標高約11m~11.2mで、板石の最上部が約12.8mであることから、この築山は、1.8m以上の高さがあったと考えられる。3層上面には複数の箇所で荘厳と土留めのための立石の抜き穴と考えられるピットを4か所で確認した。これらを立石抜き穴1~4とする。立石抜き跡3と立石抜き跡4は、立石1と立石2と約1.5m離れてほぼ平行に庭石が置かれていたと考えられる。明治5(1872)年「島津御本丸庭園景」(第147図⑥)に写る滝状の落水はこの間にあったか。

立石 2 石の麓に,縦 75 cm×横 60 cm×厚み 15 cmの溶 結凝灰岩の石材を確認した。標高は 11.55m である。上

近現代土 土質はしまり,砂質が強い。近世土 A' 13.0m 12. 0m 11.0m 特徴 現代盛土 米十 にぶい黄橙色土 色名 黒褐色土 灰黄褐色土 黑色土 色 (記号) 10YR2/1 10YR6/3 10YR3/1 10YR4/2 I a q I ГС ≥ B' 12.0m 11. Om Ia lc

第60図 41トレンチ庭石(立石)石組み見通し断面図

B 12.0m

11. Om

12.0m

A 13.0m

面には径 15 cmの穴があり、同じ溶結凝灰岩の栓が出土 した。石材の中央部は抉られ、下部は下段と接続用に抉 り部が狭くなっている。明治5 (1872) 年「島津御本丸 池畦景」(第147図⑤)では、築山の北奥に石製の角柱 状建築物が写っている。この角柱状建築物は、各部材を 漆喰で接合し, 上端部からは水が零れているように映っ ている。これは、地中から水を引き上げる高枡と思われ る。今回出土したこの石材は、この高枡最上段の一部と 考えられる。この石材の周囲は、深さ約20cmの約1m 四方の落ち込みがあることから, 高枡がこの場所に立っ ていた可能性がある。この, 高枡がたっていた可能性の ある落ち込みから排水溝までには、砂利が入る溝状の窪 みが続いていた。立石2の下からは、溶結凝灰岩製で約 30 cm角の石管水道の破片が確認された。本来はこの溝 状の窪みの上を石管水道が通っており、それが高枡まで 水を運んだ可能性がある。

昭和53・54年度の調査では、サギ之間、麒麟之間とその前面には3本の石管水道が確認されている。昭和53・54年度の発掘調査では、このトレンチ方向に向かって北から石管水道が延びてきており、その水が高枡に供給された可能性がある。

小結 ここでは、排水溝と明治5 (1872) 年「島津御本 丸池畦景」(第147図⑤) に写っている御庭である庭園 遺構(築山)を確認した。当初は、御楼門から御角櫓跡 にかけて排水溝①が直線的に伸びており、それに東西方 向の排水溝である排水溝②が接続していたが、御庭の築 山造成のために壊された。築山は、範囲は不明だが、地 表面から 1.8m 以上の高さがあり、その周囲には荘厳と 土留めの意味をもつ立石が巡っていた。築山からは、滝 状の落水があったが、その水は、昭和53・54年度の発 掘調査で確認された石棺水道から供給された可能性があ ることが想定された。築山により排水溝①、排水溝②が 廃棄されたため、排水溝③が新たに築山西側に築かれた と考えられる。排水溝②の埋土からは、18世紀代の琉 球陶器甕(243)が出土していること、後述するように、 文献から御庭の造成が天保年間(1830~1843)以降と 考えられることから, 御庭が造成されたのは幕末になっ てからと考えられる。

41 トレンチ西 (第61 図~第63 図)

概要 41 トレンチ東側では,築山が確認された。明治 5 (1872) 年「島津御本丸庭園景」(147 図⑥) には,築山前面に池が写っており,その池を確認するために調査を行った。

安全確保のため $K-7 \sim 9$ 区に遊歩道に沿って $3.2m \times 9.5m$ のトレンチを設定して行った。

遺構 遺構は、庭園遺構の池、排水溝を確認した。

(1) 庭園遺構(池)(第61図)

調査区中央から北側には、鉄分層が広く検出された。 鉄分層の下には、水性堆積の影響を受けたと考えられる 明茶褐色や灰褐色の層が堆積し、その下では一部で玉石 を確認した。玉石が残存している部分は、固く締められ た硬化面となっていた。さらにその下には、厚さ5cm程 度の明茶褐色の硬化層を確認した。この硬化面が池底と 考えられる。

池底と考えられる硬化面では、鉄分が浸み込んだ赤茶色のベルト状の層があり、その層が乱れて窪んでいる箇所があった。これは、築山部の石の抜き跡と考えられる。特にそれが多いところは、排水溝に近い K-8 区南西部と同区北東部である。

調査区南西部の南西部の石抜き跡は明治5 (1872) 年 「島津御本丸庭園景」(第147図⑥)の滝状の落水の手前 右端にある丸石の抜き穴であると考えられる。その後ろ には低い約30cm築山がみられ、石は1m位の丸石と思 われる。その東南部には排水溝に沿って黒粘土(黒漆喰) を詰めて、池の水漏れを防いでいる。その東側にはカギ 型の抜き跡が確認されている。その東側には,80 cm× 40 cm×30 cmの漆喰塊があり、間に鉄分の赤茶褐色層が みられた。これは、昭和53・54年度の調査では、この 隣の石蓋から石管水道が弧を描きながら西へ検出してい る。これは、落水のある小池から、御池に注ぐ石管水道 の取り入れ口で水口施設の一部と思われる。西側にはジ グザグに抜き取り跡が確認された。ここは, 明瞭な鉄分 層はなく,全体的に赤茶褐色の層であり,玉石は出土し なかった。東部から北部にかけては玉石検出層と暗茶褐 色の層の堺には赤茶褐色の鉄分層がベルト状に検出、石 の抜き取り跡と思われる暗茶褐色の層が、南から北へ繋 がって検出した。東部は約50cmの盛土になっている。

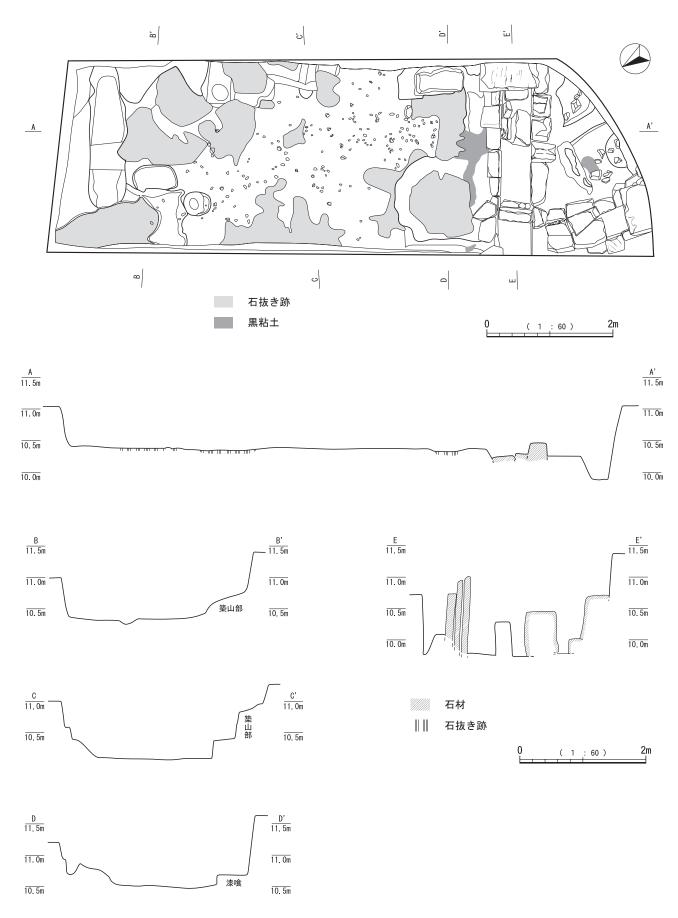
石の抜き跡が列状にあり、間は茶褐色の層がベルト状にみられる。石と石の間であると考えられる。これらは 御池の北東の庭石の可能性がある。なおこの石列の東側 は、鹿児島大学動物舎造成で削られていた。

(2) 排水溝 (第61図)

K-7区には、分岐する排水溝を検出した。東西方向の排水溝の中を、西から東に向かって流れる水を弁石で堰き止め、その水を南方向に伸びる排水溝に流す構造になっている。弁石は、2段で、下段は安定のため平石を横に敷き、上段は平石を立て、両脇を角石で挟んでいる。弁石の奥は、石の手前で砂が確認されることから、角石を組み2段で砂止めを行っていると考えられる。これらの石材は、全て溶結凝灰岩で作られている。

出土遺物 (第 62 図・第 63 図 230 ~ 251)

230~243 は、陶磁器である。230 は、中国漳州窯系の青花輪花皿である。陶石の上に化粧土を掛け、その上に染付を行う。外面には一条線、内面には、草花文が描かれる。16世紀末~17世紀前半。231 は、中国漳州窯



第61図 41トレンチ(池)平面図・見通し断面図

系の青花碗である。外面には一条線の下に草花文、内面 には一条線が描かれる。16世紀後半。232は、薩摩磁器 の筒型碗である。外面には虫文, 内面には二条線が描か れる。1780年~1810年。233は、肥前有田の小碗である。 高台まで総釉だが、口縁部と畳付は釉剥ぎされている。 蓋物と考えられる。外面の赤い色彩は、塗っている物と 考えられる。18世紀後半~19世紀初頭。234は、肥前 系磁器ポットである。外面には蓮弁と唐草が描かれる。 近代。235 は、肥前系磁器蓋である。234 と組み合うと 考えられる。外面には草花文が描かれる。236は、磁器 碗。高台内面には、瓢簞型に日陶製と書かれる。近世の 統制食器である。237は、白薩摩と呼ばれる白色陶胎の 壺か。底部付近は露胎で、底部には「○○○」の墨書が ある。18世紀~19世紀。238は、白薩摩と呼ばれる白 色陶胎の花入れか。外面には、突起が貼り付けられてい る。18世紀~19世紀。239は、加治木・姶良系の陶器 碗または鉢である。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ、外 面は総釉で、畳付は釉剥ぎされる。18世紀。240は、産 地不明の陶器灰落としもしくは火入れか。底部から口縁 部まで垂直に立ち上がる。高台は高い。241は,加治木・ 姶良系の陶器灯明皿台である。皿部分の外面は露胎で, 底部に糸切り痕が残る。台の部分には内面・外面にロク ロ目が残る。18世紀。242は,苗代川系の陶器鉢である。 植木鉢か。内面口縁部上面は露胎。外面に・内面に横方 向の調整痕が明瞭に残る。243は、琉球陶器の大鉢であ る。花などの文様が線刻される。18世紀中心のもの。

244・245 は土師器小皿である。高さはなく, 円盤状の製品である。

246~253は、瓦である。246は、陶器瓦のその他の 軒丸瓦 (C-012) である。三巴文の周囲には変形瓦草文 が巡り、それが連珠で区画されている。堂平窯跡で同様 の笵のものが出土している。被熱しており、釉薬はただ れている。247 は、大坂式軒桟瓦(A-055)である。鎌 桟瓦である。瓦当上端は面取りする。瓦当は顎貼付けで ある。瓦当左周縁に四角に森元の刻印(刻印020)の一 がある。248は、大坂式軒平瓦(A-043)である。瓦当 の幅は狭いが、高さがある。凹面周縁は面取りされる。 249 は、その他の軒平瓦 (D-023) である。瓦当裏側下 端が面取りされ、凹面周縁も面取りされる。灰白色の胎 土で、長崎とも似るが、熊本県苓北町富岡城跡の出土軒 平瓦と同笵と考えられ、その周辺で製作されたと考えら れる。250は、その他の軒桟瓦 (D-039) である。瓦当 は顎貼り付けで、文様区はない。瓦当中央に○に中の刻 印(刻印037-1)がある。雲母子が全体で目立つ。近代 の瓦である。251は、桟瓦である。凹面・凸面周縁は面 取りされる。凸面には滑り止めのためのカキメがある。 近代。252は、朝鮮系瓦の丸瓦である。凸面にはタタキ のよる幾何学文様がある。凹面には布袋痕が残る。253 は、鬼板瓦である。左右に雲文、中央に花文をもつ雲形の跨鬼で、文様上部には、○に吉(刻印 040-2)の刻印がある。背面には、屋根に葺くための銅線がついたままになっている。

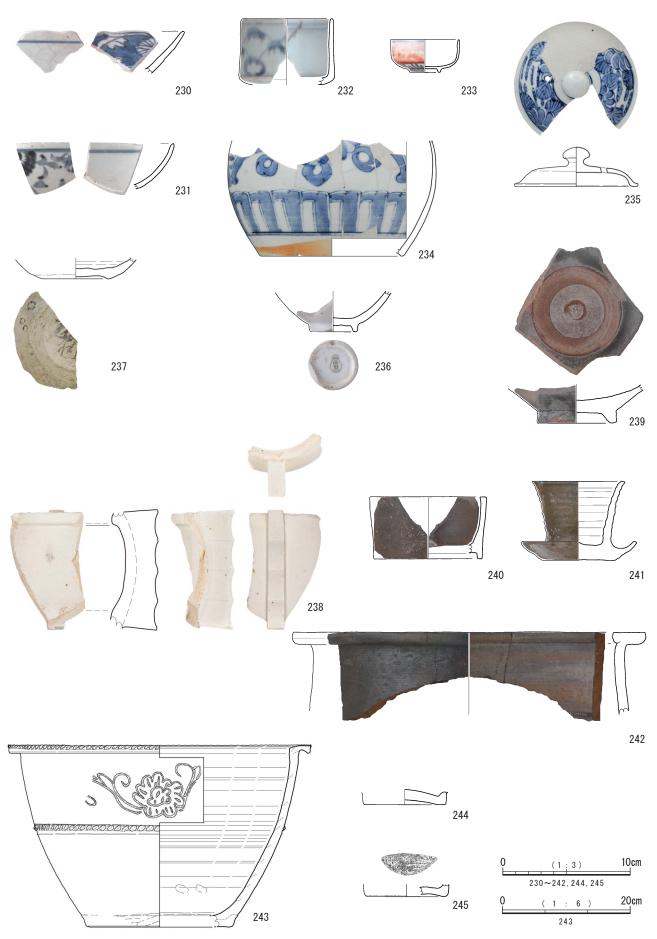
小結 東西方向の排水溝は、東トレンチで、築山造営のために廃棄された排水溝②まで伸びている。本来は同一のものであったと考えられる。そのため、本来は東西方向の排水溝があり、水は石垣側に流れていたが、御庭の造成のため、その排水溝が途中で堰き止められ、その地点から新たにから南方向に伸びる排水溝がつくられ、排水は南の御角櫓方向に流れるように変えられたと考えられる。

41トレンチで確認された庭園遺構(築山・池)である御池については、明治26(1893)年英国人建築家ジョサイヤ・コンドルが写真を見て解説を加え、「付随する図をみたところこの庭は、他の庭園よりも違った特徴があり、鹿児島、薩摩の大名島津氏の庭の一つで東京の庭よりも手入れが難しい。大きな木がほとんど無く、大事な部分は、人工的に切られた茂みが精錬され、芸術的であるが、どこか厳格な構成品質を与えている。(中略)、ソテツの群れが明白な熱帯(南国)の見た目をこの庭に与えることを助長している。」と一種独特で琉球の風貌を持った庭園と評価している。

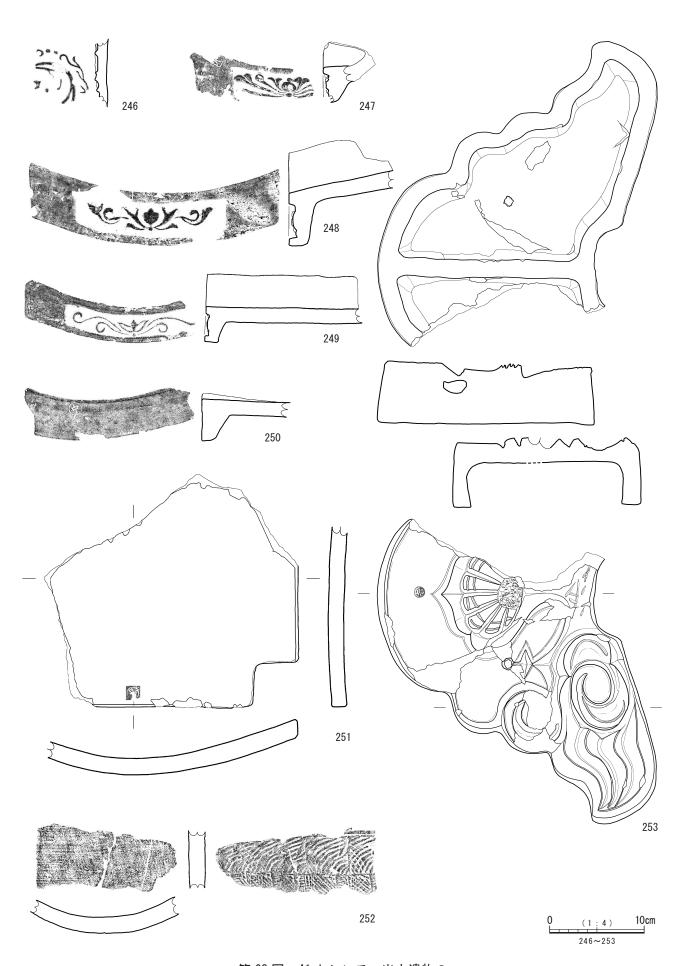
また、昭和3 (1928) 年九州帝国大学農学部造園学研 究室助教授永見健一による「薩藩庭園調査覚書」では,プー ルで壊されているが山下御殿の庭として調査されている。 「一, 山下御殿の庭 鐵太郎造修又は新造天保以後, 齊興 公の時 今庭滅」の記載がある。また、「この庭は齊興公 の時 天保以後 髭の善八の造修又は新造と考」とある。 庭師名に違いがあるが、この御庭と玉里島津侯爵別邸の 上御庭は同時期に造営されており、その時期は、天保年 間(1830~1843)以降であると想定されている。この御 庭の造成は、東西排水溝を堰き止めて南北排水溝に水の 流れを変えさせ、御楼門から伸び直線的な排水溝①を築 山に沿って曲がる排水溝③に付け替えさせるなど、石垣 周囲を巡る排水溝の導線にも影響を与えたと考えられる。 また、「薩藩庭園調査覚書」によると、この御庭は第七高 等学校造士館のプール建設のためなくなったようである。 遺物としては、ここでも長崎瓦(249)と琉球陶器を 確認した。

小結

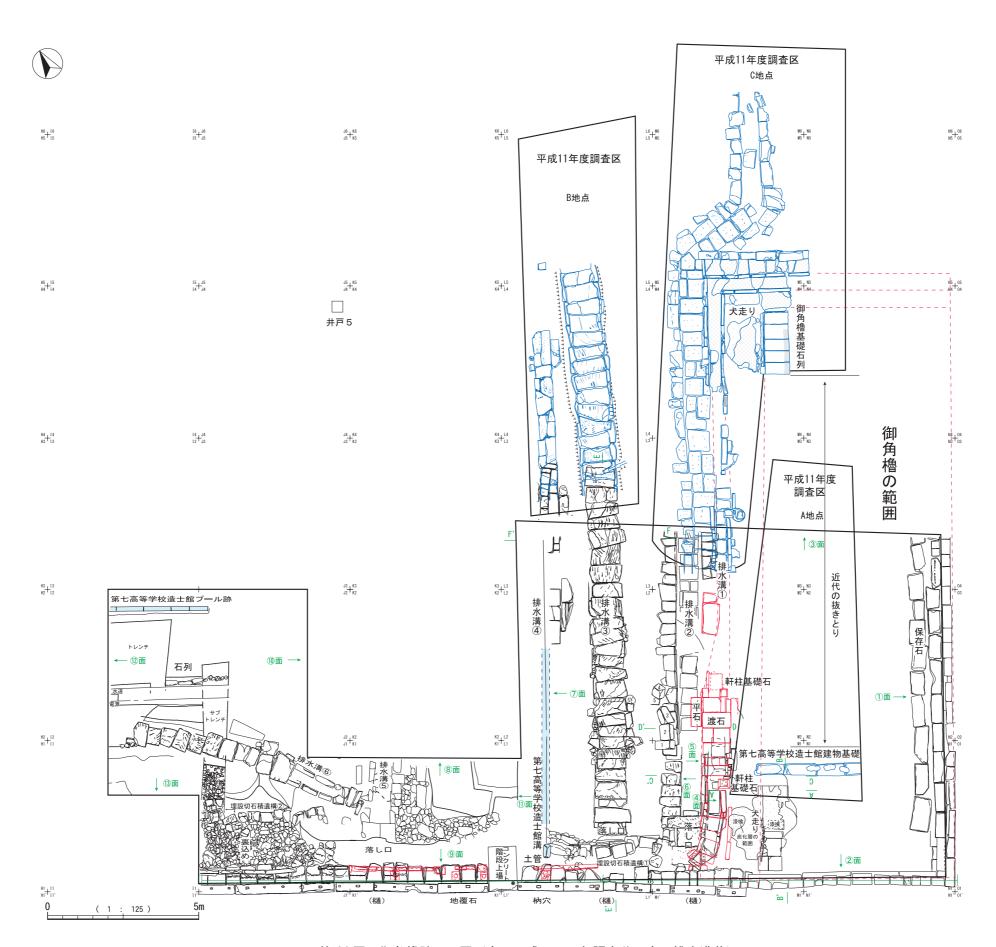
御楼門跡南側石垣周辺の調査区では、石垣天端には地 覆石がのり、石垣背面には約2mの裏込めがみられる、 そのさらに後ろには排水溝が併行するといった石垣の背 面構造、庭園遺構の確認(築山+池)、庭園遺構の造営 に伴う排水溝の付け替えが確認された。遺物では、長崎 瓦が多くのトレンチで確認されている。御楼門跡周辺に 比べると軒桟瓦が多く出土している。



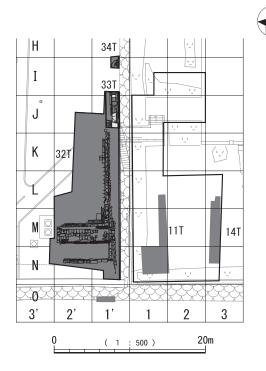
第62図 41トレンチ 出土遺物1



第63図 41トレンチ 出土遺物2



第64図 御角櫓跡平面図(青:平成4・5年調査分,赤:排水溝蓋)



第65図 御角櫓跡調査区トレンチ配置図

6 御角櫓跡周辺(第65図~第94図)

御角櫓 御角櫓は、本丸南東にあった櫓である。元禄9 (1696) 年「鹿児島城絵図控」(第144図②) では,「此 櫓焼失長十二間」と書かれており、長さが12間あった こと, 元禄の大火で焼失したことがわかる。現在の本丸 跡南側石垣の石垣天端から御角櫓跡の幅は,約 21.6mで あり、このときの幅とほぼ変わっていない。また、享保 20 (1735) 年には、「島津継豊の鹿児島の居宅内にある 櫓に虫が付いて危ないため、材木の取替と修補を願い出 る」(『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』4-784)とあり、 少なくとも2回は建て替えられており、今回の発掘調査 で確認された御角櫓跡の遺構は、享保20(1735)年以 降に建てられたものである。宝暦5 (1755) 年「監察使 問答集」(『鹿児島県史料集 通昭録』1) には,「南側に 櫓が1ヶ所あり、長さ27間、横3間半、窓6ヶ所。」と 記載されている。これだと長さが合わないがもっと広 い範囲を御角櫓と認識していた可能性がある。明治5 (1872) 年の古写真「島津御本丸前面景」(第147図①) では、石垣と一体になった多層式の櫓であり、本瓦葺き で外面は海鼠瓦で荘厳されている。

過去の調査 御角櫓跡周辺の石垣は、昭和35年の台風によって崩落し、平成11年度にはその石垣修復工事を実施している。工事区の範囲は、M・N-1'~9区で、石垣解体面積・復元範囲は340㎡である。石垣解体に伴って本丸跡の造成土も、地表面では石垣天端から約5~6

mので、そこから下に向かって狭まっていく台形状に掘削された。そのため、造成土の掘削に伴い、御角櫓跡周辺の発掘調査が行われた。調査は、鹿児島県教育委員会が実施し、黎明館によって報告された(鹿児島県歴史資料センター黎明館 2001)。

調査の結果,御角櫓跡基礎石列1列と排水溝3列,石列1列が確認された。御角櫓基礎石列上面とその外側には漆喰が塗られた犬走りがあり,その周囲を排水溝①が巡っていた。基礎石列から排水溝②までは漆喰が塗られており,御角櫓は漆喰床であったことが確認された。その外側には、排水溝②が巡っていた。工事では、石垣解体時の石垣天端の枘穴、石垣面の実測と傾斜、築石の中折れ、積石間の飼石、裏込めの断面、胴木が確認され、工事報告書に記載されている(鹿児島土木事務所・(株)建設技術コンサルタント2000)。

概要 発掘調査は、御角櫓跡周辺石垣の背面構造の確認、御角櫓跡の遺構残存状況確認を目的として行った。当初は、11トレンチ、14トレンチの2本のトレンチを設定した。11トレンチは、M・N-1区で、石列や排水溝が検出された。14トレンチでは、平成11年の石垣工事範囲の掘削範囲が検出確認された。その後、御角櫓跡全体の遺構残存状況、石垣背面構造、平成11年度に積み直された石垣の修復状況を確認するため、I \sim N-1 \sim 3 区まで調査区を拡張した。

平成11年度に修復された石垣の確認(第66図・67図・68図) 調査区の東側石垣(第64図・第66図), 南側石垣の一部(第67図上段)は、平成11年度の石垣修復工事で修復されたものである。修復前と同じく、石垣天端石の上には御角櫓の礎石の役割を果たす地覆石が、その上には、近代以降の石塀が2段載っている。石垣内側には、大型の石材による裏込めがあり、その上に石垣築石の保存石が列状に並べてあった。調査北壁(第68図)では、石垣から約5.6mの範囲で地表面の掘削が行われたことが確認された。

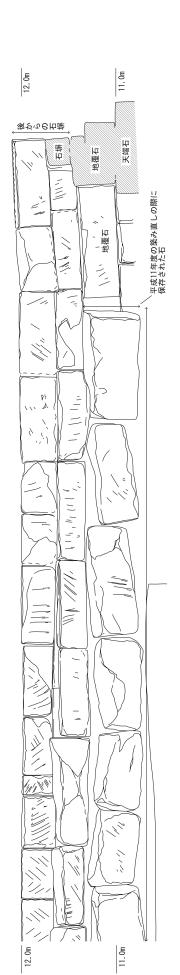
遺構 遺構は,近世の御角櫓基礎石列,排水溝6列,埋 設切石積石積2か所,近代の第七高等学校造士館プール 跡を確認した。

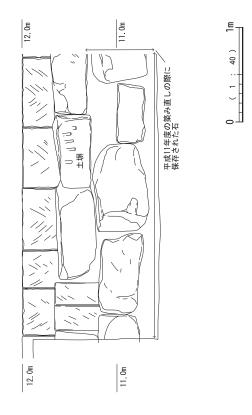
(1) 近世

① 御角櫓跡(第66図~72図)

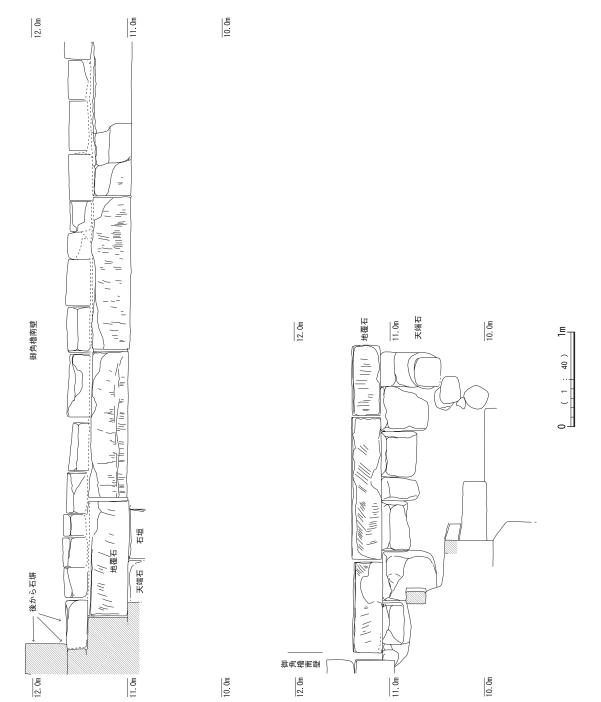
M-1区に御角櫓の基礎と考えられる基礎石列が,本 丸跡南側石垣に対し直角に検出された。平成11年度で 確認された基礎石列と今回確認された基礎石列から,御 角櫓の建物は,南北が約18.6m,東西が5.6mの規模であっ たと考えられる。

御角櫓は、御兵具所跡と同じく、石垣と一体となった 櫓で、基礎石列の周囲には漆喰床である犬走りがあり、

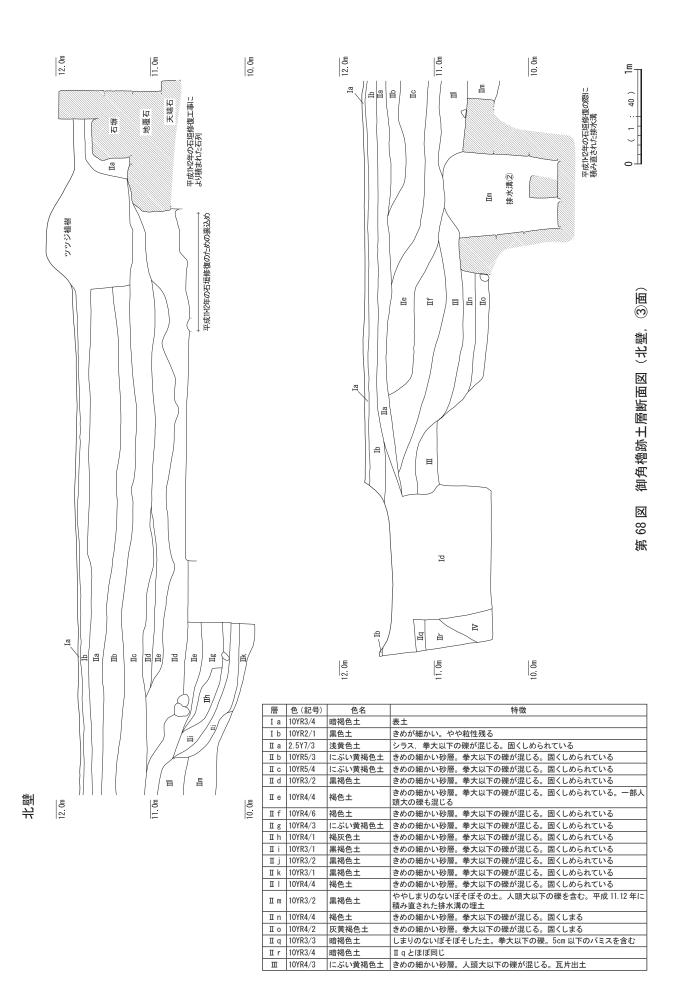




第66図 御角櫓跡東側石垣見通し断面図(①面)



第67図 御角櫓跡石垣見通し図 (南壁, ②面)



その周囲には排水溝が巡らされていることが確認された。この犬走り及び雨落溝である排水溝①を含めると、御角櫓の規模は、南北約21.6m、東西約7.2mである。

①-1 御角櫓基礎石列(第64図・第69図・第71図)

M-1 区では、標高 11m 付近で石列を確認した。石列は、8 石が確認でき、長さは約 3 m である。石列から排水溝 ①に掛けては、漆喰が付着していた。これは、平成 11 年度で確認された御角櫓跡と同じで、漆喰床が張られていたためと考えられる。

御角櫓基礎石列の下部構造は、 $40 \times 30 \times 100$ cm $\stackrel{>}{\sim} 60 \times 25 \times 100$ cm $\stackrel{>}{\sim} 0$ 長方形の切石を 2 または 3 段段積み重ね、その下に栗石を敷いている。切石の接着面は漆喰で固定している。これら切石の石材は溶結凝灰岩である。

基礎石は、固く締まった造成土の上に載せられ、外側の排水溝①との間の犬走りの下部は、版築で固め、基礎石が外側に崩れないように工夫されていた。犬走りの幅は、約40cmである。

修復はされているが、この基礎石と御角櫓と一体となっていた本丸東側・南側の石垣天端の高さは、ほぼ同じである。石垣の天端の上には、枘穴を持つ地覆石があり、地覆石には基礎石と同じ漆喰がみられる。そのため、本来は、基礎石の上に礎石や地覆石を漆喰で固定していたか可能性もある。

城郭石垣の櫓でみられる地下構造は、この御角櫓では 確認できなかった。御角櫓基礎石列は、中央部が抜き取 られていたため確認できなかった。ただし、基礎石が2 段で造られていることから、御角櫓中央部に地下構造が あった可能性は否定できない。

①-2 排水溝① (第64図・第70図~第72図)

基礎石の1.4m外側には、幅60~70 cm,深さ20~50 cmの浅い排水溝が確認された。排水溝は、南側石垣方向に曲がりながら下っている。排水の落し口は旧排水溝(排水溝②)の上を利用している。この排水溝①は、平成11年度発掘調査で確認された御角櫓基礎石列の排水溝の延長である。御角櫓の雨落ち溝であると考えられる。平成11年度では蓋はなかったが、今回は蓋が確認された。石材は全て溶結凝灰岩である。

この排水溝①の築石には、N-1・2区に40cmと30cm角の軒柱基礎が2基確認された。石材は溶結凝灰岩である。軒柱基礎の間は3mである。この部分が御角櫓の入り口と考えられ、この軒柱基礎は、御角櫓の入口屋根の出し部の柱を支える軒庇の礎石と考えられる。排水溝①の蓋のうち、この軒柱基礎の縁面の6枚は、他と違い石鑿調整が細かい切石が用いられていた。これは、排水溝①を渡るための「渡石」と思われる。

その西側には、同じような平石を横に置いた平石が石

畳状で検出した。この平石は、排水溝②の埋土の上で確認された(第72図)。そのため、排水溝②は、排水溝②を壊して埋めた後に造られたと考えられる。

排水溝①の渡石の係っている部分と併行する石垣②の 石垣東側には、奥行きが広い石が用いられている。排水 溝②が機能している段階では、ここに橋が架かっていた 可能性がある。排水溝①を造る前には、排水溝②が雨落 ちも溝をかねた開渠排水溝として使用されており、端を 渡って入り口に入ったと考えられる。

① - 3 石垣地覆石

修復工事以前の石垣の工事測量図には、地覆石上面に 柄穴がみられた。御角櫓その間隔は、40 cm前後である。 御角櫓は、地覆石を基礎として利用していたため、柄穴 の間隔は、御角櫓の桁行であると考えられる。

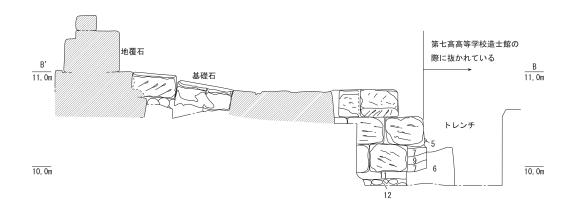
② 排水溝② (第64図・第68図・第70図~第72図)

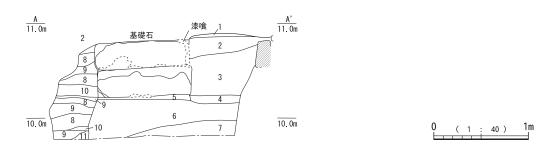
排水溝③は、L-1~3区で確認した。平成11年度に確認された御角櫓西側の排水溝の続きである。この排水溝は、41トレンチ(東)の排水溝①からの続きでもあり、御庭造営以前に、御楼門跡から御角櫓跡で直線的に伸びていた排水溝の一部である。当初は、御角櫓の雨落ち溝としても機能していたと考えられる。

排水溝②は M-5で、御角櫓を避けるように曲がっており、その後直進し、M-1'で本丸跡南側石垣の石垣天端より4段下に落し口を設けている。この排水溝②は、御庭造営に伴って廃棄されたが、落し口付近は機能していたようで、その後に造られた排水溝①はこの落とし口を利用している。

排水溝②の側石は、他の地区では1段だがこの地区では、落し口に向かって傾斜をつけているため深くなっている。側石上端からの深さはM-4区で90 cm、M-1区で150cmである。排水溝②を構築する側石は、東壁では、3~5段の布積石垣である(第71図中段)。築石は丁寧な鑿調整がみられる切り込み剥の石材である。底石はM-1区で外されており、落し口は蓋石と側石と底石の一部を残し壊されていた。中央より南側の側石は、積み直されており、その石垣間には漆喰での間詰跡がみられる。この部分より上には、排水溝①が載っておりここも漆喰詰が行われている。この部分は、排水溝①を載せるために積み直されたと考えられる。西壁では、側石の石垣が、本丸跡側石垣の石垣天端と平坦になるように揃えられており、地表面に近いと思われる。

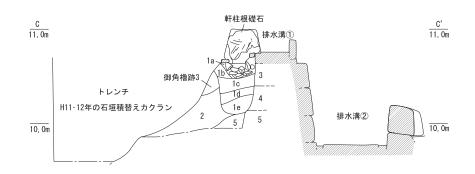
底石は、M-1・2区にかけての約半分を外され、その下を掘削されていた。底石が外された部分は、西壁でも石垣が抜かれており、礫や瓦片を敷きこんでいた。排水溝②から排水溝①に付け替える際の造成に伴うものと考えられる。





| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 |
|---------|-----------|-------|--|
| 御角櫓跡1 | 10YR6/2 | 灰黄褐色土 | 漆喰面。犬走り面を形成 |
| 御角櫓跡 2 | 7. 5YR4/2 | 灰褐色土 | 土質は固くしまり若干粘性がある |
| 御角櫓跡3 | 7. 5YR4/2 | 灰褐色土 | 灰白色 (7.5YR8/1) の漆喰?石灰?を混ぜた土壌改良土で極めて固くしまる。御角櫓基礎石の外側排 水溝,犬走り等外項工事の施工に用いたと思われる (一括埋土ではなく施工しながら段階的に埋めた) |
| 御角櫓跡 4 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 1~2cm程の礫が多く入り土質はしまらず柔らかい |
| 御角櫓跡 5 | 10YR8/1 | 灰白色土 | 漆喰層。粉状の漆喰(石灰?)に0.2~1cmの礫が多く入り黒色土混じり。固い面を作るのに用いた |
| 御角櫓跡 6 | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 砂質が強く砂粒は粗い。軽石混じりで土質は固くしまる |
| 御角櫓跡7 | 5YR3/2 | 暗赤褐色土 | 砂質土。砂粒は粗くしまりはない。(J-1·2区西壁土層Vb層と同じ) |
| 御角櫓跡8 | | | 5層と同じだが礫が多く入る。基礎石積みの各石上端に合わせるように敷設 |
| 御角櫓跡 9 | 7. 5YR3/1 | 黒褐色土 | 1 cm程の礫と若干の漆喰が含まれる粘性土 |
| 御角櫓跡 10 | 2. 5Y4/1 | 黄灰色土 | 0.5~3 cm程の漆喰が含まれる |
| 御角櫓跡 11 | 10YR8/1 | 灰白色土 | 漆喰層。漆喰(石灰?)と5mm程の礫が多く含まれる白色層 |
| 御角櫓跡 12 | | | 軽石層。10 cm程の軽石を敷設。黒褐色土混じり |

第69図 御角櫓跡基礎南北・東西トレンチ土層断面図 (A-A', B-B')



| 層 | 色 (記号) | 色名 | 特徴 |
|---------|-----------|---------|---|
| 排水溝① 1a | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 凝灰岩破砕礫層 |
| 排水溝① 1b | 7. 5YR4/2 | 灰褐色土 | 黒褐色土 (10YR3/1) 混在土 |
| 排水溝① 1c | 7. 5YR5/6 | 明褐色土 | 3 cm程の扁平な白色漆喰片が多量に含まれる |
| 排水溝① 1d | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 漆喰片は少なく、凝灰岩片が若干含まれる |
| 排水溝① 1e | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 1 cm~拳大の白色漆喰片が多量に含まれる |
| 排水溝①2 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 0.2~1 cmの灰白色や黄褐色の凡化礫を多量に含む |
| 排水溝①3 | 10R3/1 | 暗赤褐色土 | 砂質土。砂粒は粗く,凝灰岩を若干含む |
| 排水溝①4 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 2 mmの円礫が多く含まれる |
| 排水溝①5 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 砂質が強く2mm~の灰白色,黄褐色の凡化礫を含む。(東西土層Id層に近いが固くしまらない) |
| 御角櫓跡3 | 7. 5YR4/2 | 灰褐色土 | 灰白色 (7.5YR8/1) の漆喰?石灰?を混ぜた土壌改良土で極めて固くしまる。御角櫓基礎石の外側排 水溝。犬走り等外項工事の施工に用いたと思われる(一括埋土ではなく施工しながら段階的に埋めた) |

第70図 御角櫓跡排水溝①排水溝②土層断面図 (C-C')

③ 排水溝③ (第64 宇・第73 図・第74 図)

排水溝③は,L-1~3区で確認した。落し口は,L-3°の石垣に石垣天端より7段下に設けている。この排水溝は、37トレンチで「く」の字状に折られ、41トレンチの築山西側で確認された排水溝③の続きである。

この排水溝の標高は、L-2区で側石天端が9.24m,石蓋が9.43mを測り、L-1区で側石天端が9.25m,石蓋が9.61mを測る。全体的に平坦であるが、暗渠底石の落し口は9.07mを測り、やや深くなる。排水溝②と同じく側石が石垣積である可能性が高く、裏込め石もみられる。落し口はL-1'の地覆石より7段下に開口している。これらの石材は、全て溶結凝灰岩である。近世の地表面は、標高約11mであり、これより低いことから、この地区では完全に土中に埋められた暗渠排水溝である。排水を外御庭に流すために、角度をつけていると考えられる。

この排水溝の埋土は、城内内部から石垣側に順層に埋められていた。その造成土中では、瓦片を埋め込んでお

り、17世紀代の長崎瓦も出土している。これは、排水溝③が、排水溝②を付け替えていることの証明になる。

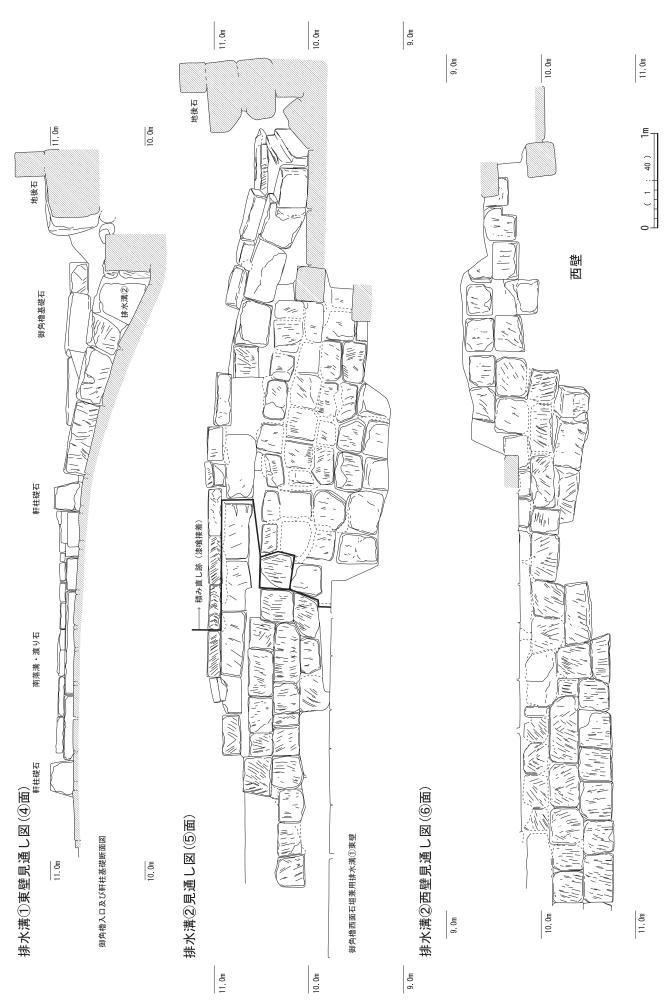
④ 排水溝④ (第 64 図·第 74 図·第 75 図·第 76 図)

排水溝④は、L-2・3区で確認した。平成11年度に確認された調査区東端付近の排水溝の続きである。

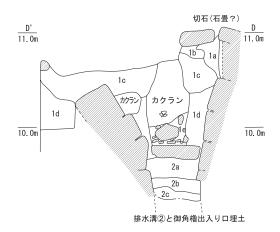
今回は、東側半分のみを確認した。標高は、はL-3 区で側石が標高9.79m、底石が標高9.68m、L-2区で側石の標高9.66m、底石で標高9.57mであった。近世の地表面(標高約11m)より低いことから、蓋は失われているが、地下に埋設された暗渠排水溝であったと考えられる。

L-2区の土層断面では、排水溝②の埋土は、排水溝 ③と排水溝④の埋土の受けら埋められていることから、 排水溝②が造られる以前に、造られていたことがわかる。

排水溝④の大半は,第七高等学校造士館時の土管設置で排水溝が壊されていた(第75図)。L-1区の石垣の



御角櫓跡上段:排水溝①見通し図(東壁④面)中段:排水溝②見通し図(東壁⑤面)下段:排水溝②見通し図(西壁⑥面) 第71図



0 (1:40) 1r

| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|---------|-----------|---------|---|
| 排水溝② 1a | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。黒褐色の 3 ~ 5 cmのブロックを含む |
| 排水溝② 1b | 10YR3/4 | 浅黄橙色土 | きめの細かい砂層。しまりが強い。ブロック状に入る。3 cm程度の漆喰ブロックを含む |
| 排水溝② 1c | 10YR4/6 | 褐色土 | きめの細かい砂層。しまり若干強い。拳大以下の礫が混じる。瓦片を若干含む |
| 排水溝② 1d | 10YR5/6 | 黄褐色土 | きめの細かい砂層。しまりがなくぼそぼそ。拳大以下の礫を含む。遺物はほとんど含まない |
| 排水溝② 1e | 10YR4/4 | 褐色土 | きめは細かい。しまりがない。粘性あり。人頭大以下の礫を含む。瓦を下部に大量に含む |
| 排水溝② 2a | 7. 5YR4/4 | 褐色土 | きめは細かい。しまりが強く5cm以下の粘土ブロックを含む |
| 排水溝② 2b | 10YR4/6 | 褐色土 | きめの細かい土。しまりが強い。拳大以下の礫を含む。粘性やや強い |
| 排水溝② 2c | 10YR5/8 | 黄褐色土 | きめの細かい土。しまりが強い。混入物はほとんど無く均一。粘性やや強い |

第72図 御角櫓跡排水溝②土層断面図(東西, D-D')

下には土管が残っており、L-1'の石垣面には地覆石より7石下の石垣を抜いて設置している。 $J\sim L-1$ 区北側断面では、L-1区にその土管の一部が断面に検出され、K-1区に排水溝⑤が検出されている(第76図)。その上の埋土は溶結凝灰岩の割れたものと大きな土塊で埋められており、重機を使用した攪乱層と考えられる。

⑤ 排水溝⑤ (第64 図・第76 図)

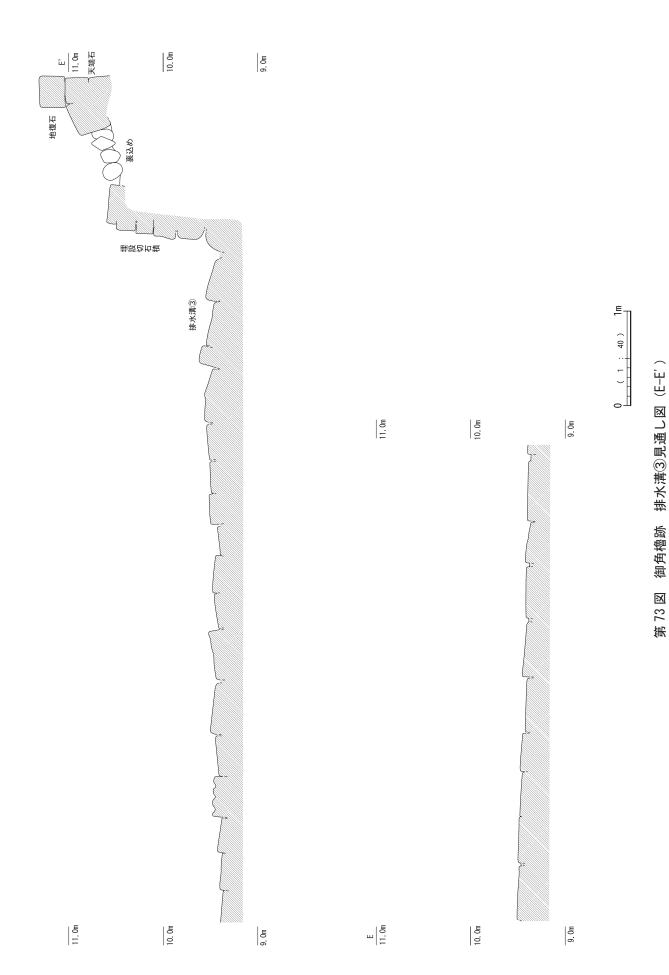
排水溝⑤は、昭和53・54年度の調査時のJ-4区で確認された井戸⑤のための排水溝と考えられる。

排水溝⑤は, K-1区で確認した。石蓋は幅 1m20 cm, 厚み 13 cmのもので丁寧に鑿調整されている。排水溝の幅は 80 cmで, 側石の高さは約 20 cmである。側石は 2段に積み上げられ, 北側は 3 段になっている。標高は, 側 石が9.57m, 石蓋が9.70mを測る。近世の地表面(標高約11m)より低いことから、地下に埋設された暗渠排水溝であったと考えられる。石材は、溶結凝灰岩である。

落し口付近では、排水溝⑥と合流している。その合流では攪乱がみられ、石垣裏込めが抉り取られて拡散していた。これは、ある時期に部分的に改築したからと考えられる。落し口付近では、床にはモルタルが張られていた。また、モルタル西側には側石がある。もともと狭かった排水溝がモルタルの幅で広げられたと考えられる。モルタルが塗られていたことから、第七高等学校造士館の時代以降にも使用されていたと考えられる。

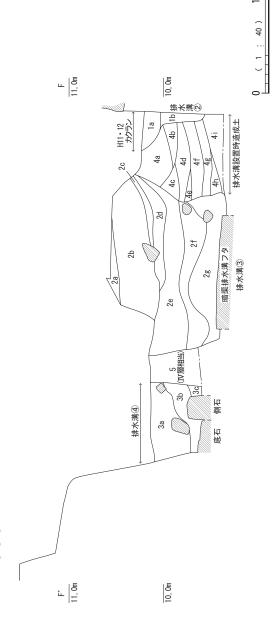
⑥ 排水溝⑥ (第 64 図·第 77 図上段)

明治6(1873)年の「鹿児島城本丸殿舎配置図」(第4図)



- 88 -

排水溝②③4)東西土層断面図



| 特徴 凝灰岩片(側石裏込)が多く含まれる 拳大の凝灰岩が多く含まれる 0.5~1cmの軽石が入り砂質が強い 砂質土。砂質は粗く,しまりがない 1層砂質混じり 砂質土。1層土質 灰白色粘質ブロックを若干含む 酸化マンガンが部分的に含まれる 1~3cmの軽石を多く含む | 商名 DX DX DX 日本 日本 | 色(配号) 10YR4/2 7. 5YR4/2 10YR3/4 7. 5YR4/3 10YR5/2 7. 5YR4/3 10YR3/2 10YR3/2 | 層 3b 3c 5(IV層相当) 4a 4b 4c 4c 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d 4d | ルを開び |
|---|---|---|---|--------|
| 0.5 cm程の礫が多く含まれる。砂質が強い | 褐灰色土 | 7. 5YR4/3 | 4g | ر ا |
| 0.5 cm程の礫が多く含まれる。砂質が強い | 褐灰色土 | 7. 5YR4/3 | 48 | |
| 1~3cmの軽石を多く含む | 黄灰色土 | 2. 5Y4/1 | 4f | 进, |
| 酸化マンガンが部分的に含まれる | 褐灰色土 | 10YR4/1 | 4e | Ģ |
| 灰白色粘質ブロックを若干含む | 黒褐色土 | 10YR3/2 | 4d | |
| _ | 褐色土 | 7. 5YR4/3 | 4c | Т |
| 1層砂質混じり | 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 4b | |
| 砂質土。砂質は粗く,しまりがない | 褐色土 | 7. 5YR4/3 | 4a | |
| 0.5 ∼ 1 cmの軽石が入り砂質が強い | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 5(以層相当) | > 5 |
| 拳大の凝灰岩が多く含まれる | 灰褐色土 | 7. 5YR4/2 | 3c | ッ |
| 凝灰岩片(側石裏込)が多く含まれる | 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 3b | |
| 特徴 | 色名 | 色 (記号) | ლ | |

| 特徴 | | 砂質土。平成11・12年度石垣積替え時のカクラン | 明褐色ブロック土 (10YR6/6) と 1 cm程の礫を多く 含む | 黄褐色土 (10YR5/6) を含む | 砂質土。灰褐色土美ロック混じり。礫,瓦少量 | 粗い砂粒が多く入り、砂質が強い | 灰黄褐色ブロック土を含み,砂粒が粗い | きめの細かい砂層。大量の人頭大~拳大の礫が混 じる。少量の瓦片が混じる | きめの細かい砂層。混入物殆どなく,粘性強い。 非常にしまる | 明黄褐色土ブロック土 (10YR6/6) が多く含まれる |
|-------|---------|--------------------------|---------------------------------------|--------------------|-----------------------|-----------------|--------------------|--|----------------------------------|------------------------------|
| 色名 | 黒褐色土 | 褐色土 | 灰黄褐色土 | 黒褐色土 | 灰褐色土 | 暗褐色土 | 黒褐色土 | 暗褐色土 | 褐色土 | にぶい黄褐色土 |
| 色(記号) | 10YR3/2 | 7. 5YR4/3 | 10YR5/2 | 5 YR3/1 | 7. 5YR4/2 | 10YR3/3 | 7. 5YR3/1 | 10YR3/3 | 10YR4/4 | 10YR5/4 |
| 塵 | 1a | 1b | 2a | 2b | 2c | 2d | 2e | 2f | 2g | 3a |

第74図 御角櫓跡排水溝②③④土層断面図(東西, F-F')

には、御角櫓跡の西側に御池がある。排水溝⑥は、その 御池に関連する可能性がある。

排水溝⑥は、I-2区から K-1区にかけて確認した。 I-2区では、上面に庭石や敷石等が被さり、そして、西側は壊されている。K-1区では排水溝⑤に接合している。石蓋は幅 $70\sim55$ cmで厚みは約 15 cmである。J-1区にサブトレンチを入れて確認したところ、深さは約 60 cmを測る。この蓋石の標高は 10.20m である。これから排水溝⑤の標高 9.52m に下り接合する。近世の地表面(標高約 11m)より低いことから、地下に埋設された暗渠排水溝であったと考えられる。石材は、溶結凝灰岩である。

排水溝⑤⑥の接合部は蓋石や側石の切石の乱れがみられた。石垣の落し口には、止め石をはめ込んでいる。よって、排水溝⑤⑥は同時に廃棄されたと思われる。

⑦ 埋設切石積遺構① (第64図・第77図)

御角櫓跡西側の L- $1 \cdot 2$ 区の排水溝①・②落し口から排水溝④落し口の石垣裏側では、長さ $50 \sim 90$ cm,厚 $20 \sim 25$ cmの切り石が $5 \sim 6$ 段積み上げられた石垣を確認した。標高は $9.40m \sim 10.60m$ である。石材は溶結凝灰岩である。切り石の築石の間には,栗石が充填されていた。その前面は,近世の造成土で埋められている。本丸南側石垣とこの石垣との間には,人頭大から拳大の川原石と溶結凝灰岩を割った裏込めが充填されていた。

この石垣の本丸跡側は、近世の造成土で埋められていることから、石垣の背面を支える構造であった可能性が高い。周辺は落し口があるなど、城内の排水が集中する箇所であり、石垣に補強が必要であったと考えられる。排水溝⑤・⑥の落とし口西側のJ・K-1区でも、石垣面に石垣を確認した。石垣上から2石まで裏込めがあり、その下に切石積が段造られていた。

⑦ 埋設切石積遺構②(第64図·第77図下段·第78図)

J-1区のサブトレンチでも、本丸跡南側石垣の内側で2段の石垣が確認された。標高9.1mの造成土の上に10cm程砂礫層を敷き、その上に薄手の切石を4石約60cm積んでいる。そこで段になり、さらにその約60cm奥には、厚めの切り石で3石約40cmの石積がみられた。階段状の2段階の石垣の裏側には裏込めが充填されていた。厚めの切石は再利用もあり、その栗石の中には瓦片もみられる。上部は攪乱を受けているものの、切石の石積の根石は排水溝⑤⑥の合流地点までみられた。これらの埋設切石積遺構と石垣の間には、人頭大の大栗や拳大の小栗の溶結凝灰岩の割石や川原石などを詰めている。なお、この埋設切石積遺構の下層に溶結凝灰岩の屑石を敷いて水はけを良くし、造成土を積み上げている。この石垣も近世の造成土で埋められ、地中にあったことにな

3.

埋設切石積②は、裏込めの栗石を2段の石垣で安定させ、石垣を支える構造である。また、切石の下面には溶結凝灰岩の砕石を敷き、その上に造成土を埋め込んでいる。排水溝⑥はこの造成土を掘り込んで敷設されている。これは、周辺の自然基盤層が低かったため、造成土でのかさ上げが必要であった可能性がある。

⑧ 塀の基礎 (第64図・第67下段)

御角櫓跡基礎石列より西側の南側石垣は、平成11年度の石垣修修復工事で修復範囲に入らなかった石垣である。南側石垣には、近代の石垣が載っておらず、近世の地覆石が最上段に載っている。地覆石の上面には、枘穴が開いている。これらは、塀の基礎であったと考えられる。枘穴の幅は、ばらつきがあるが、平均すると約20cmで、御角櫓の幅の約半分である。この部分でも、石垣の上には塀が建っていたと考えられる。

(2) 近代

① 第七高等学校造士館建物基礎 (第 64 図·第 69 図)

昭和10 (1935) 年「造士館沿革概要」では、御角櫓跡の地点に建物が写っている。また、昭和11 (1936)年「行幸記念誌」附図の「校内御巡覧圖」には、約13m×5mの建物がみられる。

御角櫓基礎石列は、8石目よりも北側は抜き取られていた。平成11年度の調査成果と照合した結果、御角櫓基礎石の欠損部は13mに及ぶことが判明した。これは、「校内御巡覧圖」の建物規模と合致する。

加えて、平成11年度調査の石列はこの建物の梁間の基礎石に該当すると思われる。御角櫓基礎石列の基礎石はその建物建設時に抜かれたものと考えられる。この建物の西側にはプールが写っており、プールに関連する建物の可能性が高い。

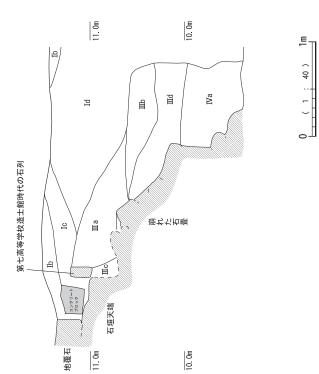
② 第七高等学校造士館プール排水溝(第75図・第78図・第64図)

K・L-1区の石垣天端石の上には、地覆石の内側に幅約10cm,長さ約20cmの石列が並んでいる。石垣天端を利用した排水溝であると考えられる。第七高等学校造士館のプールは、石垣際まで迫っており、この排水溝はその排水のためのものと考えられる。

出土遺物 (第80図~94図254~460)

御角櫓跡の調査区では、254~460が出土した。近世の遺構やその下層を部分的に調査しているが、大半の遺物は、近現代の攪乱層から出土している。

 $254 \sim 362$ は陶磁器である。うち、 $254 \sim 263$ は輸入陶磁器である。 $254 \sim 257$ は、中国龍泉窯系青磁であ



第75図 御角櫓跡調査区土層断面図(西壁, ⑦面)

අ

11. Om

10.0m

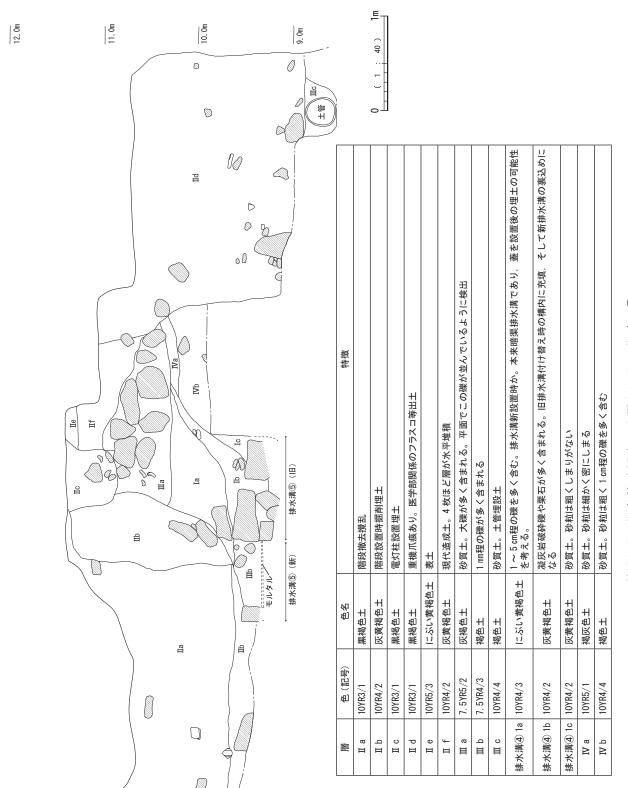
第5表 御角櫓跡西壁土層注記

| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|-------|------------|---------|---|
| Ιc | 7.5YR4/6 | 褐色土 | 5 cm以下のアカホヤブロック混じりの層。植樹のための造成土 |
| I b | 北壁Ibと同じ | | |
| I d | 10YR2/1 | 黒色土 | しまりのないふかふかの層 |
| I e | 10YR3/1 | 黒褐色土 | ややしまりのないきめの細かい砂層。人頭大~拳大の礫。コンクリートブッロクが混じる。ガラス瓶, プレパラート, 瓦片出土 |
| Ιf | 7. 5YR3/3 | 暗褐色土 | きめの細かい砂層。人頭大~拳大の礫。コンクリートブロックが混じる。ガラス瓶. プレパラート. 瓦片 出土 |
| Пр | 10YR3/2 | 黒褐色土 | ややしまった層。人頭大~拳大の礫が混じる。瓦片、ガラス製品出土 |
| Πq | 10YR3/2 | 黒褐色土 | しまりのある層。きめは細かい。5 cm以下のアカホヤブロック混じる。瓦片出土 |
| Ιr | 7. 5YR3/2 | 黒褐色土 | しまりのある層。きめは細かい。5 cm以下のアカホヤブロック混じる。瓦片出土 |
| Пs | 10YR2/1 | 黒色土 | しまりのある層。きめは細かい。5 cm以下のアカホヤブロック混じる。瓦片出土 |
| Ша | 10YR6/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。5 cm以下の漆喰片や瓦片が大量に混じる |
| Шb | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | Ⅲ a 層とほぼ同じだが、瓦片は少ない |
| Шс | 7. 5YR3/4 | 暗褐色土 | ややしまりのない砂層。5cm以下の漆喰片,アカホヤブロックを含む |
| III d | 10YR1. 7/1 | 黒色土 | しまりのない焼土。ガラス瓶,フラスコなど医療もしくは実験道具の破片が大量に出土 |
| IV a | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。拳大以下の礫。5 cm以下のアカホヤブロックを含む。裏込め上面には大量の瓦片が出土 |
| IV b | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | きめの細かい砂層。拳大以下の礫。5cm以下のアカホヤブロックを含む。排水溝面には、人頭大の礫が多く含まれる |

る。254 は、上田分類 B 類の碗である。外面は片切彫の 蓮弁文をもつ。内面にも文様が彫られているが、判別で きない。口縁部はやや外反する。14世紀後半~15世紀 前半。255は、上田分類B類の碗である。外面はヘラ先 による細線蓮弁文をもつ。256は、瓶である。頸部の一 部で,外面には耳が貼り付けられる。外面には,花など の文様が彫られる。14世紀後半~16世紀前半。257は, 瓶の頸部の一部である。外面は二条線と文様が彫られ る。258~265は、中国景徳鎮窯系青花である。258は、 碗である。外面には渚模様、内面には口縁部下部に一条 線が描かれる。清朝青花で18世紀。259は、皿である。 総釉で、畳付は釉剥ぎされる。内面見込みみには文様が 描かれる。外面高台内側には、同心円状に条線が刻まれ る。17世紀前半。260は、碗である。内面・外面には縄 目紋が描かれる日本風の物で、高台は幅広で低い。高台 から高台内面は露胎。1630~1640年代。261は、小碗 である。薄手。外面には蝶と草文が描かれる。口縁部は 外反する。17世紀前半。262は、小碗である。口縁部は 外反して、薄手。外面には野菜文が描かれる。17世紀 前半。263は、小碗である。内面が丸く隆起する饅頭心 碗である。内面見込みには、円の内側に虫文が描かれる。 高台は内側から外側に向かって斜めに削られる。高台か ら高台内面は露胎。16世紀第4四半期。264は、小碗で

ある。口縁部は外反して、薄手。内面には口縁部直下の 一条線と二条線の間に文様が描かれる。16世紀末~17 世紀第1四半期。265は、碗である。腰が曲がらない蓮 子碗である。外面は文様が描かれ、内面口縁部付近に二 条線が描かれる。

266~284は、国産磁器である。266は、肥前系磁器 の碗である。高台は小さく低い。総釉で、畳付は釉剥ぎ される。外面には唐子文が描かれる。18世紀後半。267 は、肥前系磁器の碗である。有田の可能性がある。口縁 部付近は釉剥ぎされており、蓋物と考えられる。 文様は 素描きで菊花文が描かれる。1820~1860年代。268は, 肥前有田の色絵磁器輪花皿である。外面には唐草文, 内 面には中央部に竹で空白を挟んで多色の花文などが描か れる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。高台内面には、大 明成化年製の一部と考えられる銘款が入る。1780年代 ~ 1820 年代。269 は、肥前系の磁器皿である。腰折れ で多角形に立ち上がる皿の一部と考えられる。内面に は、牡丹文が描かれる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。 1780年代~1820年代。270は、肥前の磁器端反碗であ る。外面は格子文、内面は見込みみに銀杏線、口縁部下 に二条線が描かれる。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。 271 は、肥前系の磁器小碗である。腰折れで型打ち成形 である。外面には蓮弁文と蛸唐草文、内面見込みには水



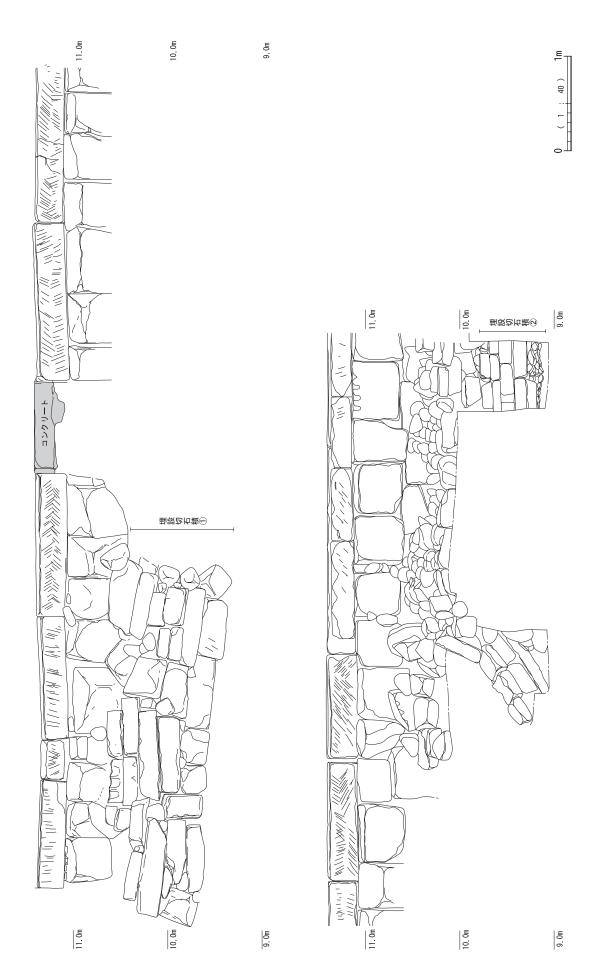
第76 図 御角櫓跡調査区土層断面図(北壁, ⑧面)

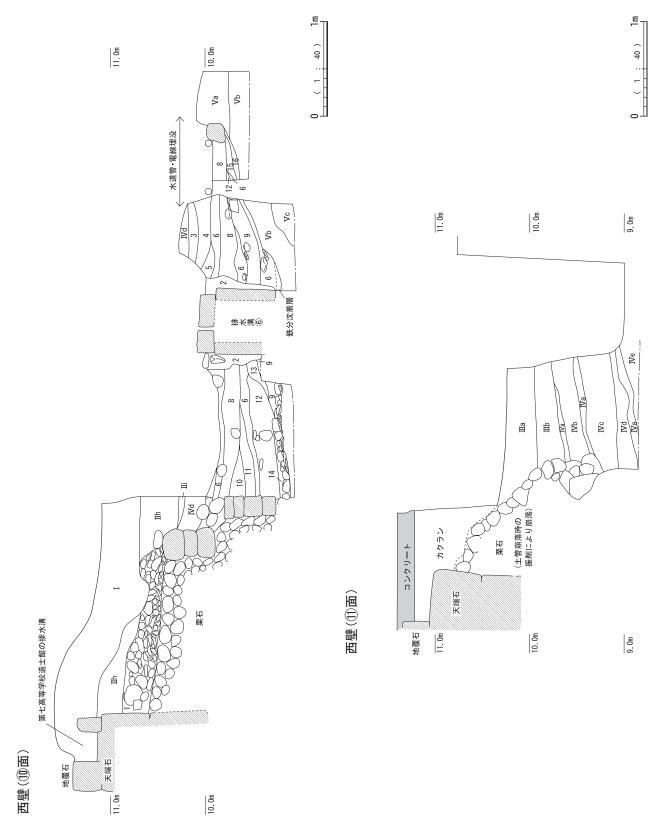
9. Om

10.0m

11.0m

12.0m





御角櫓跡上段:J- 1・2 トレンチ土層断面図(西壁,⑩面) 下段:K- 1 土管埋設溝土層断面図(西壁,⑪面) 第 78 図

第6表 御角櫓跡 J-1·2西壁土層注記, K-1土管埋設溝西壁土層注記

| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|---------|-----------|---------|---|
| | | | I, Ⅱh, Ⅲi, Ⅳd層は北壁と同じ |
| 排水溝⑥1 | 7.5YR4/1 | 褐灰色土 | 凝灰岩破砕礫が多く含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 2 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 凝灰岩礫が含まれ、左右の土層のブロックが含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥3 | 7. 5YR4/1 | 褐灰色土 | 褐色土 (7.5YR4/4) 混在土。砂質が強い。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥4 | 7.5YR4/3 | 褐色土 | 砂質土。凝灰岩を含む。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 5 | 10YR4/1 | 褐灰色土 | 1~2 mmの礫を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 6 | 10YR5/1 | 褐灰色土 | 砂土。弱溶結もしくは非溶結凝灰岩層(地業か?)。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥7 | | | 凝灰岩破砕礫層。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥8 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 明黄褐色風化礫,白色軽石礫を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 9 | 10YR4/3 | 褐色土 | 白色軽石礫を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 10 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 明黄褐色粒を多く含む。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 11 | 10YR4/3 | 灰黄褐色土 | 土質は柔らかく均質。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 12 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質土。5~15 cmの礫が含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 13 | 10YR6/2 | 灰黄褐色土 | 砂土。砂粒は粗く均質。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 14 | | | 礫層。凝灰岩破砕礫が多く,15 cm程の円礫も含まれる。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 15 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 | 灰色粘質ブロックを含む。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| 排水溝⑥ 16 | 7.5YR4/2 | 灰褐色土 | 若干粘性をもつ。排水溝⑤埋設時の造成土 |
| V a | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | 砂質土。灰色砂質(副色)を含み斑状となる。排水溝⑤埋設以前の造成土 |
| V b | 5YR3/2 | 暗赤褐色土 | 砂質土。砂粒は粗くしまりはない。排水溝⑤埋設以前の造成土 |
| Vс | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 砂土。砂粒は極粗。排水溝⑤埋設以前の造成土 |

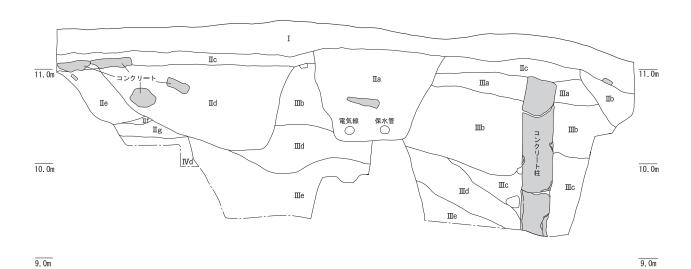
| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|------|---------|------|---|
| Ша | 10YR4/4 | 褐色土 | 砂質土。砂粒が粗く5~10㎝程の礫が多く含まれる |
| Шb | 10YR4/4 | 褐色土 | 砂質土。K-1 区北壁土層皿層と同じ |
| IV a | 10YR5/1 | 褐灰色土 | 砂質土。K-1 区北壁土層IV a 層,J-1·2 区トレンチ西壁土層排水溝⑤ 6 と同じ |
| IV b | 5YR3/1 | 黒褐色土 | 砂質土。砂粒は極粗で軽石を含む |
| IV c | 5YR4/2 | 灰褐色土 | 砂土。砂粒は粗く均質 |
| IV d | 5YR4/2 | 灰褐色土 | 砂土。IV c 層に1~2 cm程の礫が多く入る |

文が描かれる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。高台内面 には成化年製と銘款がはいる。1780~19世紀第1四半 期。272 は、肥前系磁器皿である。外面には唐草文、内 面は蛸唐草文と見込みに五芒星が描かれる。高台は釉 剥ぎされており、高台内面に銘款が入る。18世紀後半。 273 は、肥前有田の磁器鉢である。外面は唐草文、内面 は花文などが描かれる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。 1780年~19世紀前半。274は、肥前系の磁器蓋である。 外面は鳥文など, 内面見込み周囲には, 化粧土が貼られ ている。1820~1860年代。275は、肥前有田の磁器蓋 である。外面には、中央に四方襷文、その周囲には枠の 中に楼閣などの図柄を入れた物が複数描かれる。19世 紀初頭~幕末。276は、肥前有田の磁器碗である。腰折 れで多角形の型打ち成形である。外面に文様が描かれ る。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。18世紀末~19世紀 前半。277は、肥前の磁器火入。外面には山文が描かれ る。内面は口縁部を除き露胎。18世紀後半~19世紀前半。

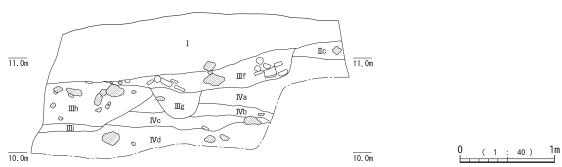
278 は、肥前の磁器火入れ。外面に木などの文様が描かれる。内面は露胎である。19世紀。

279~284 は薩摩で焼かれた薩摩磁器である。279 は、皿である。内面には楼閣山水文が描かれる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。18世紀末~19世紀中頃。280 は、大皿である。型打ち成形で、腰折れで口縁部に向かって外反する。外面は草文、内面見込みには牡丹文や蝶文の文様、周囲には四方襷文が描かれる。18世紀~19世紀。281 は、大皿である。280 と同一個体の可能性がある。上部が多角形になる腰折れの型打ち成形で、口縁部に向かって外反する。四方襷文や花文が描かれる。282は、碗である。内面は状の目釉剥ぎされ、その周囲には波文が描かれる。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。19世紀~幕末。283 は、鉢か。内面の側面のみ青磁の染付である。外面は、簡略化された鋸歯文と雲文、内面見込みにも文様が描かれる。高台内面は蛇の目釉剥ぎされる。18世紀後半。284 は、火入である。高台内面は露胎。外

12.0m 12.0m







| 層 | 色(記号) | 色名 | 特徴 |
|-------|-----------|---------|---------------------------------|
| I | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 表土 |
| Πa | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 | 砂質土。 |
| Пb | 7.5R5/2 | 灰赤色土 | 礫層。島津砕石,竜ヶ水石畳地盤 |
| Ιс | 7.5YR4/2 | 灰褐色土 | 石垣側に1石抜かれた排水口ありそこへ流れている |
| Πd | 7. 5YR4/3 | 褐色土 | 砂礫土。灰色砂が縞状に入る。切石廃棄土坑 |
| II e | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 礫多く含む |
| Ιf | 10YR3/2 | 黒褐色土 | |
| Пg | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | |
| III a | 7. 5YR4/3 | 褐色土 | |
| Шb | 7. 5YR4/3 | 褐色土 | 砂礫土 |
| Шс | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質土 |
| Ⅲ d | 10YR3/3 | 暗褐色土 | ブロック状に土と砂が入る |
| Ⅲ e | 10YR4/2 | 灰黄褐色土 | 砂質土 |
| Шf | 10YR3/1 | 黒褐色土 | |
| Шg | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 砂質土 |
| Ⅲ h | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | |
| Шi | 7.5YR4/1 | 褐灰色土 | 砂質土 |
| IV a | 10YR4/4 | 褐色土 | 白色軽石。黄褐色礫(風化すすむ)を含み砂粒の粗い砂質を多く含む |
| IV b | 10YR5/3 | にぶい黄褐色土 | |
| IV c | 10YR3/3 | 暗褐色土 | |
| IV d | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | φ1~3cm程の白色軽石,黄褐色礫(風化すすむ)を多く含む |

第79図 御角櫓跡 I-1・2区土層断面図(西壁12)面, 南壁13)面)

面には文様が描かれる。19世紀。

285~303は、国産陶器である。286は、肥前系の陶 器碗である。見込みに胎土目が残る。厚く高さのある高 台内面には、ケズリの中心軸が残り、中心からややずれ ている。16世紀末~17世紀前半。285,287~303は, 薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器のうち、竪野系のものであ る。そのうち,286~299は,白薩摩と呼ばれる竪野系 の白色陶胎である。御角櫓跡では多様な器種が出土した。 285 は、端反碗である。胎土は白薩摩と呼ばれる白色陶 胎だが、それに黒化粧土を象嵌して文様状にする。17 世紀後半~18世紀前半。287は、灰色陶胎の碗である。 高台は低く、高台まで総釉。外面の高台上には、千鳥印 が施される。18世紀。288は、碗である。総釉で、畳付 付近は釉剥ぎされる。高台内面には、渦巻き状の沈線が 施される。18世紀~19世紀。289は、碗である。高台 は低い。総釉で、畳付付近は釉剥ぎされる。18世紀~ 19世紀。290は、碗である。高台は高く、器壁は薄い。 内面は、見込みから上面に向かって渦巻き状にケズリを 施す。内面見込みには、3か所の胎土目が残る。厚さの ある高台内面には渦巻き状の沈線が施される。18世紀 ~ 19 世紀。291 は、碗もしくは皿である。内面見込み には4か所の貝目が残る。総釉で, 畳付は釉剥ぎされる。 292は、腰折れの型打ち成形の皿で、外面の口縁部には 沈線が入る。17世紀後半以降。293は、型打ち成形の皿 である。口縁部は波状になる。釉薬はただれており、焼 け損じ、もしくは被熱したものか。18世紀~19世紀。 294 は、型打ちの成形の碗もしくは皿か。底部から湾曲 して腰折れ状に立ち上がる。17世紀末~18世紀。295は, 小坏である。内面は露胎でしており、総釉で、畳付は釉 剥ぎされる。外面には千鳥印が施される。18世紀。296 は, 香炉である。全面施釉される。外面底部には, 形に 沿って一条の沈線が掘られる。18世紀~19世紀。297 は、鉢である。外面は口縁部付近に鉄釉が掛けられる。 内面には明瞭な轆轤目が残る。近代のものと考えられる。 298は、水注である。内面には明瞭な轆轤目が残る。18 世紀~19世紀。取手の換毛製のある突起が付く。299は, 香炉の脚である。獅子もしくは人面が彫られている。18 世紀~19世紀。

300~302 は、竪野系の宗胡録写である。300 は、土 瓶である。内面も施釉される。18世紀~19世紀。301 は、 鉢である。火鉢か。口縁部上面まで文様が描かれる。内 面には口縁部付近から断面三角形状の突起が付く。突起 より下部は露胎である。18世紀~19世紀。302 は、鉢か。 上部に孔が穿たれている。18世紀~19世紀。

303 は、竪野系の三島手と呼ばれる象嵌陶器の茶入である。葉脈文等が描かれる。内面は露胎である。竪野系の象嵌は染付も多いが、胎土を削って白色土を埋め込んでいる。18世紀~19世紀。

304~314は,近・現代の陶磁器である。304は,肥 前系の磁器大皿である。口縁部上面は波状に成形されて おり, 茶褐色の釉薬が掛けられる。文様は型紙刷りであ る。内面は、中央に草花文が描かれ、その周囲は区画が 分けられそれぞれ竹や松、扇状の文様がそれぞれ描かれ る。総釉で、畳付は釉剥ぎされる。305は、肥前系の磁 器碗である。薩摩磁器の可能性がある。文様は型紙刷り である。高台周辺には鋸歯文が描かれ、口縁部に向かっ て菊文等が、内面には口縁部付近に文様が描かれる。総 釉で、畳付は釉剥ぎされる。306は、肥前系の磁器端反 碗である。文様は手書き。内面・外面の口縁部付近には 波状文、外面には花文が描かれる。高台はやや高い。総 釉だが畳付は面取りされる。307は、肥前系の磁器蓋で ある。薩摩磁器の可能性がある。深い青色釉で型紙刷り 鋸歯文や草花文が描かれるが、釉薬が滲んでいる。総釉 で、畳付は釉剥ぎされる。308は、竪野系の白薩摩と呼 ばれる白色陶胎の小碗である。総釉で, 畳付は面取りさ れる。高台付近に赤く刻印が書かれている。309は、瀬 戸美濃系の磁器工業製品蓋か。外面には草花文が描かれ る。内面には,露胎部分に組合せ用のネジ溝加工が入っ ており、中央部に孔がある。310は、肥前系の磁器火鉢 である。文様は銅板転写で外面に鳥や花文(桜)などが 描かれる。明治時代~大正時代。内面は口縁部付近を除 いて露胎。311・313・314は、統制食器である。311は碗、 313 は端反の皿, 314 は腰折れの小碗である。文様は二 条線のみで311は外面,313・314は内面にある。311・ 313 は高台内面に瓢簞に日陶製, 313 は扇と TRADE MARK と書かれている。総釉で畳付は釉剥ぎされる。312は, 石見焼系(島根県や山口県)の擂鉢である。総釉で畳付 は釉剥ぎされる。摺目は細かく,左回りで刻まれている。

315~359は陶器である。そのうち、315~340は薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器である。315は、南九州系の陶器碗である。苗代川系の堂平窯で焼かれた可能性がある。316は、加治木・姶良系の山元窯系で焼かれたと考えられる碗である。半陶半磁の透明釉で、内面見込みに4か所の目跡が残る。被熱のため黒色化している。17世紀後半。317は、加治木・姶良系の陶器碗である。総釉で、畳付付近が釉剥ぎされる。被熱しており、釉薬はただれている。18世紀代。

318・319 は、竪野系の陶器花入れか。同一個体の可能性がある。口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。被熱しており、釉薬はただれている。318 は口縁部下に穴が穿たれているが、319 は穴が窯での焼成前に粘土で塞がれている。17 世紀代。320 は、加治木・姶良系の陶器碗である。総釉で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎ、畳付周辺も釉剥ぎされる。

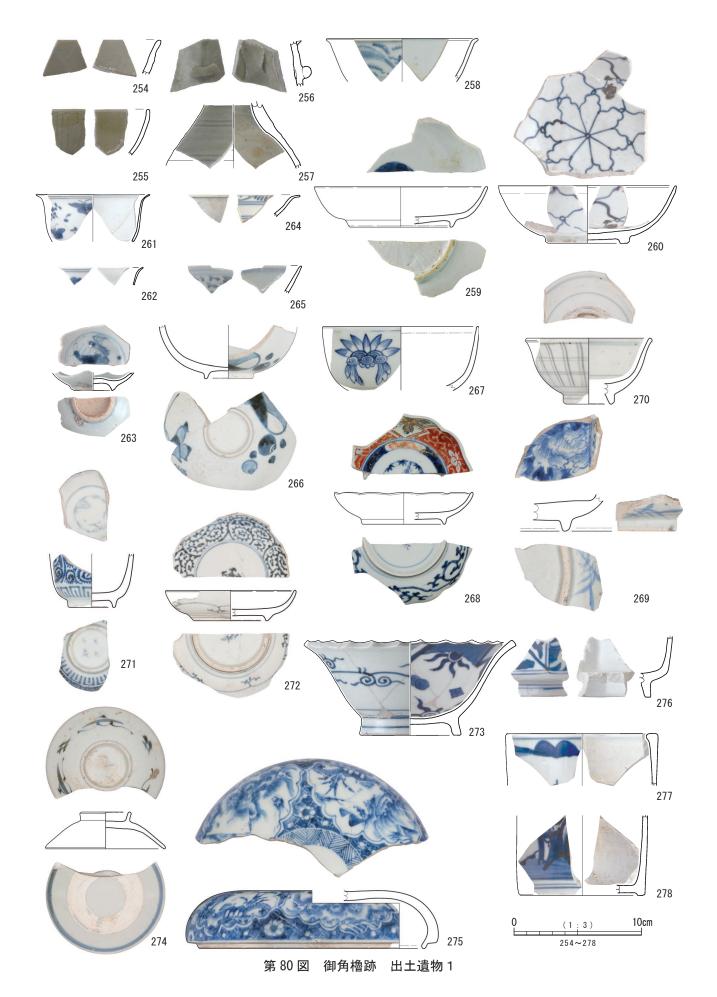
321 ~ 340 は、竪野系の茶入である。黒褐色または褐 釉が掛けられた肩衝茶入である。外面胴部下位から底部

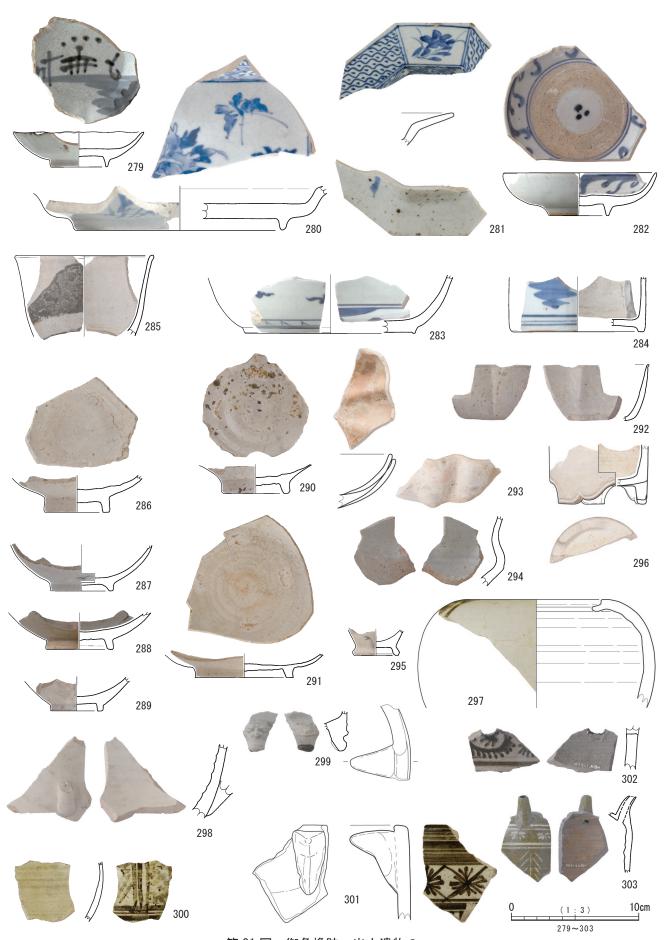
は露胎で底部底には糸切り痕が残る。また, 肩から胴部 にかけて霞がかかるように白色が浮かんでいるが、これ は黒色もしくは褐色の釉薬の上に白濁釉を重ね掛けした ことによる窯変である。大半の茶入(322・336・338以 外)が被熱しており、内外面の釉薬がただれている。17 世紀のものである。ここでは、その一部を図化し関一之 の分類(姶良市教育委員会 2003) を参考に特徴を記載 する。321~329は、口縁部から肩・胴部までの破片で ある。321 器壁が厚く, 肩衝型で胴部が直線的になる (関 分類 I -1-①)。322 は、器壁が薄く、肩衝型で胴部が わずかにカーブする (関分類Ⅱ-1-②もしくは④)。成 形は轆轤成形。17世紀中頃。323~328は,器壁が薄く, 肩衝型である(関分類Ⅱ-1)。成形は轆轤成形。17世紀 中頃。329~340は底部の破片である。329・330は、付 け高台かは判断できないが、器壁が厚く、底部から肩に かけて徐々に薄くなる。胴部内面にケズリ痕が入ること, 胴部下位で, 底部から立ち上がる部分は, ヘラ状工具で 押圧したと思われる細かな平坦面が残ることから関分類 Ⅰ-1-①もしくは②と考えられる。初期の竪野系で冷水 窯や御里窯で焼かれたか。17世紀前半~中頃。331は, 器壁が薄く、外面は轆轤の回転を利用したケズリで調整 し,内面はケズリ痕がみられない円筒型の茶入である(関 分類Ⅱ-1-1)。332~334は、器壁は厚く付け底で、胴 部内面下位には, ヘラ状の工具によるケズリ痕が残る。 左回転の糸切り底である。胴部下位で,底部から立ち上 がる部分は, ヘラ状工具で押圧したと思われる細かな平 坦面が残る(関分類 I-1-①)。初期の竪野系で冷水窯 や御里窯で焼かれたか。17世紀前半~中頃。334は、内 面には溶けた釉薬がべったり張り付いている。335・336 は、器壁が厚く付け底だが、底部は正円で広く、胴部内 面下位のヘラ状の工具によるヘラ状工具で押圧したと思 われる細かな平坦面はない。底部には左轆轤糸切りが残 る。336は、335と同様の特徴をもつが、黄褐色の釉薬 を掛ける。337・339・340は、付け高台だが、器壁は薄 く轆轤成形で外面は録の回転を使用したケズリが残る。 338は、器壁が薄い。関分類Ⅱ類か。

341~351 は,薩摩以外の陶器である。341 は,中国 福建省の陶器壺である。肩から口縁部に向かって窄ま り,口縁部断面は如意型に曲がる。16 世紀~17 世紀。 342~344 は,唐津と呼ばれる肥前の陶器である。342 は,鉄絵陶器碗である。内面~外面の胴部まで施釉され る。内面には鉄絵で文様が描かれる。1590~1610 年代。 343 は,二彩陶器皿である。轆轤成形で外面には,ヘラ 状工具によるケズリ痕が残る。17 世紀後半~18 世紀前 半。344 は,碗である。天目型の碗である。高台付近は 露胎。削り出し高台で,高さは低い。被熱しており,釉 薬はただれている。1590 年~1610 年代。345~349 は, 高取焼などを含む筑前と考えられる陶器である。345 は, 水指か。口縁部は内面に向かって折れる。外面には口縁 部付近から藁灰釉が掛けられる。内面は露胎である。轆 轤成形で, 内面にはヘラ状工具によるケズリ痕が残る。 17世紀。346は,壺もしくは甕である。内外面施釉され る。頸部から胴部は垂直に立ち上がるが、頸部より上は 外側に開く。口縁部上面の中央部は窪んでおり、そこに 一条の黒色の線がある。本来は蓋があったか。轆轤成形 で、内面にはヘラ状工具によるケズリ痕が残る。347は、 壺もしくは甕である。内外面施釉される。346と同じく 頸部から外側に開く器形である。17世紀。348は、茶入 である。器壁は薄く,胴部は丸みをおびる。轆轤成形で, 内面にはヘラ状工具によるケズリ痕がある。外面底部に は、白色土が塗った状態で焼かれている。17世紀~18 世紀。349は、人吉の陶器壺もしくは甕である。厚手で、 粘土紐の間は平らに成形しない。17世紀。350は、産地 不明の陶器碗である。薩摩の竪野系か苗代川系の可能性 がある。総釉で畳付は釉剥ぎされる。内面には5か所に 貝目が残る。17世紀後半か。351は、琉球陶器の土瓶の 肩である。18世紀。

352~359は、薩摩焼と呼ばれる薩摩の陶器のうち苗 代川系の陶器である。352 は、甕である。口縁部はT字 形なる。19世紀。353は、擂鉢である。口縁部はくの字 に曲がる折り曲げ口縁である。外面胴部には条線状の工 具痕がある。17世紀後半~18世紀前半。354は、土瓶 蓋である。外面のみ施釉される。上面には、重ね焼きし た際の痕跡が残る。18世紀後半以降。355は、土瓶であ る。堂平窯で焼かれたものと考えられる。注口の内側に は茶漉し等の穴はない。被熱しており、釉薬はただれて いる。17世紀後半。356は、鉢である。口縁部は内側に やや張り出し,外側は中央部がへこむ。口縁部の上面に 重ね焼きのための貝目が残る。17世紀後半~18世紀前 半。357は甕である。18世紀~19世紀。358は、鉢ま たは擂鉢である。胴部外面には条線状の工具痕が残る。 19世紀。359は、片口の擂鉢である。薄手で小型。19 世紀。

360~362 は、ドイツ連邦共和国のラインラウト地方の塩釉炻器瓶である。肩部に把手をもち、底部に糸切り痕が残る焼き締め炻器である。いずれも胎土が灰色できめが細かい。外面には薄く赤褐色~褐色の薄い釉薬が掛けられる。内面調整は、引き上げ痕がみられるなど粗雑である。口縁部には、コルク等で蓋をしていたと考えられる。360 は底部である。内面は露胎。まず円盤状の底部を作り、その周囲に粘土を貼って引き上げて成形している。361 は、胴部~口縁部である。被熱しており、釉薬はただれている。内面は露胎。362 は、ほぼ完形の瓶である。内面も施釉されている。外面は、釉薬として用いられた塩の粒が文様状にみえる。胴部には穴が穿たれている。胴部の上部には胴部には商標と考えられ





第81図 御角櫓跡 出土遺物2





第83図 御角櫓跡 出土遺物4



第84図 御角櫓跡 出土遺物5

るマークがあり、円の中に、中心に大、その周囲には、SELTZERの文字が刻まれる。SELTZERは、元々ドイツ連邦共和国のヘッセン州にあるリンブルグ・ヴァイブルグ地区のニーダーセルターズで産出され、17世紀から世界各地に輸出された鉱泉水のことを差し、現在でもドイツ語では炭酸水・ミネラルウォーターの一般的な名称の1つとしても使用されている。その下には、「HERZOGTHUM NASSAU」刻まれる。HERZOGTHUM NASSAUは、ドイツ連邦の加盟国であったナッサウ公国(現在のドイツ連邦共和国ヘッセン州とラインラウトプファルツ州までの一部)のことで、1806-1866に存続した公国である。ナッサウ公国は、ニーダーセルターズを領土とし、この鉱泉水を炻器瓶につめて輸出していた、この瓶は、その輸出されたドイツの鉱泉水の瓶である。19世紀第1~第3四半期。

363~446は瓦である。363~381は、軒丸瓦・鳥伏 間瓦である。363 は、連珠三巴文鳥伏間瓦 (A-014) で ある。大型で、厚く上下が下に続いている。 連珠は少な く立体的。巴は文径のわりに小型で、あまり立体的に ならない。364は、陶器瓦の連珠三巴文軒丸瓦(A-029) である。陶器瓦としては、やや大型で, 瓦当周縁は広 く, 瓦当は薄い。連珠は小型で, 巴紋は長く巴文同士が 繋がる。同様の文様は、苗代川系の堂平窯跡では出土し ていないことから,田ノ浦窯で製作された可能性がある。 365 は, 連珠三巴文鳥伏間瓦 (A-067) である。小型で, 363 のように上下両方から下段に続いておらず、上部の み瓦当上端のやや下から下部に続いている。366は、連 珠三巴文軒丸瓦 (A-021) である。連珠は小さく巴は先 端がやや尖っており長い。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏 側は、周縁に沿って強くナデられており、その部分が一 段低くなっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目 立つ。長崎で製作されたと考えられる。367は、連珠三 巴文鳥伏間瓦 (A-022) である。焼成はやや良好。瓦当 文より上の周縁は広く, 裏側は, 瓦当上端よりやや下 側と瓦当下端から下に続く。368は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-029) である。連珠は小さく巴は先端や尖っており長 い。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は、周縁に沿って強 くナデられており、その部分が一段低くなっている。胎 土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作さ れたと考えられる。369 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-058) である。瓦当は厚く、幅の割に重い。瓦当は連珠・巴も 立体的で文様区表面には雲母子が目立つ。370は、連珠 三巴文軒丸瓦(A-032)である。非常に大型で瓦当も厚い。 周縁の内側の一部には、工具による条線状の調整痕が残 る。371 は、連珠三巴文軒丸瓦 (A-066) である。胎土 は灰白色で、表面には雲母が目立つ。長崎で製作された と考えられる。他の長崎瓦と比較すると、巴の頭は尖っ ておらず, 巴同士の間隔は開いている。 瓦当もやや狭く,

瓦当裏面の周縁も強くナデられているが, 一段低くまで はなっていない。372~374は、A種の連珠三巴文軒丸 瓦だが、型式不明のものである。372は、小型だが周縁 が広い。373 は、胎土が灰白色で、表面には雲母が目立 つ。長崎で製作されたと考えられる。374は、17世紀代 の古瓦である。小型で瓦当は薄く,表面にはカンラン石 が多くみられる。薩摩以外で製作された可能性がある。 375 は, 牡丹紋鳥伏間瓦 (B-016) である。大型で, 厚手。 文様区上部の周縁は広い。瓦当裏側の上端からやや下か ら下に繋がる。376は、牡丹紋軒丸瓦 (B-012 と似るが 未分類)である。大型で, 瓦当裏面は調整をきれいに ナデ消しており、丁寧な作りである。377は、牡丹紋軒 丸瓦 (B-007) である。大型でやや厚手。瓦当裏面は調 整をきれいにナデ消しており、丁寧な作りである。378 は、牡丹紋軒丸瓦 (B-015) である。瓦当の周縁は狭い。 瓦当裏面は調整をきれいにナデ消しており, 丁寧な作り である。丸部から瓦当にかけては上に反る。凹面には, 横方向の条線状の調整痕がある。379は、牡丹紋軒丸瓦 (B-001) である。大型で、やや厚手。瓦当裏面は調整を きれいにナデ消しており、丁寧な作りである。欠損して いる瓦当と丸部との接合部では、接合のための細かいカ キメがみられる。380は、その他の軒丸瓦(C-015)で ある。薩摩以外で製作された可能性がある。381は、そ の他の軒丸瓦 (C-009) である。文様は、十字の端部が 左右に開いて三つ叉になる連珠花十字紋である。十字の 間には連珠が4つ入る。花十字紋の文様は複数あるが, 鹿児島白二ノ丸跡G地点など、鹿児島県内の出土例は全 てこの文様である。瓦当周縁はやや広い。瓦当裏側は, 周縁に沿って強くナデられており, その部分が一段低く なっている。胎土は灰白色で、表面には雲母が目立つ。 長崎で製作されたと考えられる。

382~415は、軒平瓦または軒桟瓦で一部袖瓦や谷瓦 が含まれる。383~400,408~412は,瓦当は顎貼付 けで,401~407までが瓦当貼付けである。382は、大 坂式軒谷瓦 (A-005) である。寄棟屋根や入母屋屋根の 四隅などに用いられる谷瓦のうち、軒先のものである。 瓦当上端は面取りされる。瓦当周縁は広い。焼成は良好。 383 は、大坂式軒袖瓦 (A-013) である。切妻屋根の建 物の四隅に葺かれる袖瓦のうち、軒先のものである。瓦 当上端, 瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当周縁部は広 い。384 は、大坂式軒桟瓦 (A-047) である。瓦当上端 と文様区上面は面取りされる。焼成は非常に良好。表面 には雲母子が目立つ。胎土はやや灰色が強く、大坂で製 作された可能性がある。385 は、大坂式軒平瓦 (A-046) である。瓦当上面は幅広に面取りされる。凹面周縁は面 取りされ、縦方向のケズリの痕が残る。386は、大坂式 軒桟瓦(A-048)である。瓦当上端は面取りされる。焼 成は良好。凸面には、横方向のナデ調整が残る。387は、

大坂式軒桟瓦(A-061)である。瓦当上端は面取りされ る。焼成は良好。瓦当の周縁部は狭い。瓦当の裏面は 直線的である。388 は、大坂式軒桟瓦(A-062)である。 瓦当正面は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。瓦当 の裏面は直線的。389 は,大坂式軒桟瓦(A-065)である。 瓦当上端は面取りされる。被熱しており, 橙褐色に変色 している。390は、大坂式軒桟瓦(A-051)である。瓦 当上端は面取りされる。 瓦当の左右周縁は広く、右周縁 に四角に記号の刻印(刻印084)がある。瓦当右上端部 は, 凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江戸切り), 凹面周縁も面取りされる。391は、鹿児島式軒平瓦であ る。瓦当上端は面取りされる。瓦当右周縁に丸に休の刻 印(刻印039-1)がある。被熱しており、橙褐色に変色 している。392·393は、大坂式軒桟瓦(B-015)である。 瓦当上端は面取りされる。392は、瓦当右上端部は、凹 面尻側に向かって三角形に面取りされ (江戸切り), 凹 面の周縁も面取りされる。瓦当右周縁には、丸に休の刻 印 (039-2) がある。393 は、長さ・幅の全体がわかる 資料である。尻側には、2か所に直径1.5cmの釘穴が穿 たれる。394·395は、鹿児島式軒桟瓦(B-017)である。 瓦当上端は面取りされる。瓦当左右周縁は広い。瓦当右 上端部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ(江 戸切り), 凹面の周縁も面取りされる。396は, 鹿児島 式軒桟瓦 (B-020) である。瓦当上端はわずかに面取り される。焼成は良好。397は、鹿児島式軒桟瓦 (B-026) であえる。瓦当上端は面取りされる。398は、小型の鹿 児島式軒桟瓦(B-024)である。瓦当上端は面取りされる。 瓦当左右周縁は広い。瓦当右上端部は、凹面尻側に向 かって三角形に面取りされ (江戸切り), 凹面の周縁も 面取りされる。尻は、直径 1.5cm の釘穴が穿たれる。凹 面の瓦当付近を除いて被熱しており、被熱部分は橙褐色 に変色し、凸面は変色していない物の炭化物が付着して いる。399は、鹿児島式軒桟瓦 (B-018) である。瓦当 上端は面取りされる。瓦当左右周縁は広い。瓦当右上端 部は、凹面尻側に向かって三角形に面取りされ (江戸切 り), 凹面の周縁も面取りされる。400は, 鹿児島式軒 桟瓦 (B-019) である。凹面の周縁は面取りされる。401 は、大坂式の変形の軒平瓦 (C-004) である。大型。瓦 当上端は面取りされる。 瓦当は薄く, 瓦当裏側は直線的 に立ち上がる。凹面周縁は面取りされる。402・403は, 大坂式の変形の軒平瓦 (C-006) である。瓦当上端は面 取りされる。瓦当は薄く, 瓦当裏側は直線的に立ち上が る。凹面周縁は面取りされる。404は、大坂式の変形の 軒平瓦 (C-005) である。C 種の中では小型である。瓦 当上端は面取りされる。焼成は良好。405・407は、大 坂式の変形の軒平瓦 (C-007) である。大型で文様も大 きい。瓦当上端は面取りされる。焼成は良好。406は, 大坂式の変形の軒平瓦 (C-008) である。瓦当上端は面 取りされる。瓦当は薄く,瓦当裏側は直線的に立ち上がる。凹面周縁は面取りされる。408 は,その他の軒平瓦 (D-002)である。大型で瓦当は直線的で厚い。瓦当上端は面取りされる。瓦当周縁は広い。焼成は良好。409 は,その他の軒平瓦 (D-003)である。瓦当上端・瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。胎土は灰白色で,表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。410 は,その他の軒平瓦 (D-005)である。瓦当上端・瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。胎土は灰白色で,表面には雲母が目立つ。長崎で製作されたと考えられる。

411 は、その他の軒平瓦(D-005)である。小型で瓦当は薄い。瓦当上端・瓦当裏側下端は面取りされる。瓦当の左右周縁は広い。胎土は長崎瓦と同じ灰白色で表面に雲母が目立つが、色調はやや暗い。同笵と思われる瓦当型式が熊本県天草郡苓北町の富岡城跡で出土しており、天草で製作されたと考えられる。412 は、その他の軒桟瓦(D-009)である。瓦当正面は面取りされる。胎土は暗灰褐色であり、薩摩以外で製作された可能性がある。

413 は、小菊瓦(K-02)である。瓦当からまっすぐ尻に伸びる。凹面には布袋痕が残る。凸面には縦方向のケズリ痕が残る。414 は、小菊瓦(K-01)である。瓦当肩尻に向かって三角形に伸びる。415 は、小菊瓦(K-17)である。

416 は、丸瓦(丸瓦A)である。薄手。凹面には布袋痕が残る。玉縁と玉縁との接合部には、強いヨコナデの痕が残り、それより頭側には縦方向のケズリ痕が残る。417 は、丸瓦(丸瓦C)である。凹面には布袋痕が残る。玉縁と玉縁との接合部には、強いヨコナデの痕が残り、それより頭側には縦方向のケズリ痕が残る。418 は、丸瓦(丸瓦A)である。大型で厚い。凹面に布袋痕はなく、横方向に条線状の調整痕が残り、調整は粗い。凸面は、ケズリ痕などがナデ消されており、丁寧に仕上げられている

419・420 は、刻書瓦である。419 は、海鼠瓦である。「~作」と刻書がある。瓦職人または瓦葺職人の名前か。420 は、平瓦である。凹面の周縁は面取りされる。横方向のナデの痕が残る。凸面も周囲は面取りされ、中央には「八左衛門」の刻書がある。瓦職人または瓦葺職人の名前か。

 $421 \sim 427$ は、平瓦・桟瓦・袖瓦である。421 は、平瓦 (平瓦 D) である。大型で、厚手。凹面瓦当周縁は面取りされる。大型建物に葺かれたと考えられる。尻側に隅丸方に太左衛門の刻印(刻印 026-6)がある。422 は、平瓦 (平瓦 E) である。大型だが、薄手。凹面周縁は面取りされる。凸面には、横方向の条線状の調整痕が残る。被熱しており、橙褐色に変色している。423 は、平瓦 (平

瓦D)である。大型で厚手。凹面の周縁は面取りされる。頭側に漆喰が残っている。424 は、平瓦(平瓦Fまたは G)である。小型で薄手。凹面の周縁は面取りされる。胎土は灰褐色できめが細かい。薩摩以外で製作された可能性がある。425 は、桟瓦である。頭側面に長の刻印(刻印059)の刻印の下半分がある。瓦当周縁は面取りされる。凹面の左右には、瓦を葺いた際の漆喰が残る。凹面は頭周縁に縦方向のナデ、凸面には横方向のナデの痕が残る。426 は、袖瓦である。凹面は面取りされる。袖垂れは貼付けで、接合部分には強いナデの痕が残る。427 は、桟瓦である瓦当周縁は面取りされる。凹面・凸面に横方向のナデ痕が残る。丁寧に成形される。胎土が灰褐色で、黒色粒子が入る。薩摩以外で製作された可能性がある。

428~433は、塀瓦・海鼠瓦である。428は、欠損部分に接合のためのカキメがみられることから、塀瓦と考えられる。大型で厚手。尻側には、直径2cmの釘穴が焼成前に穿たれる。429~431は、海鼠瓦である。全て隅角部分に焼成前に釘穴が穿たれている。釘穴は上面が直径3cmで、裏側は1.5cmと狭くなる。全て被熱しており、赤~橙褐色に変色している。裏面には、文様状に3~4条のカキメが残る。元々滑り止めにためのカキメと考えられるが、文様のように施されている。432は、塀瓦である。大型で厚手。上面の周縁は面取りされる。右側縁には釘穴が焼成前に2か所穿たれており、中には釘が残っている。433は、塀瓦である。塀瓦の中では小型である。

434~437は、陶器瓦・朝鮮系瓦である。434・435は、 陶器瓦の丸瓦である。成形は粘土紐巻き上げ技法で、凹 面には、粘土紐を積み上げた部分に強いヨコナデ調整が 残る。434の凸面は釉尻ハート型に釉薬が2条流し掛け されており、435 もそれが垂れたものがかかっている。 434 は、堂平窯跡では確認されていない、丸に一の刻印 (刻印 089-1) がある。どちらも田ノ浦窯系の釉薬瓦と 考えられる。435 は被熱しており、釉薬がただれている。 436・437は、陶器瓦の平瓦である。437は、凹面に釉尻 ハート型に釉薬が二条掛けられており、436も釉尻はわ からないが、それが垂れたもので、床にたまったためか 頭側面にも釉薬がみられる。どちらも田ノ浦窯系のもの と考えられる。凹面周縁は面取りされる。436は、凹面 に周辺は横方向でそれ以外は縦方向の刷毛状の工具痕が 残り、凸面には、横方向の条線状の工具痕が残る。437 は被熱しており、釉薬がただれている。438は、朝鮮系 瓦の丸瓦である。凸面には,不定方向のタタキが文様状 になり、工具によって複数の平坦な面ができる。凹面に は, 布袋痕が残る。

439~446 は、鬼瓦・鬼板瓦である。439 は、鯱瓦か。 外面には、沈線が交差して刻まれる。鱗を表現か。440 は、 鬼板瓦である。牡丹紋が貼付けられる。441 は、鬼板瓦

である。外面に貼られた文様は、鬼などの眉毛や花など を表現か。442は、石製の鬼板瓦である。組合式で、雲 などの文様が表現されている。背面にはセメントが張り 付いており, 近代のもの, もしくは近代に再利用された ものか。443は、鬼板瓦である。文様が線刻で表現され ている。444 は、鬼瓦である。直径 2cm の釘穴が焼成前 に穿たれている。445は、鬼面の鬼瓦である。吽形の鬼で、 頭には3本の角をもつ。通常の鬼瓦よりも南九州に多い 神社などの面に近い面相である。上面には直径約4.5cm の穴が2か所穿たれており、角などを差し込んでいた可 能性と、釘穴として利用し屋根に固定したかのいずれか であろう。裏側は板状になっており、その中は空洞であ る。446は、鬼面の鬼瓦である。阿形の鬼瓦で、大きな 歯をもつ。板状瓦に口等を貼り付け鬼面側を作り、裏型 側には中央の把手と外枠に合わせて板状に粘土を貼って いる。軽量化のためと考えられる。口には漆喰が詰まっ ており, 面相が見えない。壊れた後, 何らかの形で再利 用したものか。

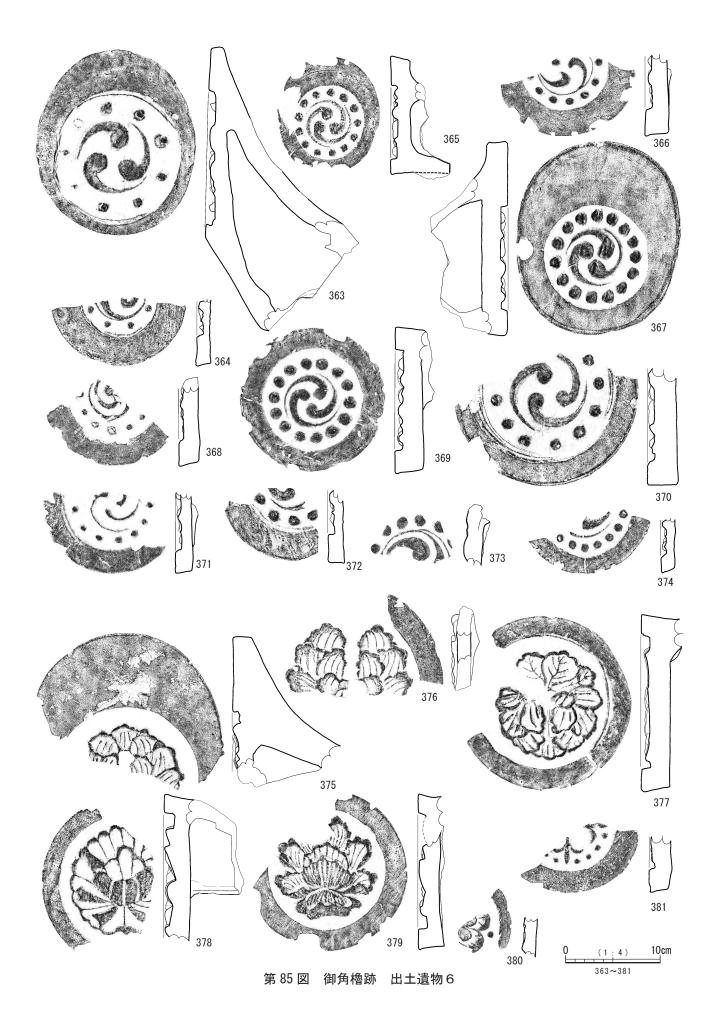
447~449 は、土製品で、450 は石製品である。447 は、 鞴の羽口である。熱を受けて赤褐色に変色している。中 央には2cm~2.5cmの穴が穿たれる。448 は、鉢である。 植木鉢か。底部に直径1.8cmの穴が焼成前に穿たれてい ることから、底部に糸切り痕、内面・外面にも横方向の ナデ調整の痕が明瞭に残る。外面は、底部を除き赤色顔 料が塗られている。449 は、土錘である。450 は、不明 石製品である。表面は面取りされ、多角柱に成、頂部は 丸く仕上げられている。

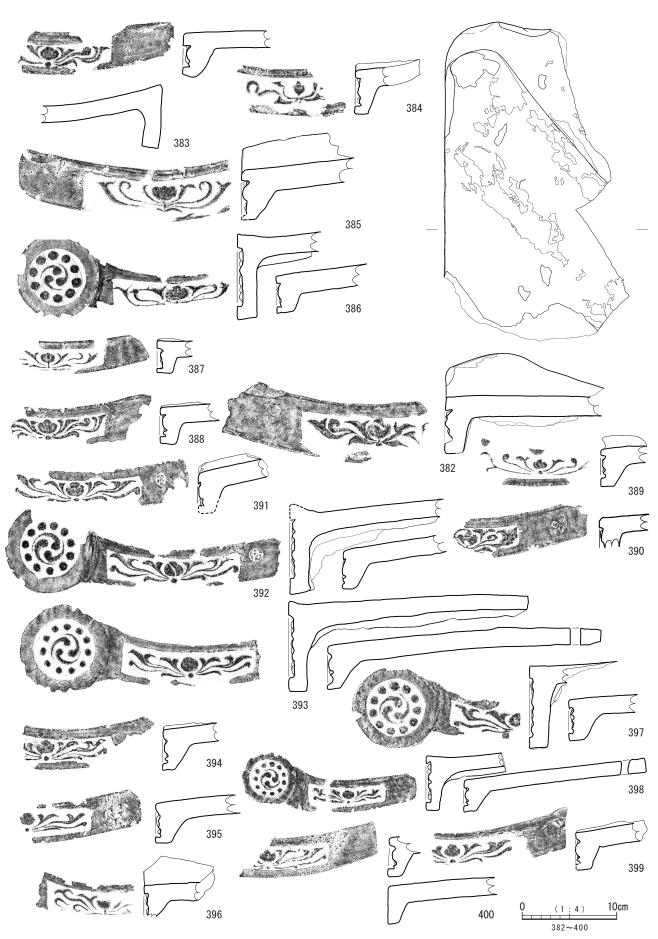
 $451 \sim 457$ は、金属製品である。451 は、銅銭である。小型で周縁がすり減った新寛永通寶である。私鋳銭か。452 は、銅製釦か。五芒星が浮き彫りされる。 $453 \cdot 454$ は銅製キセルである。454 は木の柄と組み合わせる。455 は、銅製鍵または飾り金具の一部か。456 は、鉄製の飾り金具の一部か。457 は、エンフィールド銃の銃弾である。内部は台形の空洞があり、外側には螺旋状の条痕はない。

458 は、歯ブラシの柄である。穴には銅製のリングが付属している。459 は、獣骨である、イノシシの脚ではないかと考えられる。鹿児島城跡では、獣骨が一定数出土しており、多くはイノシシである。460 は、三角フラスコである。首のところにヤタガラスのマークと「ヤタガラスタナカ」の刻印がある。詳細については不明

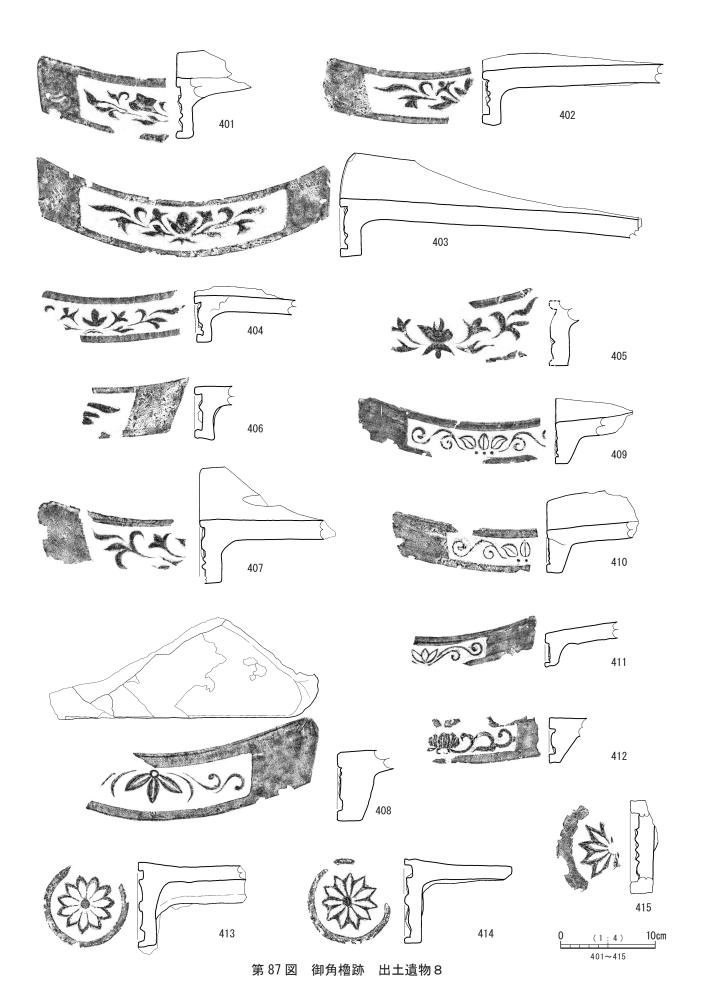
小結

御角櫓は、御兵具所跡と同じく、石垣と一体となった櫓で、基礎石列の周囲には漆喰床である犬走りがあり、その周囲には排水溝が巡らされていることが確認された。この犬走り及び雨落溝である排水溝①を含めると、御角櫓の規模は、南北約21.6m、東西約7.2mである。

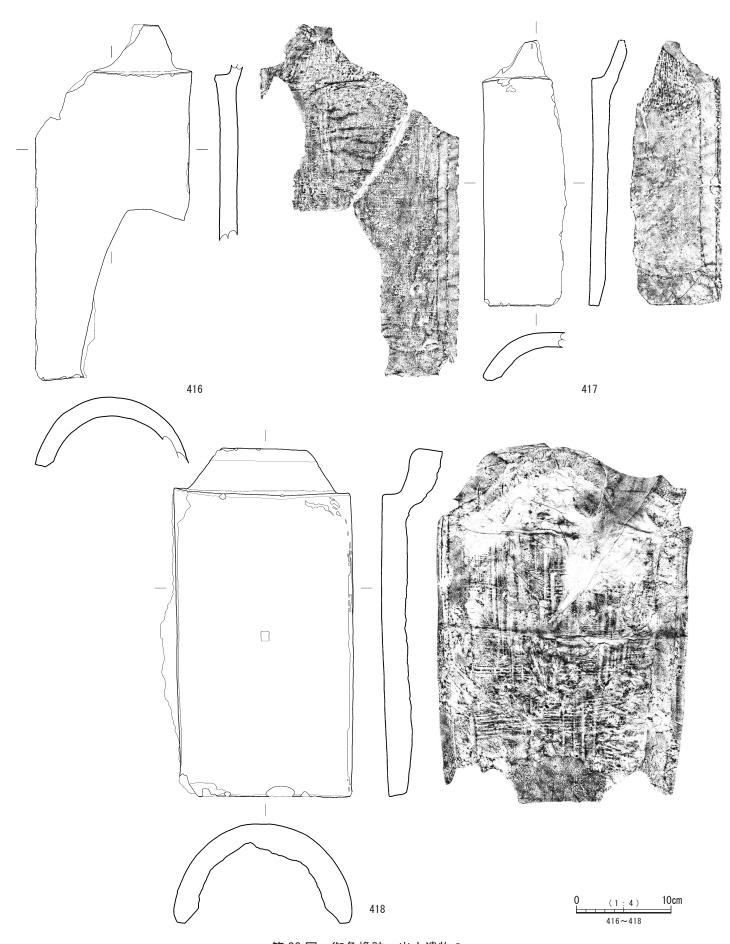




第86図 御角櫓跡 出土遺物7



- 110 -



第88図 御角櫓跡 出土遺物9